

---

# IS ~ インフィニット・バスターズ! ~

結城葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS（インフィニット・バスターズ！）

### 【Nコード】

N5118X

### 【作者名】

結城葵

### 【あらすじ】

織斑一夏は幼馴染みの篠ノ乃箒と共にIS学園へと入学する。

唯一ISを操縦出来る男、棗恭介に再び出会うために。SFだったリバトルだったりラブコメだったりする一夏たちリトルバスターズの日常が始まる！

## プロローグ（前書き）

やってしまった……。。

ワルクラもなのも全然なかなか進まないのに一つ増やしちゃった……。まあワルクラは完結間近だけどリメイク版もあるし……。

でも書きたくなっただから仕様がな！ っていうことにする！

どうか『IS〜インフィニット・バスターズ〜』をよろしくお願ひします！

## プロローグ

あの日。私達の世界は変わった。

小学一年生のとき、私と私の友達、篠ノ乃箒はいわゆるイジメという奴にあっていた。

私は千冬姉が。箒は少し女の子っぽくない喋り方から。

理由なんて本当にくだらな事だけど、彼らにとつたらイジメを正当化出来る理由のようだった。

千冬姉みたいに強くない、私はただそれだけ。それだけで彼らは暴力を振るって来た。

そして、そんな日々が続いて数ヶ月が経ち、小学一年生初の夏休みがあと数週間と迫って来た頃。

あの、いままでが一番辛かった日々。

毎日千冬姉に悟られないように頑張って笑い、千冬姉の見てない所で、箒と二人して俯いていた日々。

いつものようにいじめられていた私たちの前に、五人の男の子達が現れた。

「ああ？ なんだてめー！」

「てめえら！ よわいものいじめして楽しいか！！ そんな奴らは、おれたちがせーばいしてやる！ 行くぞ！ りき、まさと、けんご、りん！！」

真ん中に立っていたすらっとした男の子が叫ぶと、その子の左にいたまさに勉強より運動が好きそうな、黒髪でツンツンした男の子が「ううおおおらあああああああ！！」と、雄叫びをあげながらいじめっ子五人に突進していった。その雄叫びに怯んだ二人がその子の突進をもろに受けて吹き飛ぶ。

今度は彼の反対側に立っていた、竹刀を持ったオールバックの男の子が「めーーん！！」と叫びながらいじめっ子の一人の頭に

竹刀を打ち付けていた。……打たれた子はもの凄く痛そうにのたうち回りながら泣いていた。

その二人のど真ん中に立っていた、さっきの男の子が一人のいじめっこを蹴り跳ばしていると、筈みたいにポニーテールにした男の子が一人のいじめっ子にハイキックを打ち込んでいた。

最後の一人は最後まで申し訳なさそうな顔をしながらそれを見ていた。

「くっ……いつてええ……な、なんなんだよ！ お前らは！！」

ひとりのいじめっこがそう叫ぶと、リーダーっぽいさっきのすらすとした男の子がニヤリと笑った。

「おれたちか？ おれたちは悪をせいばいする正義の味方。ひとよんで……」

自信満々、と言った風に胸を張り、いじめっこにむけて手を突き出し、叫んだ。

「リトルバスターズさ！！」

いじめっ子たちは何故か驚いていた。

「り、リトルバスターズだって！？ あ、あのイジメとかしてるやつをせいばいしに行ったり、たまにクマをたおしに山に入っておこられた事一〇回以上とか意味不明な記録を作ってるあのリトルバスターズ！？」

「だ、だめだ！ かないっこねーよ！！」

「にげるー……！！」

そう言っただけで彼らは逃げ帰った。

彼らが逃げていくのを笑いながらしばらく見ていると、リーダーっぽい男の子が、

「さて。本来のミッションにもどるぞ！」

そう言っただけで彼は私たちの元に歩いて来た。そしてこちらに手を伸ばす。

「強敵があらわれたんだ！ きみたちの力がひとつようなんだ！」

私達は思わず呆気にとられた。

「きみたちの名は？」

「え……あ……お、おりむら……いちか」

「……ほうきだ」

「よし、いくぞ、いちか！ ほうき！」

そう言っただけは一方的に私たちの手を掴んで、私達を引きずるように走り出す。私達は抵抗するという思考すら奪われていた。そしてようやく開いた口から出たのは、

「ね、きみたちは！？」

それを聞いた彼は、聞いてなかったのか？ と意外そうな顔をしたかと思うと、再び笑顔に戻って、

「おれたちは悪をせいはいする正義の味方。ひとよんで……リトルバスターズさ！！」

私達がたどり着いたのは、知ってはいたけど来た事のない神社、の裏だった。

そこには蜂の巣があった。まさしく強敵だった。

「よし、いくぞ！！」

とリーダーっぽい男の子が言うと、五人全員が蜂に効く殺虫剤をどこからともなく取り出し、蜂の巣に向かって行った。私達は再び呆気にとられて、隠れていた草の中でただ呆然と彼らを見ていた。

……結果は当然惨敗だった。

私たちの元に戻って来た彼らは息を切らしてボロボロだった。

悔しそうに蜂の巣を睨みつけ挫けかける彼らの中で、いち早く復活し、再び戦う決意をしたのは、あの黒髪ツンツン頭で大柄な男の

子だった。彼は突然上着を脱ぎ出し（何故かは今でも分からない）、身体に陽動用のハチミツを塗りたくって振り返り親指を突き上げて見せながら言った。

「あとは、たのんだぜ」

そう言うつと彼は蜂の巣に向かって果敢に突撃していった。雄叫びをあげながら。

当然のように蜂に群がられた。

それを見たリーダーっぽい子が取り出したるはチャッカマン。そしてその向けられた先には、さつき竹刀を持っていた子がノズル付きの殺虫剤を向けていた。彼が奮闘している蜂の巣に。

「まさか、おまえの犠牲は忘れん！」

竹刀を持っていた子が殺虫剤を発射し、さらにリーダーっぽい子がチャッカマンのスイッチを押して火を出す。その先は……当然火炎放射となる。火が向かって言った先にはさつきの男の子。

ボウツ！ と、蜂の巣は彼ごと燃えた。

「うおおおおおおお！！　んなこと頼むかあああああああー  
ーッ！！」

……あの火柱となりながらツツコミを入れる彼、井ノ原真人の姿は今でも忘れられない。

その後は、当時男の子だと思っていた女の子、棗鈴が真人を蹴り飛ばした。まあ結果的にそのおかげでゴロゴロと転がり、火は消えて彼は助かった訳だが。

正直、最初から最後まで私達二人は啞然としていた。言葉なんかでなかった。一方的にリーダー、棗恭介に入れられた、マスコミの人がとった記念写真（？）でも、私達は驚き続けていた気がする。

あの日から私と篤は、リトルバスターズのメンバーとなっていた。半ば強制的なものだったが、後悔はしていない。イジメはすっかり無くなったし、彼らとの日常は毎日がお祭り騒ぎでとても楽しかった。篤がお姉さんの事情でどこかに行ってしまった時も一緒にいてくれた。その後に来た鳳<sup>ふあん・りんいん</sup> 鈴音のイジメも私達で解決した。当然な

から彼女もリトルバスターズのメンバーになった。

そして　一歳年上の恭介がそろそろ中学生になろうかと言う時、恭介と鈴がお母さんの事情でフランスへと引越す事になった。

そのとき鈴音（同じ『鈴』だから、私達は鈴音と書いて『すずね』と呼んでいる）が泣きながら何やら恭介と話していたが、何を話していたかは聞けなかった。戻って来た時はやけに嬉しそうだったけど……。

私が恭介の事が好きだ、って自覚したのは恭介がフランスに行って五日経った後だった。そのとき、きつと鈴音も篤も恭介の事が好きなんだろう、となんとなく分かってもらった。それは二人も同じ事だと私は思う。

恭介がいない。それだけでリトルバスターズのみんなは少しだけ元気がなくて、不安げだ。でも……誰も寂しくはない。鈴音は途中で一回中国に帰ってしまったけど、理樹や鈴たち、残ったリトルバスターズのメンバーもいる。それに、

『俺はリトルバスターズを世界にまで広げ、世界の正義を守っていく！！　だから、また会うその時まで、日本の正義はお前たちに任せる！！』

恭介はそう言ってフランスへと旅立っていった。

あれは私だけに向けられた物じゃない。リトルバスターズのみんなに向けられた言葉だ。

でも、私にはなんとなく、この言葉が特別に思えたんだ。そうでなければ、今この瞬間までの心の支えにする事は出来なかったに違いない。

『I S 学園』。

私はそこに入学する。

最初はあまりいつもと変わらない。いつも通り、とつまらなそうに思っていたが、今ではとにかく楽しみでしようがない。

だって、帰って来たらしい篤も一緒だ。それに、

『世界で唯一I Sを使える男、棗恭介』



大好きな彼も、一緒なんだから。

## 第1話「初日と再会と窓から現る我らがリーダー」（前書き）

恭介の専用機どうしようかな。OOとW、どっちも考えてあるんだけど……。中の人的に言ったらWなんだろっけどなあ……。あと恭介の喋り方うまく書けるか心配です。

## 第1話「初日と再会と窓から現る我らがリーダー」

IS学園初等科一組では、ホームルームが始まっていた。

教壇に立っているのは身長とバストが釣り合っていない、グリーン  
のショートヘアーで眼鏡をかけた女性だ。

「皆さん、入学おめでとう。私は副担任の『山田<sup>やまだ</sup>真耶<sup>まぜ</sup>』です」

……と、真耶は言ったのだが、クラス全員全く別の方に思考が行  
っていた。

当然。棗恭介に。

「あ、え……きよ、今日から皆さんはこのIS学園の生徒です。こ  
の学園は全寮制。学校でも放課後も一緒です。仲良く助け合って、  
楽しい三年間にしましょうね」

涙目だった。

「じゃ、じゃあ、自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で

……」

真耶がそう言うと、隅の方の席の一番前に座っている女生徒から  
自己紹介が始まる。

その頃、一夏は全く別の事を考えていた。

(恭介いない……って、よく考えたら恭介って私達より一個上だか  
ら二年生だよな。同じクラスじゃないのは残念だけど……あとで探  
しにいつてみようかな)

「……斑さん。織斑一夏さん!!」

「!?!? はっ、はい!?!?」

思考の海から無理矢理引き戻された一夏は、思わず裏返った声を  
出してしまった。

周りの女生徒たちがくすくすと笑う。

「ご、ごめんね? 大声出しちゃって……。でも、『あ』から  
始まって、今『お』なんだよね。だからね? その……自己紹介

してくれるかな？　だ、ダメかな？」

「い、いえ、あの、そんなに謝られなくても自己紹介はします……すいません、ちょっと考え事してた物で……」

「ほ、本当？　本当ですね？　約束ですよ！　絶対ですよ！？」

「いや、あの、はい。ちゃんとします……」

一夏は一度咳払いをして、

「えっと、織斑一夏です。趣味は料理、好きな事は剣道、特技はマッサージ……かな？　とにかく、よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げて一夏は席についた。ふう……と安堵の息をつく。

と、同時に教室のドアが開いた。そこからは一夏の見知った黒髪の女性が。

「あ、先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けて済まなかったな」

言いながら女性は真耶の斜め前に立ち、

「諸君、私が織斑千冬だ。きみたち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない物には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠一五歳を十六歳までに鍛え抜く事だ。逆らっても良いが、私の言う事は聞け。いいな」

千冬が放った暴君のような言葉に返って来たのは、何故か黄色い歓声だった。一夏は思わず耳を塞ぐ。

「キヤーーーーーーッ！！　千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！　北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私……千冬様のためなら死ねます！！」

「あれ？　じゃあ織斑さんって千冬様の妹……？」

……千冬姉の気もここまでくるともはや宗教レベルかもしれない……と、一夏は思った。

千冬はうんざりした風にため息をつき、呆れた声を出した。

「……毎年よくもこれだけのバカが集まる物だ。感心させられる。それともなんだ？ 私のクラスにだけ馬鹿者どもを集中させてるのか？」

本当に嫌そうに言う千冬に、思わず一夏は苦笑した。

と、千冬は表情を元に戻し、クラス内を見渡す。

「……チツ、あの『ヴァカ』め……まだ来ていないのか。昔から思っていたが本当に自由な奴だな」

（あれ？ 今確実にバカの言い方がおかしかったよね？ 『バ』が『ヴァ』になつてたよね？）

千冬 of 言葉に一夏がそんな事を思っていると、真耶が口を挟んだ。

「あれ？ 誰か来てない人がいるんですか？」

「ああ……おそらくもうすぐ来るだろうが……ッ！！」

千冬 of 表情が固まった。まさに開いた口が塞がらない感じで。

千冬 of 視線は真つすぐ窓の方。

そこから、タン、と音を立てて何かが大きな物がその窓を塞いだ。

それは、いや、その人は右手にロープを持ち、左手で窓枠を掴み、

黒い制服を着てニヤリと笑っていた。

「すいません、遅れました」

静寂が支配した教室に、よく通る声でその人は言った。

その人は 彼は。

「早く来過ぎて屋上で昼寝してたんですけど、気付いたらこんな時間ですわー。いやー、どうもすいません、千冬さん、あーいや。

織斑センセ」

まさしく、棗恭介だった。

スタン、と教室の床に着地し、彼が話したロープは機械音を鳴らしながら上へと巻かれていった。

（ああ……そういえば小学校の時も、自分の教室からロープを使っ



\* \* \*

二人がボロボロ になる前に、時間が来そうだったので二人の殴り合いは中断された。

恭介の席は何故か一夏の隣だった。名前順のはずだから普通はもつと離れた席のはずなのに、なんで？ と思つて、自分の姉の方を見ると、ニヤリと笑っていた。

(千冬姉の仕業か……)

心の中でサムズアップしながら、授業に集中する。ホームルーム後は話す暇がなかった。

一時間目が終わり、一夏は隣にいる我らがリーダーに視線を向けた。恭介もこちらを向いていた。

「久しぶりだな、一夏」

「久しぶり。相変わらず元気だね、恭介は」

「俺が、というよりはリトルバスターズ全員が、という方が正しいな。俺達から元気をとったら何も残らないと言っても過言じゃない」

「あはは、確かに。特に真人とかはそうかも」

「いや、アイツには筋肉が残るぞ。というよりアイツにとってはどつちも同じなんだろうな」

「……ちよつといいか」

と、恭介の後ろから聞き慣れた声がした。

二人の幼馴染み、篠ノ乃箒だ。

「ああ、箒。久しぶりだな」

「久しぶり、六年ぶりだな」

「六年か……。成長期の人間が成長するには十分な時間だな。一夏も箒も美人になってて、さすがのおにーさんもびっくりしたぜ」

「そ、そうかな……？」

「う、うむ……。しかし、相変わらずお前は私達を子供扱いするんだな」

「子供扱いはしてないさ。一応年上だからな、兄貴分として振る舞ってるだけだよ」

ふと浮かべた恭介の笑顔に、篤はもちろん、周りの女生徒も顔を赤らめる。

……恭介の顔立ちはいわゆる『イケメン』、という部類に入るのだろう。そろそろ死語化してきている言葉ではあるが、この整った顔立ちを指すならばこの言葉が一番になると思われる。

顔だけでもそこそこモテるのだが、リトルバスターズ、なんて正義の味方をやっていた物だから、小学生の頃はかなりモテていた。まあ、半分くらいは理樹と謙吾にも行っていたが。

真人は……残念な物だ。

「ああ、そういえば。篤、お前剣道の全国大会優勝したんだってな。おめでとう」

「!? な、なんで知っているんだ!？」

「新聞だよ、新聞」

「な、なんで新聞なんか読んでいるんだっ!」

「四コママンガ探してる途中で見つけただけさ。結構大きく載ってたぞ」

「やっぱり四コマ目当てだったんだ……」

変わってないなあ……と呟きながら、赤くなる篤を見て笑っていた。

キーンコーンカーンコーン、とチャイムがなった。篤は変わらず頬を赤く染めながら席に戻っていった。

二時間目。隣を見れば恭介がノートを取っていた。

いや、まあ当然と言えば当然なのだが、なんだか一夏には恭介が真面目にノートを取る姿がなんとなくイメージ出来なかったので、少し新鮮に感じた。

というのも、恭介は昔から頭が良かった(その頭も無駄な事に使っていたが)。それはもう、彼が言った『俺はノートを取った事が



ない!』というアホ過ぎる嘘を信じてしまつくらいには頭が良かったのだ。

別に今でもそれを信じてる訳ではないが、その出来事のせいかなんとなくイメージが付かなかつた。

そんな恭介に真耶は、

「棗君、なにか分からない事はありますか?」

と、質問した。

恭介は余裕そうに、

「いえ、今の所は大丈夫です。ありがとうございます」

「そうですね、じゃあもし分からなかつたら遠慮なく聞いてくださいね!」

そう交わすと、真耶は再び黒板に向かった。

「……というより、一応IS開発にかかれるくらいの知識はあるんだけどな……」

……やっぱり恭介の頭は良かったようだ。

二時間目が終わって休み時間。一夏はなんだかんだで聞きそびれていた事を聞いてみた。

「そういえば恭介。なんで制服IS学園のじゃないの?」

そう。彼が来ているのは黒い制服。形も何もかもIS学園の制服とは思えない代物だ(リトバスのいつもみんなが来ている制服を思い浮かべると簡単かと)。

恭介は、ああその事が、と、

「どういう訳か、制服が俺の家に届いてなかつたんだ。仕様がなから前の学校の制服を着て来たんだ。千冬さんの話だと、ちょっとした手違いがあつたらしい。あとで渡してくれるってさ」

「へえ……でも、その制服カッコいいね。共学だったの?」

「ああ。女子の制服も結構可愛かつたと思うぞ。今度写真見せてやるよ」

「本当? じゃあお願い」

「ちょっとよろしくて?」

「ん?」

恭介が振り返ってみると、そこには金色の神を縦ロールにした、何だか偉そうにしている少女がいた。

彼女は続ける。

「聞いてます? お返事は?」

「ああ、すまない。代表候補生に話しかけられるなんて光栄があるとは思ってなかったんでな。少し驚いてしまった。許してくれ、ミス・オルコット」

確実に今時多い部類の女子だ、と見抜いた恭介は少し下手に出る事で流す事にした。

彼女、セシリア・オルコットはそんな恭介を見て少し気分を良くしたようだった。

「あら、分かっていらつしやる殿方みたいですね?」

「イギリスの代表候補生という事を抜きにしても、淑女相手に紳士的になるのは男の義務だろう? それに、入試主席の君がむさ苦しい男である俺に話しかけてくれるだけでも光栄なんだ、これくらいは普通さ」

ますます気をよくしたらしいセシリアは、満面の笑みで、

「ふふ、気に入りましたわ。もしも、ISの事で分からない事があれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくなってよ。

何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「おお……そいつは凄いな。なるほど、さすがは主席という訳か」

と、恭介が言うと同様、三時間目の授業開始のチャイムがなった。セシリアは「また来ますわ」と言い残し、セシリアは席に戻っていった。

入れ替わるように、教室に千冬が入ってくる。

「それではこの時間は、実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

教団について早々に千冬は授業を始めた。真耶はと言うと、手にノートを持ってメモを取る体勢だ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス代表とは、いわゆる学級委員やクラス長といった物と同じ役職だ。仕事としてはクラス対抗戦意外にも生徒会の会議や委員会への出席などがある。

対抗戦の方が重視されるので、基本的に強い生徒が選ばれる事が多いが、

「はい！ 棗くんを推薦します！」

「私もソレが良いと思いまーす」

「あ、私は織斑さんが良いと思うー」

「ええ！？」

「では候補者は棗恭介と織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

当の選ばれた本人達、恭介は「やっぱり来たか……」とため息をつけている。拒否権がない、と察しているのかもしれない。

一夏はと言うと、突然過ぎる展開についていけずにオロオロしている。

すると、突然甲高い声が響いた。

「待ってください！ 納得いきませんわ！」

バン！ と机を叩きながら立ち上がるセシリア。その表情からは少しばかり怒っているのが見て取れた。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ わたくしに……このセシリア・オルコツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリアは続ける。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までES技術の修練に来ているのであって、サー

カスをする気は毛頭ございませんわ！」

……この女……。と、一夏は心の中で呟いた。

一夏のこめかみに青筋が立っていた。残念ながら、一夏は自分の好きな人を極東の猿と言われたあげく、

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！ 大体、文化も後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては堪え難い苦痛で」

「イギリスだってたいしたお国自慢ないでしょ。世界一まずい料理で何年覇者やってるの？」

自分の国を侮辱されて黙っていられるほど、心が広い女でもなかった。

「なっ……！？ 貴女！ わたくしの国を侮辱しますの……！」

「先に侮辱して来たのはそっちでしょ？ 自分が侮辱されたらキレるのにこっちはキレちゃいけないのかな？」

「くっ……！ 貴女ねえ……！」

「そこまでだ」

「……！」

間に入った声は千冬の物ではなかった。

「恭介？」

「ミス・オルコット。こちらも君の国を侮辱したのは悪かったが、君も立場をわきまえた発言をした方が良い」

「なんですって？」

「君はイギリスの代表候補生なんだろう？ 言い換えれば君の言葉はイギリスの言葉、そうとられても文句は言えない立場だ。君の発言一つで戦争勃発、なんて事になりかねないんだがな」

「ッ……！」

「君の言いたい事は分かるが、他国への侮辱は君の場合思っても口には出さない方が良い。と、言う訳で」

恭介は席から立ち上がる。

そして一夏や箒にとってはいつもの動作を。つまり、相手に向け

て手を突きつける。

「決闘だ!!!」

「……は？」

クラス全員が呆気にとられていた。思わず一夏と箒も声を漏らしたほどだった。千冬だけは「ほう……」と、何かを察したような表情をしている。

当然、セシリアも呆気にとられている訳で。

「……突然何を言ってますの、あなたは」

「君の言い分だと、強い奴がクラス代表になるべきらしいな？」

「ええ、そうですね。ですから」

「だからこそ決闘だ」

「だからなんでそうなりますの!？」

「分からないか？ クラスから推薦された俺と、クラス最強を名乗るミス・オルコット。強い方がクラス代表になるべきと言うなら、俺とミス・オルコットが決闘すれば強い方が自ずと分かると思わないか？」

ニヤリ、と恭介は笑う。

セシリアは呆気にとられながらも、返すようにニヤリと笑った。

「言いますわね、あなた。良いですわ。その決闘、受けて立ちましよう。ハンデは欲しくて？」

「いや、必要ない。ハンデ無しに自分より強い奴に勝つ、そういう展開の方が燃えてくる」

「面白い、面白いですわね……。いいですわ、わたくしに勝つというのならやってみなさい。わざと負けたりしたら貴方を小間使い……いえ、奴隷にして差し上げますわ!」

「望む所だと言わせてもらっせ」

双方自信満々に笑いあう。

「……話はまとまったな。それでは勝負は次の月曜……第三アリー

ナで行う。第一回戦は棗とオルコット。二回戦は勝った方と織斑だ」  
「私も!？」

「お前も推薦されているだろう？」

……なんだか大変な事になった……、と、一夏は頭を抱えた。

## 第2話「BATTLE STRAT!」

放課後。恭介は教室に残っていた。

別に教室自体に用があつた訳ではなく、とりあえず誰もいなければそれでよかつた。恭介は携帯に耳を当て、遙か遠くにいる仲間と連絡を取っていた。

「そっちはどんな感じなんだ？ 特にクリスカとイーニアだ。アイツらはいいい加減慣れたか？」

「フツ……彼女たちなら楽しそうにやっているよ。まあ、何故か相変わらず私の事は避けるがね」

「……まあ、それは仕様がな。慣れなければお前はただの不審者、いや変態だからな。いい加減自覚しろ、グラハム」

会話の相手、グラハム・エーカーは携帯の向こうでハツハツハ！と笑っていた。彼は美少女よりも美少年に意識の向く、いわゆる『ホモ』の類に類されるであろう男で、恭介の仲間はいいい加減慣れたので普通に接せられるし、数人ほどいる腐女子は仲良く話している。が、やはり慣れないと避けてしまう人物だった。

『変態とは言つてくれるな少年。だが君にならそう言われるのも良しとしよう。私は、いや、正確には私達か。私達は君に心奪われた存在だ。少年がその視線を私達に釘付けにしてくれるならば、私達もそう言われるのは本望だ！』

「いや、確かにうちにはバカばかりいるが、いくらなんでもそんな事言う奴はお前だけだ」

『そうか？ 理樹少年などは結構そっちの趣味がありそう』

「やめる！ その話をする西園辺りが反応するだろー！！」

はあ……、とため息をつき、本題に入る事にした。

「ところで、例のアレはどこまで進んだ？ あれのためにわざわざ木星まで行ってもらつたんだ。そろそろ数は揃つたか？」

『ふむ。その辺りはタバネやカタギリ辺りに聞いた方が詳しく聞け

るだろうが……数自体は揃ったようだ。現在は君の切り札とケルデ  
イム・サバーニヤ、アリオス・ハルートを平行制作中だったはずだ」  
「そうか……マスターは近々見つかるから、出来れば夏休み前ま  
では完成していると嬉しいと伝えてくれ。俺のは特に、な。ゼロ  
ではそろそろ限界だ。俺に付いて来れなくなつて来ている」

『了解した、伝えておこう。ああ、それと。イーニア君だがね、お  
土産を所望しているようだ。今度来れる時にでも持ってくるの良い』  
「分かった。多分ぬいぐるみ辺りがいいだろ。クマのミーシャが大  
好きだからな」

『妥当かもしれないな。まあ、地球付近まで来た時にはまた連絡す  
る。ではな』

「ああ、じゃあな」

ピッ、という電子音と共にグラハムとの連絡を切る。

恭介は一息つくと、荷物をまとめ始めた。

そして荷物を持ち、教室から出ようとドアに手をかけようとす  
ると、独りでにドアが開いた。その先にいたのは 真耶だった。

「山田先生？」

「ああ、棗君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

見ると、真耶は片手に書類と何かを持っている。真耶の存在に関  
しては気配が分からなかったのではなく、単純に気にするほどの物  
じゃない、と判断していたからだだった。

「……部屋でも決まりましたか？」

「あれ、知ってたんですか？」

「いや、俺の事情が事情ですから。無理矢理にでも寮に入れた方が  
安全です」

「ああなるほど。そこまで察してくれていたなら話が早いです。こ  
れ、部屋の鍵と、部屋の番号です」

言つて真耶は恭介に鍵と紙を渡して来た。

「荷物は……運んであります？」

「ああ、手配してある」



と、言いながら真耶の隣から出て来たのは千冬だった。

「そうですか。服とか以外に簡易メンテのとかもですか？」

「ああ。入っていた」

「簡易メンテ？」

二人の会話についていけずに、首を傾げながら口を挟む真耶。

千冬は、ああ、山田君は知らなかったな、と簡単に説明した。

「え、ええ！？ な、棗君って自分の専用機持つてるんですか！？」

「はい。その簡易的なメンテも任されています」

「す、凄いことじゃないですか！」

「コイツは『ヴァカ』だが頭はいい。ISに関してならそこそこの知識は持っているぞ」

「母親と父親がIS開発者だったから勉強する機会が多かっただけです」

「今ではその知識がかなり重要なようだがな？」

「さて、どうですかね」

HAHAHAHA、と笑いあう二人はどこか不気味だった。

「あつ、そうだ。棗君、お風呂なんだけど、棗君は大浴場はまだ使えませんか」

「大丈夫、分かってます。使えるようになったら教えてくれるんですよね？」

「はい、大丈夫です」

「なら十分です。じゃあ、部屋に行つて来ます。荷解きとか、簡易メンテの奴のセッティングとかもあるんで」

「ふむ、そうだな。とつとと行ってこい」

「はいはい」

「『はい』は一回……いや、お前には言っても無駄だな」

「分かってますね」

「分かりたくはなかったがな……」

ため息をつく千冬を見ながらニヤニヤしつつ、恭介は寮の部屋に向かった。

「1025号室……ここだな」

恭介は鍵を差し込む……前に、とりあえずノックしておいた。コンコン、という小気味好い音が響く。

「誰か居るかー？」

……。

返事はない。

気配はなんとなく感じるのだが、聞こえていないのかもしれない。着替えとかされていても困るので、とりあえずもう一回ノックしておく。

……。

やはり返事はない。

仕様がなかったので鍵を差し込みひねる。と、鍵は開いていたように開いた音かと思いきや閉まった音だった。反対側に鍵をひねり、ドアを開ける。

部屋に入って行くと、目についたのは荷物だった。簡易メンテはデータ状でしか行わないので、そんなに巨大な物はない。専用のPCだけが箱には入っているはずだ。

そのまま荷物に近寄り、荷物を確認する。予想通りPCが一つ入っていた。あとは大体服だったり、先日届かなかったIS学園の制服だったり、生活用品ばかりだ。極めて最低限ではあるが。

「千冬さんだな……別に良いけど」

PCに関しては同居人と相談しておく場所を決めなければならないのでとりあえず箱に入れておく。

と、さっきからあった気配が近づいた。

「誰か居るのー？」

……聞き覚えのある声だ。

直感的に振り返るのは危険だと判断する。が、不意打ち気味の声に反射運動を止める事は難しかった。思わず振り向いてしまう。

「同室になった人だよ。これから一年間よろしく」

そこには……湿った綺麗な黒髪をセミロングの長さにした見知った美少女、

「こんな格好でごめんね？ シャワー使わせてもらっちゃった。私は織斑いち……か……」

「……一夏」

の、タオル姿だった。

お風呂上がり、いや、シャワー上がりの一夏は上気した肌が赤く染まり、いつも見るより露出度の高いせいか、かなり色っぽく見えた。

「きよ、きよきよ、恭介……？」

「ああ……」

ボン！ という音でも聞こえそうなほど一気に顔が真っ赤になった。

恭介は凝視したい欲望を押さえつけ、目をそらす。

「あ、あう……み、見られた……？」

「あ、あー。その、何だ。一応ノックと声をかけたんだが……聞こえなかったか……？」

「……うん」

「そうか……。と、とりあえず、服着ろ。後ろ向いてるから」

「う、うん……」

視線を荷物へと向け、身体の奥から沸き上がる興奮を押さえつける。心頭滅却すれば火もまた涼し、などと言うが、まさにその通り。落ち着けば上がっていた体温が一気にもとに戻っていく。

「も、もう大丈夫……だよ？」

「ああ……」

くるりと身体ごと一夏に向ける。

「えつと……恭介もこの部屋？」

「ああ。ここだ。千冬さんの仕事みたいだな」

「そっか……千冬姉ナイス……！」

「？」

何故かガッツポーズをとる一夏に、頭に？をうかべる。

「そうだ同室なんだつたら、シャワーの時間決めなきゃね」

「そうだな……じゃあ、一夏が先で良いぞ。俺はISのメンテを毎日しなきゃならないからな」

「IS？ つて、専用機持ってるの!？」

「まあな。多分、お前にも来ると思うぞ。オルコットと戦つ日辺りにな」

「え、わ、私!？」

「ああ。束が作ってるって言ってた」

「束さん……かあ」

不安でも覚えているのか、それとも別の何かがあるのか、何やら微妙な顔をする一夏。

その後は特別何かがある訳でもなく、恭介がフランスに行つてから何があつたかを恭介が語つたり、逆に恭介がいないときリトルバスターズはどうしていたか、などの話で盛り上がり、IS学園初日は終わったのだった。

\* \* \*

翌朝。恭介と一夏は一緒に朝食をとっていた。

恭介は昨日の黒い制服ではなく、IS学園の真っ白な制服を見に纏っていた。

二人が他愛無い話をしながら朝食をとっていると、簞がやってきた。

「おはよう、恭介、一夏」

「ああ、おはよう」

「おはよう簞」

簞は一夏の隣に座り、朝食の載ったプレートテーブルに置く。

「二人は早いな」

「俺が早起きなだけさ。それに釣られて一夏も起きる」

「……何？」

ピクリ、と箒は肩眉を吊り上げる。

「どういうことだ」

「何が？」

「だから！ それではまるで一夏とお前が同室みたいじゃないか！」

「いや、同室だけだ」

「は……？」

「だから、同室だ。一夏と俺は」

「えっと……ごめんね？」

ぐぐぐ……と何やら唸りながら羨ましそうに一夏を睨む。苦笑いしながら隣の親友に謝罪しか返せなかったのだが、特に反省した様子は無い。

箒は大きくため息をつき、自棄になったのか白米をかき込む。

「箒……そんなに急いで食ったら詰まるぞ」

「そんなへまはしなんツ！？ ん、ん……！！」

「ほら、言わんこっちゃない。そら、大丈夫か？」

水を差し出しながら箒の背中をトントンと叩く。水を受けとった箒は一気に飲み干し、詰まった白米を流すと、流し込むように空気を飲み込む。

「はあ……はあ……」

「箒、大丈夫？」

「ああ……なんとかな。恭介、すまない」

「気にするな。仲間は助け合ってこそだろ？」

「フツ……毎回同じことを言う」

箒は席に座り直し、味噌汁を一口。

すると、聞き慣れた大声が食堂に響いた。

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグラウンドー〇周させるぞ！！」

それを聞いた瞬間、食堂中の女生徒達が朝食を急いで食べ始めた。目の前の箒も同じだ。まさに悪戦苦闘。何度か詰まらせそうになり

ながらも朝食を食べ終えた篤と共に、恭介達は教室へと急ぎ足で向かった。

今日の授業はセシリアが絡んでくる事もなく、順調に進み、あっという間に放課後になった。

今、恭介と一夏、篤は剣道場にいる。恭介は壁に寄りかかり、一夏と篤は防具をつけ、若干肩で息をしながら、竹刀をそれぞれ中段に構え相對していた。

「むう……少しばかり弱くなっていないか？ 一夏」

「あははは……最近ISの事とかあまり竹刀を振る時間なかったからね。結構鈍っちゃって……」

「仕方ない。私が鍛えなおしてやるう。今のままでは月曜日に恭介に一撃与えられるかも怪しい」

「勝てる事前提なんだ……」

「何を言っている。恭介があんな女に負ける訳がないだろう。勝つて当然だ」

「んー……まあ、確かにそうかもね」

「期待大だな。おにーさんプレッシャー感じちゃうぜ」

「お前の辞書にプレッシャーなどという言葉はない」

「おいおい、俺だっていつも完璧な訳じゃないんだぞ？」

「そう言いながら自分が完璧だ、って言ってる辺り恭介らしいけどね」

「俺は完璧だ、そう思ってた方が楽しいだろ？」

はっはっは、と笑いながらそう言う恭介。それに釣られて笑みがこぼれるのはやはり恭介だからなのか、と二人は思う。

防具を外しながら、一夏がそういえばと切り出す。

「恭介の専用機ってどんなの？ 持ってるって言ってたよね」

「それは内緒だ。理由はもちろん、その方がカッコいいからだ」

「いや意味分かんないけど……」

「つまり、決闘当日のお楽しみってことだ」

「いじわるだなあ」  
「楽しみは取っておかなくちゃつまらないだろ？」  
「まあ良いじゃないか。どうせ月曜日に見られるのだ」  
「むう……まあ、それもそうだね」  
垂れまで防具を外し終わり、綺麗に片すと、二人は更衣室へと入っていった。

\* \* \*

一週間後。

恭介は第三アリーナのピット搬入口にいた。現在恭介は自分の専用機の最終調整を行っている。

「マグネットコーティング……OK。翼状同調システム……OK。  
ツインドライブ同調率……安全領域。ゼロシステム……OK。各武装異常なし。全システムオールグリーン……。行けるな……」  
「終わったか」

恭介の後ろから声をかけて来たのは千冬だった。隣には真耶、一夏、箒がいる。

「異常なし。いつでも行けるぞ」  
「そうか……。なら棗、ISを展開しろ」  
「了解」

恭介は簡易メンテ用のPCに繋いでいた、猫が丸い枠から顔を出したエンブレムの付いたネックレスを手取る。

「行くぞ……ゼロ」  
恭介の声と共に、待機状態だったISが展開した。  
恭介の身体を青と白の装甲が包んでいく。

「これは……全身装甲！？」  
「凄い……」

頭部はV字のアンテナが立ち、緑に輝くツインアイ。そして一番目を引くのはその背中にある巨大な白く輝く八枚の翼だった。緑の

粒子を放つ翼が揺れるたびに、何故か羽が落ちているような光景を  
幻視する。その姿はまるで

「天使みたい……」

一夏が小さく呟く。

「よし……行けるな、ゼロ」

恭介はそう呟きながらピッチゲートの前に立つ。

「恭介……勝ってこい」

「当然。俺を誰だと思ってるんだ？」

顔の白い装甲の中でニヤリと笑う。

恭介は視線を前に戻し、自信に満ちた声で言う。

「棗恭介、ウイングガンダムゼロ・パーフェクトカスタム。出る！

」

白き翼を持つ天使は、戦いの場へと飛び立った。



### 第3話「破壊天使と蒼い雫と白き騎士と」

「あら、逃げずに来ましたのね……ふ、フルスキ全身装甲？」  
待っていたセシリアは蒼いISを身にまとい、少し戸惑った声を出した。

『ブルー・ティアーズ』

特徴的な四枚のファン・アーマーが背に従うように浮遊し、その手には二メートルを超す銃器、『スターライトmk?』。射撃主体の機体である第3世代型ISだ。浮遊しているファン・アーマーは機体名と同じ名称の兵器、試作BT兵器『ブルー・ティアーズ』というビット型兵器だ。

「決闘ダンスに誘っておいで来ない訳にはいかないさ」

「ふふ、その度胸だけは認めて差し上げますわ。それに免じて最後のチャンス差し上げましょう」

「ほう……どんなチャンスをくれるんだ？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、今ここで謝るといふのなら、許してあげない事もなくてよ」

試合開始の音が鳴っているにも関わらず、セシリアは腰に手を当てて人差し指を恭介に向けながらそう言った。

そんなセシリアに対し、恭介は特に怒る訳でもなく、余裕を全く崩さずに返事を返す。

「何を謝らなければならないのか分からないが、まあ個人的に謝りたいと思っている事はあるから、そっちを謝らせてもらおうか」

「あら、なんですか？」

フツ、と恭介は笑い、

「仲間が見てる」

「は？」

「一夏が、篝が、千冬さんが今この試合を見ているんだ。そして俺はリーダーとして無様な戦いは出来ない」

だから、

「圧倒させてもらっぞ、セシリア・オルコット」

ゾクリ、とセシリアは一瞬冷たい空気が背筋を通るのを感じた。

恭介が放つ、威圧感。それは強がりでもなんでもないと、事を直感的に感じた。それに対しセシリアは一瞬『恐怖』に似た感覚を感じたのだ。

（気圧された……？ 男ごときにこのわたくしが！？ そ、そんなこと）

「そんなこと……ありませんわッ！！」

叫ぶと同時、セシリアは『ブルーライトmk?』のトリガーを引き絞る。キュインツ！ という独特の音と共に銃口から閃光が走る。ウイングゼロへの直撃コースを通るそれは、しかしその巨大な翼にバシユウ！ と弾かれた。

「なっ……！！ 拡散した!？」

「ゼロのこの八枚のうち、でかい四枚にはエフィールドジェネレーターが搭載されている。残念だがその機体とゼロでは相性が悪いな。武装はビーム兵器ばかりなんだろう?」

ミノフスキー粒子と呼ばれる粒子に電磁波を流す事で生じる磁場、『エフィールド』。ビームを偏向させる特性を持つ対ビームバリアだ。ウイングゼロはその『エフィールド』を翼に沿うように展開させており、ビーム兵器はよほどバカ出力の物でない限りはほとんど防いでくれる。

「くっ……、な、ナメないでいたたきだいですわね!!」

背後に浮遊していた四枚のファン・アーマー、『ブルー・ティアーズ』が発射される。高速で動く『ブルー・ティアーズ』はウイングゼロに向けてオールレンジ攻撃でビームを放つ。が、それら全てはどの方向から放つても巨大な四枚の翼に弾かれ、エネルギーが反発、拡散させられる。

「さて……行くぞゼロ。俺を導いてくれ……！」

言つと同時に、ゼロの八枚全ての翼から特殊な導力であるGNドライブの緑色に輝く粒子を放出する。ゼロはそれによって大きく飛翔する。

「！！ 速い！？」

「オルコット、ビットを使つていて動けなくなっているんじゃない本末転倒だ。ちゃんと操りながら動けないと致命的だぞ？ ウイング・ファンネル！！」

『エフィールド』付きの巨大な方の翼の先端に付いていた、七×四、合計二八の『ウイング・ファンネル』が展開される。ゼロシステムのサポートによつて完璧に操られる二八の『ウイング・ファンネル』がそれぞれ、四機の『ブルー・ティアーズ』に襲いかかる。

「な……なんですの！？ その数のビットは！！」

「並列思考、処理能力を鍛えられるだけ鍛えたおかげで普通に戦闘しながらこれだけのファンネル……ビットを操れるようになってな多少、機体のシステムのサポートは受けちゃいるが、これだけ出来れば十分だろう？」

二八機の砲門から放たれるビームによつてあつという間に『ブルー・ティアーズ』は全滅し、動揺するセシリアの手に持つ『スターライトmk?』も破壊され、残つた二機のミサイル用『ブルー・ティアーズ』も破壊される。

恭介はその際に『ツインバスターライフル』を展開し、エネルギーチャージに入る。

「くっ……なんて数ですの……！！ よ、避けきれない！」

「言つたはずだぜ？ 圧倒させてもらつ、つてな。ターゲット、ロックオン……！」

ピピピピピピピ、という電子音と共にロックオンシステムが起動され、セシリアの駆るブルー・ティアーズをロックする。シールドエネルギーを一撃で○にするだけの出力に調整し、『ウイング・ファンネル』に翻弄されるセシリアに銃口を向けた。

「破壊する……！ ってか？」  
瞬間、『ツインバスターライフル』から巨大な閃光が走った。  
それと同時に射程外へと『ウイング・ファンネル』は飛び去る。  
閃光がセシリアを飲み込んだ。  
そして、  
『試合終了。勝者、棗恭介』

\* \* \*

「す……凄い……」  
「ふん。まあ、アイツならこれくらい当然だろう」  
驚愕する真耶の隣で、千冬はまさに当たり前、と言った感じで腕を組んでいた。

その後ろの方で一夏と篤は汗をダラダラとかいていた。

「……篤」

「……何だ」

「……一撃当てる、っていうのを目標にしたよね、私達」

「……そうだな」

「……あんなのにどうやって当てるの？」

「……」

「目をそらさないでよおっ！！」

おもわず涙目だった。

「さて、織斑。ファーストソフト一次移行は済んでいるな？」

「う、うん……じゃなくて、はい」

「よし、ならば準備しておけ。棗が補給と簡易整備を終え次第、棗を織斑の試合を開始する」

「は、はい！」

一夏は自分の専用機、白式の待機状態である右手のガントレットにどこか感慨深そうに左手を当てる。

すると、恭介がピットに戻って来た。

「ああ、棗。とつとと整備を補給を開始しろ」

「了解」

恭介は再び簡易メンテ用のPCにウイングゼロをセットする。ゼロはISの世代的に一、五世代とも言える機体だ。あくまで世代的には、なのであって性能や武装的には第三世代にも劣らない物である。

恭介用にカスタムされたガンダムタイプと呼ばれる機体の内の一機ではあるが、中学二年から高校二年までの三、四年でウイングゼロの反応速度が追いつけなくなってしまっていた。

故にマグネットコーティングと呼ばれる強制的に反応速度を早くする応急処置的な強化をしている物の、マグネットコーティングは少しばかり機体に負荷がかかる。それが三、四年ともなればかなりたまる訳だ。

なので一戦一戦後すぐの整備は、不具合を確実に出さない為に必要な事なのだ。例え無傷であろうとも。

「……よし、全システムオールグリーン。簡易整備終了、とつ。いつでも行けますよ」

「そうか。なら先に出ておけ。すぐ織斑も出る」

「了解です」

恭介はウイングゼロを展開し、再びピットから飛び立った。

「さて、織斑。準備は良いな？」

「はい！」

「よし、ならばISを展開。出撃しろ」

「はい！……来て、白式……！」

一夏の声と共に白式が展開される。

それはまさに『白』だった。

武装が『雪片式型』ゆきひらいたがたという近接戦闘用の刀剣だけしか無いと言う意味不明な機体だが、スペックだけは高い、という意味不明な機体だ。

「よし……織斑一夏、白式、行きますッ！……！」

「お、来たな一夏」

「うん。恭介、一撃くらいは貰うよ」

「おにーさんからの一撃は高いぜ？」

「それでもだよ。一撃くらいは貰えないと、恭介に少しでも近づけてるって思えないから」

「……そうか」

恭介は嬉しそうに笑うと、小さい方の翼に収納されている『ビームサーベル』を右手で抜き放つ。

「なら、見せてみる！ 俺にお前の成長具合を！」

「うん！！」

一夏は『雪片式型』を振りかぶり、恭介のウイングゼロに突撃した。

ガキン！ バチバチバチバチバチ！ と、『雪片』と『ビームサーベル』がぶつかりあう。出力調整された『ビームサーベル』は『雪片』を溶かし斬らずに鏝迫り合いとなった。

しかしパワーではウイングゼロの方が上だった。

「おおおおおおおッ！！」

恭介に押し返され少し体勢を崩した一夏は、流れるように振り下ろされる『ビームサーベル』を避けきれずに直撃する。

「きゃあッ！！ くっ……！！ はあああああッ！！」

一夏はしかし怯まず、そのまま斬り掛かる。再び鏝迫り合いになるが、今度は一夏が『雪片』にかける力を緩め、恭介の押してくる力を利用する形で『ビームサーベル』受け流した。そのまま光刃の下をすり抜けるように『雪片』の剣身をウイングゼロの胴体へと吸い込ませる。

「！ ほう、やるじゃないか」

「なっ！？」

しかし、それが恭介に当たる事は無かった。ウイングゼロの『ビームサーベル』は計四本。その内二本は翼に収納されている。が、もう二本は量子化されているのだ。

恭介は迫り来る『雪片』を残った左手で量子化した『ビームサーベル』を展開し受け止めたのだ。更に恭介は一夏がやってみせたように相手の力を利用し、その剣身を流し、胴体を斬り捨てる。

「ぐうッ……………!!」

「どうした一夏。お前が過ごした四年間での成長はこんな物か？」

「そんな訳……………無いでしょッ!!」

振り返り様に大きく『雪片』を振り切る。当然のように恭介は避ける。

一夏はそれに追従するように接近し、『雪片』を振るう。が、二刀流になったウイングゼロには一太刀も通らず、全て弾かれ、流され、受け止められる。そして一定感覚ごとに斬られていく。『雪片』を溶かし斬らないほどに出力の落とされた『ビームサーベル』は、当たってもシールドエネルギーを大きく削る事は無い。しかし、それが何度も続いていけば、無くなって行きもする。

五分、一〇分と続く斬り掛かり捌くを繰り返す試合。そのとき、白式の残るシールドエネルギーはもはや半分ほどしか残っていないかった。

\* \* \*

「うわ……………織斑さん、完全に遊ばれちゃってますね……………」

静かに二人の試合を見守るピットに通る真耶の声。

それに反応するように箒が声を上げた。

「恭介……………！ 手加減して遊んで……………一夏を侮辱でもしている気が！？」

「落ち着け馬鹿者」

バシン!! と、出席簿アタックが箒の脳天に直撃する。「いた

あッ!?!?」と、可愛らしい悲鳴を上げた。

「……別に棗は織斑で遊んでいる訳でも、侮辱している訳でもない」  
「え? じゃあ何で……」

「アイツは『ヴァカ』ではあるが、『馬鹿者』ではないという事だ。  
少なくとも 仲間を侮辱するような奴ではな」

「……あ……」

「アイツはいつだってお前達の兄貴分だったはずだ。そしてアイツ自身もお前達の兄貴分であろうとしている。なら、そんな事はない。あれにはアイツなりの考えがあるのだから」

「はあ……織斑先生って、棗君の事よく分かってるんですねっ。  
って痛たたたたたた!!」

「山田君。私はからかわれるのは嫌いだ」

「ご、ごごめんなさーい!!」

千冬にこめかみをグリグリされる真耶は涙目で謝っていた。

「……一夏。頑張れ」

篝のつぶやきはそんな真耶の声にかき消されていた。

\* \* \*

「はあ……はあ……はあ……」

シールドエネルギーは残り五分の二程度。しかし体力の限界は残念ながら否めなかった。

「……そろそろ限界か」

「ッ……! ま……まだ大丈夫……! 行ける!!」

「無理はしない方が良く。身体壊すぞ」

「無理じゃないよ!!」

疲労困憊のほすの一夏は、それでも吠えてみせた。

「止まらない……止まらないんだ。私はいつだって守られて来た。

千冬姉にも、恭介にも、リトルバスターズの人々にも。ずっとずっと守ってもらってばかり。でも……っ、そんなのは嫌なの! 守





「え」

「お前の一撃 確かに届いたぞ」

『試合終了。勝者、棗恭介』

### 第3話「破壊天使と蒼い零と白き騎士と」(後書き)

セシリア戦よりも一夏戦の方が長くなりました。

実際のサイコフレームがどんな物かは知らないけど、とりあえず本作『インフィニット・バスターズ!』では搭乗者の思いが高まる事で光り輝き、性能を向上させる。条件によっては、『逆シヤア』みたいになることもある。みたいな設定にしておこうかと思えます。本物とちやうやん! と思っても、出来れば我慢していただきたいです。

## ウイングゼロと白式（前書き）

結構適当に設定作ったけど、変な所とかないですかねえ……？

## ウイングゼロと白式

『ウイングガンダムゼロ・パーフェクトカスタム』

### 搭乗者

- ・ 棗恭介

### 武装

- ・ ツインバスターライフル
- ・ ビームサーベル×4
- ・ マシンキャノン×2
- ・ ウイング・ファンネル×28（大型の翼一枚につき七機×四＝28）

### 特殊機能

- ・ ゼロシステム
- ・ エフィールド
- ・ ツインドライブシステム
- ・ マグネットコーティング

### 特殊技能

- ・ TRANS-AMシステム

### 特殊導力

- ・ GNドライブ（オリジナル）

### 単一仕様能力

- ・ ワンオフ・アビリティ
- ・ ????

ウイングガンダムゼロを恭介の成長にあわせてカスタムを限界まで繰り返して来た機体。

恭介の反応速度に追いつかせるためにマグネットコーティングを施してある。

ウイングガンダムゼロ・パーフェクトカスタムの二つの内一つ目の特徴である『Zoning and Emotional Range Omitted システム（領域化及び情動域欠落化装置）』。通称ゼロシステム。この装置は搭乗者の脳波に直接干渉し、予測される全ての未来を見せる事で『完全な勝利』を目指す。

しかし、この『完全な勝利』には搭乗者の生死は勘定に入っておらず、また搭乗者の事情や勘定などを無視して弾が直撃して爆死などといった最悪の状況も見せてしまう。故にこのシステムの仕様にはかなり強靱な精神力を必要とし、これに欠ける場合はシステムによって精神を崩壊させられてしまう。

二つ目の特徴は『TRANS-AMシステム』。機体内部に蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放することで、一定時間スペースを三倍以上に引き上げる事が出来る。しかし、このシステムは大量のGN粒子を消費するため、使用後は粒子の再チャージまで機体性能が大幅に低下する諸刃の剣である。

待機状態はリトルバスターズマークのついたネックレス。

『白式』

搭乗者

・織斑一夏

武装

・雪片式型

特殊機能

・サイコフレーム

ワンオフ・アビリティ  
単一仕様能力

・零落白夜

装甲にサイコフレームを使用した白式。

（実際は少しばかり違う設定ですが）サイコフレームは人の思い、意志に反応し様々な未知の現象を引き起こす。白式で使われているサイコフレームは束の手が多少加えられているようで、搭乗者である一夏の思い、意志に反応し、それによって機体性能を向上させるというものとなっている。ただし、搭乗者と周囲の大人数の人間の意志が一つに纏まると、その意志に感応し、膨大な力を発揮するという性質は変わっていない。この力は束でも計り知れないほどの力を秘めているらしい。

白式は一夏の専用機の性能の一部を実験的に搭載した試作機であり、完全に実験機扱いされている。現在本当の専用機を製作中である。

待機状態は右腕の白いガントレット。

#### 第4話「代表決定と現る鈴の音」

シャワーから出る暖かいお湯が白いセシリアの肌に当たり、弾け、流れていく。

その後、ISが解除されたセシリアはさほど高くはないにしても落ちれば痛い高度から落下していた。そんな中、意識が飛ぶ前の一瞬に目に入ったのは、真っ白な翼を羽ばたかせ、緑のツインアイの奥にうつすらと見えた力強い光を持った瞳。

そして気がつけば保健室にいた。

保健室から部屋に戻ったセシリアはシャワーを浴びている。

(棗……恭介……)

今までに無い感情だった。

常に勝利への確信や自己の向上への欲求ばかりを抱き、追い続けていた彼女が初めて感じた気持ち。

自信、強い意志、無垢、少年っぽさ。様々な物を最後に見た瞳からは感じた。

初めて出会った自分より強い男。

「棗恭介……」

彼の事をもっと知りたい。

呟くだけで心に響くこの暖かい物はなんなのか知りたい。

彼女の頭の中にあるのはただただそれだけだった。

\* \* \*

翌日。朝のホームルーム。

「では、一年一組代表は棗恭介君に決定です」

真耶の発表にクラス的女子達はパチパチと大きめの拍手をした。

当の恭介は笑いながら「サンキュー」と言った。



グラウンドの端に一組の生徒達が集まる。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実戦してもらおう。棗、織斑、オルコット。試しにとんで見せる」

千冬の言葉に、一夏は若干時間がかかった物の、三人ともISを展開する。

「よし、では飛べ」

瞬間、ウイングゼロとブルー・ティアーズは一気に上昇し、上空で静止する。が、一夏の白式は二人に比べて格段に遅かった。

「何を遊んでいる。ウイングゼロはともかく、基本スペックではブルー・ティアーズよりも上なんだぞ」

「そんな事言われても……。角錐をイメージ、っていうのがよく分からないんだよね。そもそもなんでこれで飛べるんだか」

「一夏、イメージは所詮イメージだ。慣れていけばその内自分のやりやすい飛び方を身体が覚えていくさ」

「ん〜……そんなものかなあ」

「そんなものですわ。なら、どうして飛ぶのか説明して差し上げましょうか？ 半重力力翼と流動波干渉の話になって長くなりますが」

「ごめん……結構です」

「そう。残念ですわ」

ふふつ、とセシリアは特に残念には見えな笑みを浮かべていた。

あの決闘から、セシリアは恭介達に友好的になった。まあ一夏としてはちやんとした謝罪もしてくれたので、特に拒む理由も無いと言えは無いのだが……。どう考えても恭介絡みであるうことは、箒を含む恋する乙女には火を見るよりも明らかなので、大喜び出来るような物ではなかった。

『恭介っ！ いつまでそんな所にいる！ 早く降りてこい！！』

突如として通信回線に箒の土星が響いた。見てみると箒は真耶のインカムを奪って叫んでいた。当の真耶は軽く涙目でオロオロしている。

「あ、叩かれたな」



恭介とセシリアは一夏の元に駆け寄る。

「一夏、大丈夫か？」

「お怪我はありません？」

「う、うん。何とか……」

「……確かに降りてこいとは言ったが、誰がグラウンドに穴を空けると言った」

「……すみません」

千冬はため息を一つつく。

「まったく……では次に武装を展開しろ。まずは棗、手本を見せてやれ」

「りょーかい」

言うと同時、『ツインバスターライフル』が右手に、左手に『ビームサーベル』が展開された。

「よし。では織斑、オルコット、武装を展開しろ」

「は、はいっ！」

一夏は剣を構えるモーションを取ると、両手から光の粒子が放出される。それはゆっくりと形を成していき、『雪片式型』がその手に展開された。

ちなみにセシリアは横に突き出した手に『スターライトmk?』が展開していた。

「遅い。〇、五秒で出せるようになれ。そしてオルコット、さすがは代表候補生と言った所だがそのポーズはやめる。横に銃口を向けて誰を撃つ気だ？ 棗か？」

「うっ……で、ですがこれはわたくしがイメージを纏めるために必要な」

「直せ。いいな？」

「はい……」

「ではついでにオルコット、近接用の武装を展開しろ」

「え？ あ、は、はい」

言われてすぐにセシリアは武装の展開を試みる。が、基本的に遠

中距離戦闘を得意とするセシリアはほとんど近接用武装を使わないせいか、イメージが固まらず、光の粒子が手の中で漂っていた。

「くっ……」

「……まだか？」

「も、もうすぐです……あぁもう！ 『インターセプター』！！」  
自棄になったセシリアがそう叫ぶと、ようやくその手に短剣が展開された。

「……何秒かかっている。お前は実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いには入らせません！ ですから問題ありませんわ！！」

「ほう、棗相手にそんなことが言えるか？」

「そ、それは……あの……」

セシリアは言葉を濁すと、がくりと肩を落とした。

「まったく……棗、この中ではお前が一番ISに詳しく扱える。しっかり指導してやれ、いいな？」

「了解。ま、俺なりにやらせてもらいます」

「よろしい。では今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけ。棗、穴埋めくらいは手伝ってやれ」

「は、はい……」

「はい。んじゃ、やるぞー夏」

「うん」

\* \* \*

夕食後、食堂では一組の生徒達が集まっていた。

「それでは……棗君、クラス代表決定おめでとう！！」

『おめでとー！』

「ああ、ありがとう」

クラスメイトの一人のかけ声と共にクラッカーの音が一斉に鳴ら

され、恭介はクラスメイトの祝福に躊躇い無く返事を返す。  
クラスメイト達はやけに盛り上がり、無駄にテンションが高かつた。

壁には『棗恭介クラス代表就任パーティ』と書かれた横断幕が張られている。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねー」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー、同じクラスになれて」

「ホントホント」

そんな感じの会話が食堂の至る所でされている中、箒が恭介に話しかけて来た。

「人気者だな、恭介」

「そうか？ 普通だと思うけどな。なんだ？ 嫉妬か？」

「んなっ！ ばっ！ そんなわけないだろう！！」

箒は赤面しながらそっぽを向いてお茶をすすった。

恭介はそんな箒を見ながら笑っている。

すると突如として一人の女性が恭介の前に現れた。

「はいはい、新聞部です！ 話題の新生にインタビューしに来ましたー！」

女性は笑顔で続ける。

「あ、私は二年の黛薫子まゆみ かほり、よろしくね。新聞部の副部長をやっているの。はいこれ名刺」

「どうも。知っているとは思いますが棗恭介だ、こちらこそよろしく」

「よろしくねー。じゃあ早速、クラス代表としての意気込みをどうぞー！！」

「意気込み？ そうだな……」

うーむ、と考え込む素振りを数秒見せると、

「実は俺、知り合いから『あらゆる日常をミッションにするリーダー』って言われててな」

「は？」

恭介のあまりに脈絡の無い話に思わず抜けた声を漏らす薫子。しかしそんな事も気にせず恭介は続ける。

「故に俺はこのクラス代表戦すらも『任務』<sup>ミッション</sup>として扱わせてもらう！ 全ては等しくミツシヨンだからな！ そして俺はあくまで本気でミツシヨンの成功を目指すつもりだ。そう、つまりは優勝を目指させてもらうぜ！」

高校二年（年齢的に）になっても未だ残る無垢な少年心を、脈絡の無い話から無理矢理つなげられた恭介の台詞と笑顔から感じ取ってしまった薫子含める食堂に集まる女生徒達は、自分でも訳が分からないが思わず赤面していた。

……前からこんな事は日常茶飯事だったとはいえ、やはり面白くない一夏と筈。かといって本気で純粹に言っているらしいだけに本気で怒れもしないのだった。

「……はっ！ えーっと、あのー、そのー、そ、そくだ！ セシリアちゃんもコメントちょうだい！」

「え！ わ、わたくし！？ え、えと、そ、そうですね。あまりこういった事は好きではありませんが、仕方ないですわね」

コホン、と咳払いをし、

「ではまず、どうしてわたくしと恭介さんが決闘することになったかというところはつまり」

「あ、長くなりそうだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさいっ！」

「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、棗君に惚れたからって事にしよう」

「なっ、な、なな……っ!？」

赤面……どころか身体中を真っ赤にするセシリアを他所に、薫子は話を進める。

「じゃあほら。二人とも……じゃなくて、織斑さんも並んで。写真撮るから」

「えっ!？」

「私も？」

と、真っ赤だったセシリアが急に元に戻って嬉しそうな声を上げた。セシリアは嬉しそうにニコニコ笑いながら、座っている恭介の隣に並ぶ。それに続いて一夏も反対側に並ぶ。

「ほらほら、もつとくつついて」

「そ、そうですねか……そう、ですわね」

「そうですね……えいつ」

「なっ！！？ 何してますの一夏さん！！」

おずおずと恭介の近くに寄るセシリアとは正反対に、一夏は思いきり恭介に抱きついていた。

「おっと……大胆になったな、一夏」

「そうかな？ 昔もやった事あると思うけど」

「子供の頃はともかく、成長すればあまりそんなくつつかないだろ？ 恋人でもない限りは」

「恭介だからしてるだけだもん」

「そいつは光栄だ、お姫様。あぁいや、お姫様ならこっちの方が良いか？」

「え？ つて、ひゃっ……！！」

突然恭介が腰に左手をやり引き寄せ、膝裏に手を回して抱え込んだ。いわゆる”お姫様だっこ”という奴だった。

「なっなっな……！！」

「きよ、きよきよきよ恭介！！ な、な、な、何をしている！？」

「何、つて。見れば分かるだろ、お姫様だっこだ」

「何故そんなことをする必要がある！！」

「お姫様、つて言ったらお姫様だっこだろ？」

「相変わらず意味不明な理論だな！！」

「あうあうあう……」

周りが羨ましそうな視線を向ける中、一夏は耳まで真っ赤にしてうまく声も出せなかった。

「きよ、恭介……は、恥ずかしいよ……」

「俺だつて恥ずかしいさ。だけどな……お前ならそれでも良い、つて思つたんだよ」

「そ、そんな強引な……」

「ああ強引さ。だから俺のせいにして良い。そのまま何もかも俺に委ねちまえ」

「あう……」

抵抗という選択肢を完全に失われた一夏は、赤面したまま黙り込んでしまった。ただ力を抜いて恭介の胸板に頭を預けている辺り、本当に委ねる事にしたようだ。

薫子も若干赤くなりながらも、「じゃ、じゃあ撮るよー」と恭介達に声をかける。

その声に反応してセシリアと何故か箒も二人の横に並ぶ。

「じゃ、じゃあ、 $35 \times 51 \div 24$ は？」

「74、375だ」

「せいかーい！」

カシャツ、とシャッターが切られた。

「あ、あなた達！ な、何故入っているんですの！？」

「まーまーまー」

「セシリアと織斑さんと篠ノ乃さんだけ抜け駆けは無いでしょー。

特に織斑さんはお姫様だつこまでされちゃってるんだし」

「クラスの思い出になつていいじゃん」

「ねー」

「う、ぐ……」

完全に丸め込まれたセシリアは少し呻くだけで何も言えなくなつてしまった。

この後、このパーティーはハイテンションなままで一〇時過ぎまで続いた。

終了後、寝る準備諸々を済ませてベッドに潜り込んだ一夏がしばらく眠れなかったのは、言うまでもなかった。



翌日、いつも通り恭介と一夏は一緒に登校し、一緒に教室に入ると、一人の女生徒が話しかけて来た。

「棗君、織斑さん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？」

「ああ、そういえばそんな話をどこかで聞いたな。確か中国の代表候補生だったか」

「そうそう」

「中国……ねえ」

まさか……という一夏を他所に、セシリアが話に加わってくる。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

「それだけで送り込んでくるかと言えばそうそう無いと思うぞ。考えられるとすると……」

俺か、と恭介は思った。

別に自意識過剰とかナルシストとかそういう意味ではない。

恭介は唯一ISを操縦出来る男だ。それは歴史的な事件であり、今までのISの歴史を覆さんとする人物でもある。そんな恭介を各国が欲しがらない訳が無い。ならどうすれば効率的に手に入れられるか。話は簡単、男が相手なのだから女で落としてついて来させれば良い。

代表候補生ともなれば、他クラスだろうと「同じ専用機持ち、それも男のあなたに会ってみたかった」などと理由は多少なりとも増えるし、それがなくとも会える可能性は高くなってくる、という訳だ。

（まあ……俺は早々簡単には落ちやしないけど）

IS学園に来るずっと前、ウイングゼロを使うために精神修行的な訓練をして来た。

ウイングゼロに搭載されているゼロシステムはありとあらゆる未来を見せるというとんでもないシステムだ。が、その見せられる未

来には自分が落とされる未来なども、事情、感情関係なく見せられる。故に強靱な精神力を持たない者がこのシステムを使うと、精神崩壊を起こす者すら出てくるのだ。

そんなゼロシステムを使うために精神修行的な訓練をして来た訳だが、その中には、いわゆる『ハニートラップ』やら『すたいるばつぐん』な女性が水着姿で囲んでくる』などという意味不明な内容もあつた（専用のシュミレーションによってそういった状況を体感させられていた）。

故に、あからさまにそのために惚れさせようとしてくる女性にはほとんど、確実にと言って良いほど惚れはしない。と、恭介は自負している。

ちなみに、かつて一夏のタオル姿と出会った時、昔の自分だったら案外襲いかかっていたんじゃないか、などと思つた事もあるとかないとか。

#### 閑話休題。

「このクラスに転入してくる訳でもないのだろう？ 騒ぐほどの事でもあるまい」

「が、残念ながらそういうので騒ぐのが女子高生だったりする。特にこの一組は。」

「しかし中国か。アイツを思い出すなあ、一夏」

「ああ、鈴音だね。中二の終わり頃に中国に戻っちゃってからは会ってないんだよねえ」

「鈴音……？ とにかく恭介。お前ならやってみせるだろうが、昨日あれだけ大見得きつたのだ。ちゃんと優勝してみせろよ」

「そうそう！ 棗君が勝つとクラスみんなが幸せだよ！」

「フリーパスのためにも！」

思いきり欲が漏れていた。

「それに専用機持つてるのは一組と四組だけだから楽勝だよ！」

「その情報、古いよ」

と、教室の入り口からそんな声が聞こえて来た。

それも、恭介と一夏には聞き覚えのある声だ。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝出来ないから」

「鈴音……？　もしかして鈴音！？」

ドアにもたれかかった、髪をツインテールにした小柄な少女はニヤリと笑う。

「久しぶりね、一夏。中国代表候補生、鳳鈴音<sup>ふうりんいん</sup>。今日は宣戦布告に来たって訳」

ドアから体を離し、恭介の目の前まで来て、

「ひ、久しぶり恭介……。元気にしてた？」

「当然。鈴音こそ元気だったか？」

「う、うん……。！　と、当然でしょ！」

もじもじしていた鈴音は笑顔で答える。

と、その脳天に思いきり出席簿が炸裂した。

ズゴツ！！　と、頭から鳴ってはいけなさそうな音が響く。

「ギャツ！！　な……。なんなのよお」

と、振り返る先にいたのは　千冬だった。

「もうショートホームの時間だ。さっさと戻れ。そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生だ。もう一発いくか？」

「す、すみません織斑先生……」

「よろしい。とつとと行け」

「は、はい……」

小走りで鈴音は入り口から出て行き、

「また後で来るからね！　逃げないでよ恭介！」

と言が残し、去っていった。

相変わらず元気な奴だな、と恭介は思う。

「……恭介。今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな？」

「きよ、恭介さん！ あの子とはどういう関係で!？」

「あははは……」

箒、セシリアが恭介に問いつめる中、一夏だけは苦笑いしていた。スパンっスパンっスパンっ！ ひらり。

「席につけバカ共。ついでに避けるな棗」

「いや痛いし」

こうしてまた賑やかな一日が始まった。

#### 第4話「代表決定と現る鈴の音」（後書き）

鈴音登場！ 私は結構好きなキャラなので出せて嬉しいです！

そして恭介恐ろしい……書いていてなんだけど、本当にわざとじゃないだろうか？

## 第5話「RANKING BATTLE START!」

「お前のせいだ!」

「あなたのせいですわ!」

「いや、おにーさんでも常に読心術は使うわけじゃないぞ……?」

「使える時があるの!？」

昼休み。鈴音が現れた事が原因か、箒とセシリアが授業に集中出来ずにいたらしく、千冬さんの愛の鞭を受けたりしていた以外、特に何もなく昼休みまで時は進んだ。

脈絡も無く言われの無い責任の押し付けに、心でも読んで理解しろと言つて来ているのかと勘違い(?)をした恭介は思わずそんな事を言つた。

さて、昼休みという事で食堂に向かう四人を待っていたのは、食券自販機の前にラーメンをのせたプレートを持って仁王立ちしている鈴音だった。

「待つてたわよ、恭介、一夏!」

「鈴音……そこにいたら他人が食券買えないよ?」

「わ、わかつてるわよ!」

なら何故そこにいた、とツツコミたくなった一夏だったが、なんとか我慢する。

鈴音が道を空け、恭介達は食券を買う。

「鈴音は相変わらずラーメンが好きだな」

「いいじゃない、本当に好きなんだから」

「なら先に食べてた方が良くぞ、麺がのびる」

「いいの! 第一、ちよつと経とうが経つまいがもうあんまり変わらないわよ」

食券を食堂のおばちゃんに渡し、少し待つてから頼んだ料理を受けとる。そして五人揃つて座れる席を探し、座つた。

「さて……改めて久しぶりだな鈴音。四年ぶりくらいか?」

「まあね。それにしても、相変わらず元気みたいじゃない。たまには病気になるったりしない訳？」

「残念ながら生まれてから今日に至るまで風すら引いた事無いぜ！」  
「アンタらしいわね……」

「楽しげに話す二人を見て、箒とセシリアは眉を吊り上げる。」

「そういえばいつ日本に帰って来たの？ おばさん元気？ いつ代表候補生になったの？」

「質問ばっかしないでよ一夏。一夏こそ、なんかいつの間にか専用機持ちになつててみたいじゃない。恭介なんか、男なのにIS使えちゃつて。テレビに出た時びっくりしたじゃない」

「俺は自分の事ながらそこまで驚かなかつたな。案外俺なら使えるんじゃないか？ とか一時期思つてた事もあつたし」

「……まあ、使えそうではあるわね」

と、いい加減我慢出来なくなつたのか、箒達が口を挟んできた。

「恭介、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですね！ 恭介さん、まさかこちらの方と付き合つてらっしゃるの！？」

「んな……！ べ、べべ、別にあたしは付き合つてる訳じゃ……」

「そうそう、鈴音と恭介はそんな関係じゃないよ。ただの幼馴染み」

「ちよつ……余計なことを……」

「幼馴染み……？」

初耳だぞ、という感情を込めて恭介を睨む。

「あれ？ 言つた事無かつたつけ。えつとね、箒が引つ越していったのが小四の終わりだったよね。鈴音が転校して来たのは小五の頭なんだよ。まあなんだかんだあつてリトルバスターズのメンバーになつたの。まあ、恭介は一年後、まあほとんど二年後だけどフランスに行つちやつて、鈴音は中二の終わりに国に帰つちやつたんだ。恭介は四年ぶり、私とは一年ぶりかな」

さすがの箒ももう一人幼馴染みがいた事と知らぬ間に新メンバーがいたことに驚いた様子だった。が、セシリアは別の所が気になつ

たようだ。

「リトルバスターズ……？　って、なんですか？」

「えっと、恭介が小学生の時に作った友達グループ、で良いのかな？　とにかく、恭介が集めたメンバーで、何かを悪に仕立てているいろやつたりしてたんだよ」

「へえ……そうだったんですの？」

「ちなみに、俺的にはリトルバスターズはまだ健在だ」

「奇遇だね、私もそう思ってるよ」

「当然だろう、リトルバスターズは不滅だ」

「そうね。消えられちゃあたしも困るし悲しいわ」

そうか、と恭介は小さく嬉しそうに呟く。

セシリアは何だか四人に流れる暖かい空気が羨ましいのか、「でしたら！」と、叫び出した。

「わたくしもそのリトルバスターズに入れてくださいな！」

「？　何言ってるんだ、もう入ってるだろ？」

「は？」

「俺と友人リトルバスターズのメンバー、だろ？」

「……………（パクパク）」

「諦める、こいつはこういう理論を振りかざすのが得意なんだ」

「ええ……………今更でしたわね……………」

篝がセシリアの肩に手を置き、セシリアは何かを諦めたようにため息を一つついた。そんな中一夏と鈴音は苦笑い。恭介は？を頭に浮かべていた。

「まあ、とにかく。アンタが前に一夏が言ってたもう一人の幼馴染みだったのね。初めまして、これからよろしく」

「ああ、こちらこそ」

握手をして友好的な笑みを浮かべあう……………あっているはずなのに、何故か火花を散らしている風にしか見えない。

篝は目だけは笑わず、睨みつけ、鈴音は篝の胸を見て笑みを引きつらせた。



「んんっ！ わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわね。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

「……さつきから思ってたけど、アンタ誰？」

「なっ！？ わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！ まさかご存じないの！？」

「うん、あたし他の国とか興味ないし」

「なっ、なっ、なっ……！？」

怒りのあまり顔を赤くするセシリアに対し、鈴音は涼しげにスル―した。

「い、い、言っておきますけど、わたくし、あなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

と、鈴音はセシリアから視線を外し、恭介へと戻す。

「ところで恭介！ アンタクラス代表なんだって？」

「ああ、いろいろと面白そうだしな」

「だ、だったらさあ、ISの操縦見てあげてもいいけど？」

恭介をちらちらと見ながら顔を背ける鈴音。恭介はそれに気付いているのかいないのか、苦笑いしている。

「恭介に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは私だ」

「あなたは二組でしょう！？ 敵の施しは受けませんわ！」

「いや、俺は逆にお前らに教えろって言われたんだがなあ。千冬さんに」

が、そんな恭介のつぶやきも無視して話は加速する。

「あたしは恭介に言ってるの。関係ない人は引っ込んでよ」

「か、関係ならあるぞ。私が恭介にどうしても頼まれているのだ」

あー、これは何言っても俺が教えられる側って事で話進むなー、と諦めつつ味噌汁を口に含む。

一夏は置いてけぼりだった。

「一組の代表ですから、一組の人間が教えるのは当然ですわ！ あなたこそ、後から出て来て何を図々しい事を――！」

「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いし」  
「そ、それを言うなら私の方が早いぞ！ それに恭介は」  
話の中心の恭介を置いていき、彼女たちの話は昼休みが終わるまで続いたのだった。

……その後、教室に遅刻して来た箒とセシリアが一撃貰ったのは言うまでもない。

\* \* \*

放課後。恭介達は第三アリーナに集まっていた。

昼は昼であんな話になっていたが、最終的に教える側となるのは恭介なのは変わらない。

「箒、申請が通ったみたいだな」

「ああ。今日は私も訓練に参加するぞ」

「くっ……このままではわたくしのアドバンテージが……！」

「えーっと……と、とりあえずよろしくね？」

以前から出していたISの使用申請が通り、箒は打鉄うちがねを身につけている。

「んじゃ、始めるとするか。まずはそうだな、セシリアの『ブルー・ティアーズ』の制御時に動けなくなるのを克服する方法だけどな、やっぱり並列処理能力マルチタスクを鍛えるのが一番だと思うんだ。だからお前は飯を食べながら勉強しつつフリフティングする、みたいな訓練から始めようと思う。まあ、これは例えだから本当に飯を食べながら勉強しつつフリフティングさせるわけじゃないが」

「ほっ……さすがのわたくしでもそれはキツイですわ……」

「次に箒だが……大方ISは動かせるんだよな？」

「ああ。まあ人並み程度にはな」

「だったら実戦訓練あるのみだ。お前の事だから接近戦中心に射撃型相手を想定したのをまずはやっていくぞ。で、次に一夏だが」

恭介は少し考える素振りを見せると、

「基本操縦に慣れる」

「アバウト過ぎる!？」

「いや、だってお前まだISに慣れてないだろ？ 動かしたのこの前が初めてだったんだし。だったらまずはそのからだ。基礎も固まってるのに応用とかしたって意味が無い」

「ううっ……正論過ぎて反論出来ない……」

「と、言う訳で冨は俺と出来る限り様々な想定をした模擬戦。セシリアはとりあえず歴史の勉強でもしながらリフティングしろ。ポールはこれだ」

「食事が抜けただけ!？」

「一夏は そうだな。とりあえずその辺を飛び回ってISで飛ぶのに慣れておけ。他はとりあえずそれからだな」

「分かった」

「よし、んじゃ始めるぞ！」

\* \* \*

「というわけだから部屋代わって」

「なにがというわけなのかさっぱり分からないよ!？」

寮の部屋では午後八時。鈴音は恭介と一夏の部屋、1025号室の前にいた。

恭介は一夏の後ろで腕を組みながら話を聞いている。

「一夏だって男と同室なんて嫌でしょ？ 気を遣うし。のんびり出来ないし。その辺、あたしは平気だから代わってあげようかなって思ってる」

「わ、私だって平気だよ！ それに、男の人は男の人でも恭介ならむしろ一緒が良いです！」

「むう……頑固で大胆になったわね一夏……。まあいいわ、あたしもここで暮らすから」

「ここは二人部屋！ だから無理！」

「じゃあどいてよ。あたしが恭介と同じ部屋になるんだから」

「どうしてもっていうなら千冬姉を呼んで来てよ!」

「ところでさ、恭介。約束覚えてる?」

「ガン無視!? 親友をガン無視なの!?!」

啞然とする一夏を他所に恭介へと話を振る鈴音。

「約束ってあれか? 俺がフランスに行く時に涙目で言っただけだあれ」

「余計なことは付け加えなくていいのよ! そう、それよ。覚えてる?」

「俺は仲間との約束は忘れない男だ。あれだろ? 料理が上手になつたら毎日酢豚を作ってくれる、ってやつ」

「そうそう! それよ!!!」

「あ、あのときそんな約束してたのおっ!? な、なんて油断も隙もない……!」

……でも何で酢豚? と呟く一夏。

「ああ。結構楽しみにしてたんだ。酢豚は結構好きだからな。で、どうだ? 上手くなったか?」

「あ、当たり前じゃない! 近いうちに作ってあげるから楽しみに待ってなさい!」

「おう。頼むぜ」

「という訳で一夏。私と部屋代わって」

「急にそこに話が戻るの!?!」

「誰もこの話無し、なんて言っただけじゃない」

「うう……でも! 私はぜったいに代わらないからね!」

「頑固ねえ」

「鈴音、そんなにここに住みたいのか?」

「え? え、ええ。ま、まあ一夏のためだけだね?」

「だから私は」

「だったら……バトルだ!」



「断つても無駄なんだろうな……ああ、きつと無駄だ……」

「ち、千冬姉が諦めてる……!?」

「と、言う訳でまずは五位の一夏VS四位の鈴音だ。ピ・ポ・パ、集まれ！ バトルだ!!」

「ざざっ！ と、一夏達の周囲にIS学園の生徒達が現れた！

「くっ……やるしか無いみたいね……！」

「そうだね……でも負けないよ！」

『同室のためにも!!』

「それじゃ……バトルスタート!!」

何故か女でした

第五位 織斑一夏

VS

帰って来たもう一人の『鈴』

第四位 鳳鈴音

「って、私の称号なんなの!?!」

BATTLE START!!

周囲の生徒達から様々な武器が投げられる！

「こ、これで行くよ！」

一夏の武器……竹刀

「これで勝負!!」

鈴音の武器……うなぎパイ

「ちよっつっつと待ちなさいよおおおお!! 何これ!?! 何で

これが!?! 真人と同じ結末をたどれと!?!」

「行くよ！ 鈴音!!」

「ちよ、ちよっつまっ!!」

一夏の攻撃！

「せいっ！」

バシっ！ 鈴音に三六二のダメージ！

「ええい！ もうやけくそよ！！ 真人は殴ってたから良いのよねえ！！！」

鈴音の攻撃！

「そうりゃあ！！！」

ぼすっ。一夏に〇のダメージ！ うなぎパイは折れてしまった！  
「きゃあああああああ！！ やっぱりうなぎパイがあああああああああ！！！」

一夏の攻撃！

「いくよ……！！ 千冬姉秘伝……某アサシン流必殺技！」

「ちよ、ちよっと！！！」

「秘剣……燕返し！！！」

バシバシバシッ！！ 鈴音に四二一のダメージ！ 五三七のダメージ！ 四九三のダメージ！

「きゃ、きゃああああああああああああああ！！！」

鈴音は倒れた！

「やった！ 私の勝ち！！！」

「くっ……煮るなり焼くなり好きにしなさい！！！」

「じゃっ、これにしーよおっと！！！」

鈴音は『帰って来た負け犬娘』の称号を得た！

「ちよつと酷すぎない！？」

「ルールだよ、ルール。真人の『クズ』よりマシでしょ？」

「うううううう……」

「よし！ 一夏VS鈴音のバトルは、一夏の勝ち！！！」

こうして。恭介の思いつきにより段々とお祭り騒ぎな学園生活になつていくのだった。

## ランキング表

第一位	織斑千冬	称号：バトルランキング暫定
王者		
第二位	篠ノ乃箒	称号：剣道娘筆頭
第三位	セシリア・オルコット	称号：エレガント（自称）な
お嬢様		
第四位	織斑一夏	称号：何故か女でした
第五位	鳳鈴音	称号：帰って来た負け犬娘
第六位	棗恭介	称号：あらゆる日常をミッシ
ヨンにするリーダー		



第5話「RANKING BATTLE START!」(後書き)

ランキングバトル、始めました。

武器募集中です！ 面白そうなのがあったら使わせてもらいます！  
まあ、次のバトルはいつか決めてませんが……。。

残ったシャルロット(シャルル)と、ラウラの称号も一応募集して  
おきます！

……更識姉妹も参加する？

## 第6話「天使と龍と時々乱入者」

ランキングバトルスタートから翌日。クラス対抗戦日程表が張り出された。リーグマッチ

その一回戦に示された組み合わせは、何の因果か偶然か。はたまた誰かの差し金か『棗恭介VS鳳鈴音』だった。

五月。来週からクラス対抗戦という事で周りが段々盛り上がって来ている頃。恭介達は放課後いつも通り訓練に向かっていた。

「さて。アリーナは試合用の設定に調整されるから実質最後の特訓だ。まあ、対抗戦が終わればまた再会出来るけどな」

「恭介、準備は万端なのか？」

「当然。ゼロの調子もいいし、体調も万全だ」

「そうか……ならいい」

「箒はそれだけ言っと、一人少し前へと歩み出た。

しばらく歩いてピットのドアの前に着くと、一つの気配を後ろから感じた。

「ん……？」

「恭介さん？ どうしましたの？」

「ああ、悪い。少し用を思い出した。五、六分で済ませてくるから中で待っていてくれ」

「お手洗い？」

「そんな所だ。じゃ、すぱっと行ってくる」

小走りで来た道を戻る。

そして二つ目の曲がり角を曲がった所に、その人は居た。

「あら。やっぱり気付いた？」

「気付くようにしてたんだろ？」

「あなたにだけよ。リトルバスターズ裏執行組織『ソレスタル・ビーイング』の創設者にして部隊長。コードネーム『時風瞬』、いえ、『ヒイロ・ユイ』の方が良いかしら」

「どっちでも良いさ、『更識楯無』。どっちも俺だからな」

「ふふ……そうね。じゃあ時風、って呼ばせてもらおうかしら。まったく、彼女たちも、自分たちがいるお友達グループに裏執行組織なんて物があるとは思ってもみないでしょうね」

女、IS学園最強を謳われる現生徒会長『更識楯無』は、妖しい笑みを浮かべつつ言った。

「で、今日は何のようだ？ 朱鷺戸からの報告でもしに来たか」

「いいえ。東さんからよ」

「……マジ？」

「マジよ。彼女からの伝言を預かってるわ。ほら、ピッ」

彼女が取り出したボイスレコーダーのスイッチを押すと、電子音と共に聞き覚えのある厄介の塊な“天災”の声を発し出す。

「はろはろー、久しぶりだねきょーくん。あなたの東さんだよー」

『

「誰が俺のだ誰が……」

『実は報告とお知らせの二つがあるのだ、ぶい！ まずは報告の方だねー。ケルディム・サバーニヤとアリオス・ハルト。ついでにセラヴィー・ラファエルはほぼ完成。きょーくんの『スクウエア』も、あとはきょーくんが同調させてくれれば完成かなー。私とカタつちで頑張っちゃった！』

「早いな……」

『後はそれぞれ調整が完了次第お届け出来るよー。他のガンダム、ナタクとエンドレスフリーダムは六〇から七〇パーセント。いつちゃんのはまだ五〇パーセントくらいかな。まだ白式から送られてくるデータが少なくてねー。もっとガンガン使わせちゃってね』

「一夏ちゃんの真の専用機……『U・B』の完成データを見たけど、あれはまさに化け物ね。あれを使いこなされたら私でも勝てるかど



「そ、そうね……。私もそろそろ行くわ。仕事もあるし」

「じゃあ……。また何かあったら来い。……。出来れば束さん関係以外で」

「ええ……。次来れる時がそれ以外である事を願ってるわ」

「おう。妹によろしく、今度会いにいつて打鉄式型を見てやる、つて言つといてくれ」

「ええ、分かったわ。じゃあね」

楯無は言つて踵を返し、小走りに去つていった。

恭介も同じく、一夏達の待つピットに戻る。

「待つてたわよ、恭介！」

「あれ、なんでいるんだ？」

恭介がピットに入ると、鈴音が腕を組んで待ち構えていた。一夏達はというと、追い出すのは諦めたようだ。

「あー、で、何でいるんだ鈴音。お前も俺の訓練を受けに来たのか？」

「どうしてアంతアの訓練受けなきゃなんないのよ。ちょっとした賭けを持つて来ただけよ」

「賭け？」

そうよつ、と胸を張つて言つ鈴音。

「来週のクラス対抗戦<sup>リーグマッチ</sup>。そこで勝つた方が負けた方になんでも一つ言つ事を聞かせられる、つていう賭けよ！」

『ええ（なんだと）（なんですつて）ツ！？』

「ほう……。面白そうじゃないか。乗らせてもらおう」

「ちよつ、恭介良いの！？」

「なーに。要は負けなければいいだけだ。覚悟しろよ、鈴音。俺は強いぞ？」

「ふんだ！ 小学生の頃は負け続きだったけど、高一、それもISでの戦いなら負けはしないわよ！」

「なら、中国代表候補生としてのお前の実力。見せてもらおう」

「ええ、覚悟しなさい！」

嬉しそうな鈴音とは裏腹に、一夏、箒、セシリアは、  
(無いとは思うけど負けたらどうしよう……)

などと考えていた。

\* \* \*

試合当日。第二アリーナ第一試合。『棗恭介VS鳳鈴音』。

鈴音と恭介はアリーナ内にいた。

鈴音のISである『甲龍<sup>シエンロン</sup>』。

赤みがかつた黒の機体の一番の特徴は非固定浮遊部位<sup>アンロック・ユニット</sup>。第三世代のISであることを示している。

その手に持つは近接武装である大型の青龍刀、『双天牙月<sup>そつてんがげつ</sup>』だ。

「来たわね恭介。今手加減して欲しい、って頼むんなら、手加減してあげるわよ？」

「ふっ、俺がそう言われて言う訳が無い、って分かってるんだろ？  
全力で来い。叩きのめされたくなければな。もしかしたら、この  
身に届くかもしれないぞ？」

「言ってくれるわね……だったらお望み通り、ボコボコにしてあげるわー!!」

『では、試合を開始してください』

ピーっ、という試合開始の合図であるブザーになると同時、鈴音は動いた。

ガキン！ バチバチバチ！ と、鈴音の『双天牙月』と『ビームサーベル』がぶつかりあう。

「ふうん、初撃を防ぐなんてやるじゃない。大見得きるだけはある、  
って訳ね。でも」

鈴音はもう一本の『双天牙月』を展開し、バトンのように回転させながら突撃し、上から、下から、横からと縦横無尽に攻撃を繰り返して来た。

「おっと」

「圧倒的な攻めの前に何もさせなければ、アンタでも大した事は無いのよ!!! でやああああああッ!!!」

縦に斜めに真横に、と連続で繰り出される鈴音の『双天牙月』による連激。しかし恭介は涼しげにそれら全てをさばく。直接受け止めるような事はせず、全て風のように受け流していく。

すると鈴音は『双天牙月』を連結させて、さらに縦横無尽に攻撃してくる。

ガッキン! と、今度は流さずに受け止めた。

「そら、鈴音。油断大敵だ」

「はあ? って、きゃっ!?!」

ズダダダダダダダダダダ! と、ウイングゼロの首の近くに装備されている『マシンキャノン』が火を吹いた。近距離から四銃身式の機関砲の直撃を受けた鈴音は、その衝撃で後ろに吹き飛ばされる。

それを恭介は大型の翼四枚を広げ、設置された『ウイング・ファネル』を設置したまま鈴音の甲龍へと向け、放つ。計二八砲門から繰り出されるビームの連激が鈴音を襲う。

「うわっ! ちょ、ちょっと! 何よそのバカ多いビーム砲は!」

「ビット兵器として使わず単なるビーム砲として使ってやってるんだからマシだと思うぞ?」

「そういう、問題じゃ、ない、わよっ!!! このっ!」

鈴音は甲龍の非固定浮遊部位を解放する。瞬間、見えない弾丸が放たれた。ガキン! と、ウイングゼロの翼が防ぐ。ガンダニウム合金Gで作られた翼は傷一つつかない。

『衝撃砲』。

空間自体に圧力をかけ砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出すという物だ。

見えない砲弾は次々に恭介のウイングゼロに襲いかかるが、全て翼によって防がれる。

「くっ……なんて装甲してんのよ！ その羽！！」  
「でかいつて事は狙われやすい、ってことだろ？ だったら硬くしなきゃな」

「こっんのおおおおおおー！！」

鈴音は再び突撃する。

\* \* \*

恭介と鈴音が戦っている頃、一夏達はピットにいた。

「あれ……って、何？」

「あれはおそらく衝撃砲ですわね」

「衝撃砲？」

セシリアの口から出たのは聞き慣れない武装の名称だった。セシリアは真剣な表情で続ける。

「ええ。空間自体に圧力をかけ砲身を生成し、そこから余剰に生じた衝撃そのものを砲弾として打ち出す。『ブルー・ティアーズ』と同じく第三世代の兵器ですわ」

「空間に砲身を生成する、って……射角限界とかが無い、て事？」

「そういうことになりますわね。空間その物に砲身を生成するのですから。だから」

「前後左右上下、真後ろだろうが真下だろうが、場所を選ばずに発射出来る」ということか

「その通りですわ」

それを聞いて険しい顔になる筈と一夏。

そこに、千冬が口を挟んだ。

「だが、あの翼がある限りはウイングゼロには傷一つつかんだろう。あれはガンダニューム合金Gで出来ている。ブルー・ティアーズの『スターライトmk?』をフィールド抜きで受けても一時間以上かけないと一〇センチ溶かせないという、ガンダニューム合金Gが、な」



「な、なんですって!？」

「前に見たけど……あれって結構凄い威力だったよ?」

「あの翼はウイングゼロの武装を使うにあたって重要な導力である物をオーバードロードさせないために装備されている。はっきり言って『ウイング・ファンネル』はついでだ。一枚残っていれば役目を果たすとは言え、あれは絶対に壊されてはならない。だからこそ、それだけの装甲を持たせている」

「重要な導力……? って、なんですか?」

「残念だが機密事項だ山田君。少なくともこいつらの前では教えられん」

くいつ、と一夏達を指差す。

「まあ、見ていろ。破壊天使と呼ばれた奴のISと、奴の実力は、伊達ではないさ」

「くっ……ダメ、全然通らない……」

「どうした鈴音? まだダメージ○だぞ?」

「う、うっさいわね! これから本気出すのよ!」

(とは言ってみた物の……あの羽、メチャクチャ硬い……! 衝撃砲を『龍咆』をこれだけくらっしておいて傷一つつかないなんて

……。やっぱ接近戦でやるしかない? でも連激で攻めてもアイツにはさばかれる。打ち込んで真っすぐ受け止められてもあの機関砲が……それ以前にあんな数のビーム砲をかいくくれるの? ああもう! 恭介め……ISでも強いじゃない!)

「どうした、来ないのか? なら、こっちから行くぞ!」

「ッ!」

恭介は手に『ツインバスターライフル』を展開し、二つに分離し、片方を鈴音へと向ける。

瞬間、閃光が走った。

『ツインバスターライフル』の状態よりも太さも威力も無いとは言え、十分な威力と太さを持った『バスターライフル』の一撃が鈴音に迫る。

「っ……！ あ、危ないじゃない！ なんて物使ってるのよ！！」  
「コイツは全距離対応、微妙に射撃特化な機体なんだ。仕様がないだろ。そら、まだまだ行くぞ！」

右の『バスターライフル』を撃ち、更に連続で左の『バスターライフル』を撃つ。

鈴音は光の奔流をギリギリで避ける。が、余波ですらダメージを受けてしまう。

「くっ……！！」

「さて……そろそろ行くぞ！ 『ウイング・ファンネル』！」

ウイングゼロの大型の翼から二八機のウイング・ファンネルが発射される。それらは一気に鈴音を囲む。

「ちっ……この！ この！！」

鈴音は『ウイング・ファンネル』に向けて『龍咆』を連射する。

すると、ひらりひらりと避けながらビームを撃ってくるファンネルの一機に、一発当たりそうになる。が、

「おっと、危ない。凄いだろ、こいつらはこんな使い方も出来るんだぜ？」

その一撃は『ウイング・ファンネル』四機が円形状に並び、展開した障壁によって防がれた。

「ちよつと！ 何よ、それっ……は！ 聞いてないわよ！？」

「言っていないからな。そら、行くぞ！」

ビームの雨をかくぐりながらファンネルを攻撃する鈴音に恭介が迫る。器用に自分のいる場所だけギリギリにビームを避ける様に撃たせながら『バスターライフル』をしまい、『ビームサーベル』を抜き放つ。

そして『ウイング・ファンネル』が一斉にビームを放った。それら全てが鈴音を動けなくするように腕、足、胴体すれすれに放たれ、



んなもの」

「ちつ……仕方ない。鈴音！ あのIS迎撃する！ 援護してくれ！」

「しょ、仕様がないわね……！ 援護してあげる……！」

『ダメです二人とも！ 早く脱出してください！ 先生達が敵ISを制圧しにかかります！』

と、二人の通信を聞いていた真耶が口を挟んだ。

「でも山田先生、先生方が来るまで時間を稼がないと被害がどうなるか分からない。それに」

ウイングゼロのゼロシステムが言う。アリーナの遮断シールドレベルが4まで上がっている、と。

「しばらく入って来れそうにないんですよ？ 逆もまた然りだ」

『そ、そうですけど……！』

「だったらやるしかない！ 行くぞ！ 鈴音……！」

「ええ！ 任せなさい……！」

二人は黒いIS、『ゴーレム？』に突撃していった。

\* \* \*

「棗君！ 鳳さん！？ 聞こえてますか！？ もしもし……！」

「落ち着け山田君」

「きゃっ……？」

スパン！ と、どこからか取り出した出席簿によって繰り出される出席簿アタックが真耶の頭に直撃した。

（（痛そう……））

「本人達がやると言っているのだ。やらせてやれ」

「織斑先生！ なにを呑気な事を言ってるんですか……！」

「だから落ち着け。コーヒーでも飲め、糖分が足りないからイライラする」

そう言って近くにあったコーヒーに白い粉を入れる。……塩を。



「そうしたい所だが……棗の言う通りすぐには入れも脱出も出来ん  
見ろ」

千冬の視線の先には、第二アリーナスステータスチェックと書かれたモニターが出ていた。そこにはゲート遮断シールドがレベル4まで上がっている、そう書かれていた。

「遮断シールドが……レベル4に設定!？」

「しかも……扉が全てロックされて……! まさか、あのISの作業……?」

「……そのようだ。これでは避難する事も、救援に向かう事も出来ない……」

と、セシリアが声を上げた。

「でしたら! 緊急自体として、政府に救援を!」

「やっている。現在も、三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除出来れば、すぐに部隊を突入させる」

「はあ……結局、待っている事しか出来ないのですね……」

「何、どちらにしても、お前は突入部隊には入れないから安心しろ」

「えっ!?! な、なんですってえ!?!」

声を荒らげるセシリアに、千冬は真剣な表情で返す。

「お前のブルー・ティアーズの装備は、一対複数向きだ。お前が複数の側に入ると、むしろ邪魔になる」

「そんなことありませんわ!!! このわたくしが邪魔などとっ  
!」

「では連携訓練はしたか。その時のお前の役割は? 味方の構成は? 敵はどのレベルを想定してある? 連続稼動時間は?」

「ううっ……わ、分かりました……もう結構です……」

「うむ……分かれればいい」

セシリアは肩をがくりと落とした。

そんな中、箒は光学映像を心配そうに見つめていた。そして何かを決意したようにピットから飛び出す。

ドオン！ ドオン！ ドオン！ と、甲龍の『龍砲』が火を吹く。ゴーレム？はそれらを一発もかする事無く全て避ける。

「くっ……こいつ、強い……！」

「鈴音、突撃する！ 援護しろ……！」

「了解……！」

言つて恭介は『ビームサーベル』を構えゴーレム？に突撃する。後ろからは鈴音の衝撃砲がゴーレム？に向けて撃たれるが、全て回避される。

「オオオオオオオオオオ……！」

恭介が『ビームサーベル』を振り下ろす。

すると、ゴーレム？の手に装備された方向からビームが放出された。『ビームサーベル』の様に。

バチバチバチ！ と、二つのビームサーベルがぶつかりあう。

「くっ……このっ……！」

もう一本『ビームサーベル』を取り出し、振り下ろすが、ゴーレム？も残った片方の手から『ビームサーベル』を展開する。二つの『ビームサーベル』同士で打ち合い、火花を散らす。

すると、ゴーレム？が距離を取り出した。

「？ 何だ？」

瞬間、背後に浮いていた黒いボックスが開いた。そこから小さな何かが大量に飛び出す。

「……！！ ファンネルだと……！」

『ウイング・ファンネル』よりも遥かに小さなビット型の『ファンネル』。黒く小さい砲台は大量に恭介へと向かい、ビームを放つ。全方向からのオールレンジ攻撃。しかも相手は制御しながら動いてくる。

「くっ、数は……四〇機！？ 積み過ぎだろ……！」

体全体を包み込むように大型の翼を展開しながらそう毒づく。大

きなエフィールドの反応音がする事から、制御しながら動いている事は明白だった。

すると、ピー、ピー、ピー、と電子音が鳴った。

「これは……ゼロか。『敵ISが無人機である可能性、及び搭乗者の戦闘データを使用している確率九八パーセント』……！ サンキユーゼロ、これで口実が出来た！ 鈴音！ 離れてろ！」

「はあ！？ 何言ってるのよ！！！」

「巻き込まない自信が無い！ 千冬さん！ 聞こえますか！？」

『棗か。どうした』

「ゼロのリミッター解除の許可を！ ゼロがああISは九八パーセントの確率で無人機だと言いました！ なら手加減する必要はないはず！」

『ふむ……そうか。なら許可する。ゼロの判断なら信用出来る。ただし、完全破壊はするな。回収する』

「了解、ありがとうございます！」

言って恭介は翼を開き一気に飛翔する。それを追うように『ファンネル』が迫る。

「恭介！！！」

「安心しろ、俺は負けない！ だから離れて見てろ！ お前らのリーダーの勇姿をな！！！」

「なっ……あーもう！ 分かったわよ！ でも、負けたら承知しないからね！！！」

「分かってる！」

『恭介えッ！』

「……！！？」

『男なら……男ならそのくらいの敵に勝てなくてなんとする！！』

「箒！？ ヤバい！」

ゴーレム？は声を上げた箒に狙いを付けた。その巨大な上から高出力のビームを放つ。

「させるかあああああああああああああッ！！！」



恭介は『ファンネル』のオールレンジ攻撃を避けながら、第へ迫るビームを翼で受け止める。そのまま恭介はウイングゼロのリミッター解除に取りかかった。

「ゼロ！ リミッター解除！ 解除用コードは……『Gundam ガンダ <sup>ムに</sup> is not <sup>敗北</sup> allowed <sup>は</sup> defeat! <sup>許されない</sup>!」

言つと同時に、ピーっ、という電子音があった。

すると、ウイングゼロのツインアイが緑色に光る。更に、ウイングゼロの『ビームサーベル』の出力が最大まで上がった。実は、ウイングゼロは“スポーツ用”に全てリミッターがかかっていたのだ。そして、リミッターが解除されると同時に、『ゼロシステム』が真に解放される。

ゼロシステムが恭介の脳波に直接干渉し、敗北と勝利、二つを織り交ぜた予測される全ての未来を見せ始める。

「さあ……行くぞ。戦闘レベル、ターゲット確認、排除 開始ッ  
!!!」

モニターに『TRANS-AM』と出ると同時に、ウイングゼロの翼から緑色に輝くGN粒子が大量に放出され、ウイングゼロが赤く輝き始める。

フッ、とウイングゼロが消えた。次の瞬間、四〇あった『ファンネル』が、二八落とされた。さらに続けて残りの一二機が撃ち落とされる。

トランザムによって強化された『ウイング・ファンネル』の仕業だった。

「はあああああああああッ!」

いつの間にか懐に潜り込んでいた恭介が、ゴーレム？の両腕と黒いボックスを切り捨て、胴体を蹴り跳ばす。そして更に、ゴーレム？へと『ウイング・ファンネル』六機で足と胴体を撃ち抜いた。  
ゴーレム？はそのまま火を吹きながら地面へと落ちていった。

トランザムが解除され、元に戻ったウイングゼロが着陸する。その近くに鈴音も着陸して来た。

「な、何よ。メチャクチャ強いじゃない。アンタ」

「死ぬほど努力したからな」

すると、笑いあう二人に、

警告、敵ISの再起動を確認。ロックされています。

「……！」

背後を見ると、ギギギ、と鈍く動くゴーレム？が、腹部のビーム砲を撃とうとしていた。が、

「フツ……狙いは？」

「完璧ですわ！」

瞬間、ゴーレム？の腹部に青白いビームが突き刺さった。

今度こそ、ゴーレム？は完全に機能停止したのだった。

\* \* \*

千冬と真耶は、学園地下五〇メートルにある、一般には知られていない『LEVEL4』書かれた、最高機密室と呼ばれる部屋にいた。

中央にあるテーブルには、恭介達を襲った無人IS、ゴーレム？が置いてあった。

「……棗君の言う通り、やはり無人機ですね。登録されていないコアでした」

「そうか……」

「ISのコアは全部で四六七機……でもこのISに使用されているのは、そのどれでもない物でした」

「……………」

「？ 織斑先生？」

真耶が読んでも千冬は反応せず、ただディスプレイの映像を見続けるだけだった。



第6話「天使と龍と時々乱入者」(後書き)

戦闘シーン……難しい。

リミッター解除の英文、あってるかな？



「そのようだ。裏、お前は別の所でそれを読んでいる。織斑の準備は我々が手伝う」

「りよーかい。じゃあ、一夏。短かったけど同室の間楽しかったぜ」それがトドメになったらしい一夏は、がくり、と崩れ落ちた。恭介はそのまま寮の外へと向かう。

恭介は寮の裏へと回り、封筒から手紙を取り出す。すると、ポウ、と手紙の中の文字が光り出した。暗闇で読む事を前提とした特殊なペンで書いたらしい。

「やっぱり朱鷺戸か……」

手紙の一番下には、朱鷺戸沙耶とさよと書かれていた。内容はこうだ。

「ちょっとした情報が入ったから報告させてもらっわ。近々、というより今月中か来月の前半にIS学園、それもあなたの組に転校生が来るはずよ。それも二人。一人はラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツの特殊部隊、シュヴァルツェア・ハーゼ『黒ウサギ部隊』の隊長よ。まあ、ぶっちゃけ彼女自身にはおそらく性格的な問題しかない。でも、彼女のIS『黒い雨』レーゲンは少し危険ね。残念ながら詳しくは調べられなかったけど、結構ヤバイもの積ませてるみたい。

次にシャルル・デュノア。デュノア社社長の息子、って事で、二人目の男性IS操縦者として転校してくるみたいね。まあ、時風なら分かるだろうけど、このシャルル・デュノアは『彼』、ではなく『彼女』よ。デュノア社社長には息子なんていないもの。おそらくあなたのISのデータが欲しいんでしょうね。ま、ゼロなら心配は無いですよけど。

とにかく気をつけなさい。大抵の事じゃあアンタはビクともしないでしょうけど、一応ね。絶対に連中が手を出してこないとは限らないんだから。じゃあ、今度は直接会いましょ？

闇の執行部 副部長

第一部隊

恭介が読み終わると同時、光る文字は消え失せた。

「用意周到だな……相変わらず」

「どうやらこれからまた、忙しくなりそうだ。」

\* \* \*

時が流れ六月。

土日をまたぎ月曜日の朝。クラスメイトのみんなはISスーツのカタログを見ながら談笑していた。既に専用スーツのある恭介には関係のない事だが、来週からISスーツの申込期間が始まるらしい一応、生徒達には学園指定のスーツがあるのだが、申し込むスーツには個人にあわせた機能をもっているらしい。

まあ、女性、ということもあってデザイン的な物も気になっている者の方が多いかもしれないが。水着みたいな形状なのは変わらないにしても、ISスーツには様々なデザインが存在する。

「ねえねえ、なっつーはどこの会社のスーツなのー？」

「俺か？」

「そーそー」

やけに間延びした声で恭介に話を振って来た少女は布のほしげ本音ほんね。一夏から曰く『のほほんさん』だったか。袖丈が異常に長い制服を着て、なんだか眠そうでゆったりした、まさに『のほほん』とした少女だった。

「あ、私も聞きたーい」

「棗君のスーツもどっかの改造品なの？」

談笑好きで珍しい物好きな女子高生達は、すぐさま恭介の席周辺に集まり出した。

「あー、俺のは特注品だ。知り合いに作ってもらった」

「知り合いー？」

「ああ。ま、その辺は秘密って事で」

「えー、どーしてー？」

「その方がカッコいいからだ」

「そっかー。じゃあ仕様がなないねー」

「いいの！？ と、周りの女子達が騒ぐ。

と、教室のドアがガラガラと開いた。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

入って来たのは当然、千冬。その後ろに真耶も続く。

「さて、今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので、各人、気を引き締めるように。

各人のISスーツが届くまで学校指定の物を使うので忘れないようにな。忘れた物は代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。

それもない者は、まあ下着で構わんだろう」

いや構うだろ！！ と、恭介含むリトルバスターズ五人は思わず叫びそうになったが、叩かれても嫌なのでぐっと堪える。おそらく

恭介を信頼して言っているのだろうが……鋼の理性（自称）を持つ恭介でも、目のやり場に困る時は困る。

というか本当に水着まで忘れてたら下着でやらせるのだろうか？

「では、山田先生。ホームルームを」

「は、はいっ！」

眼鏡を拭いていた真耶は、言われると慌てて千冬と場所を交代した。

真耶は一つ深呼吸をし、

「えーとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ なんと二名です！」

「えええええええっ！？」

突然の転校生発言に、クラスの生徒達が一気にざわめく。まあ、転校生が来る、という話に盛り上がりがない所はあまりないだろうが、



やはりこの学校の生徒達は一回りも二回りも騒がしくなる。

と、再び教室のドアが開いた。

「失礼します」

瞬間、クラスのざわめきがぴたりと止んだ。

転校生の一人は、ある程度改造が許されるIS学園の制服を軍服風に改造し、左目に眼帯をした、まさに軍人といった風な銀髪の少女。

もう一人は。

セシリアよりも少し濃いめの金髪で、背中まである髪を首の下辺りで纏め、男子の制服を来た、少女のような少年。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

シャルル君が一礼する。クラス全員が啞然とし、開いた口が閉まらずにいた。

「お、男……？」

誰かが、少なくともリトルバスターズ以外の誰かが呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいる、と……聞いて………え」

シャルルは固まった。恭介を見て。

「きよ……恭介……？」

「お、おう。久しぶりだな。えーっと……」

「きよ、恭介！ あ、ああ、後で久しぶりあったついでに積もる話があるからまた今度ね！？ ね！？」

「あ、ああ……別に良いけど」  
「ほっ……」

そつと胸を撫で下ろすシャルル。

と、ようやく固まっていた生徒達が解凍された。すつ、と恭介は耳に耳栓をする。

『きゃあああああああああ………』

「ひゃあつ!?!」

まさにバインドボイス。窓でも割れそうな声だった。

「男子! 二人目の男子っ!?!」

「しかもうちのクラス!」

「美形! 棗君が守ってもらいたくなる系なら、守ってあげたくなくなる系!?!」

「しかも棗君と知りあい!? 棗君×デュノア君ね!? それとも逆!?!」

恭介は自分が元気だ、ということを実感はしているが、ここまで元気が、と言われたら首を傾げてしまう所だ。少なくともパーティーや祭りなど以外でここまでハイテンションになる事は少ない。

それをこのクラスは……: すぎえな! と恭介は内心で何故か賞賛していた。

ちなみに、最後に言葉に関しては聞かなかつた事にした。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに千冬が言う。

「み、皆さんお静かに! まだ自己紹介は終わってませんから……!」

まるで忘れ去られないようにしているかのように、存在感を示さんばかりの大声で真耶は叫ぶ。

当のもう一人の転校生は、騒ぎ立てる生徒達を侮蔑するような目で見つめていた。

「……………」

「……………挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました。…………ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

……………。

「あ、あの…………以上、ですか…………?」

「以上だ」

これで何回目かの涙目だった。

「！……………貴様がッ！」

ラウラが突然一夏を睨み、近づいてくる。

え？ 私？ と何が何だか分かっていない一夏は、ただ呆然とラウラを見つめる。

瞬間、突然ラウラが手を振り上げ、振り下ろした。彼女の掌は一夏目掛けて飛んでくる。

「！！！」

「え？」

が、その手は別の誰かに掴まれ止められた。

「……………恭介？」

「貴様……………邪魔をするな！！！」

「別に邪魔はしてない。ただ意味も分からず殴られようとしている幼馴染みを助けただけさ」

にやりと笑う恭介。だが、いつものような笑みではなく、目だけは笑っていないかった。

「……………ッ！」

「どうした……………？ 呆然として。具合でも悪いのか？」

(コイツ、なんて殺気を……………っ！ 周りは気付いていないのか！？) が、周りの生徒と真耶は頭に？をうかべ、何も気付いてはいない様子だった。千冬だけは冷や汗をたらりと流していたが。

「くっ……………！」

と、ラウラは恭介の手を振り払うと、踵を返して振り返り、再び一夏を睨みつける。

「私は認めない。貴様があの人の妹であるなど、認めるものか」

は？ 何言ってるの？ と、一夏を含め回りの生徒達は口をぽかんと開けて呆気にとられている。

「あ……………ゴホンゴホン！ では、ホームルームを終了する。各人は着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦

を行う。解散！」

千冬が手をパンっ！ と叩くと、クラスの生徒達が一齐に行動を起す。

すると、千冬とシャルルと一緒に恭介の元へと近づいて来た。

「おい棗、デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子の上、一応知り合いなんだろう？」

「分かってますよ。ほら、行くぞ」

「え、あ、うん」

元に戻った恭介はシャルルの手を引き、教室から出る。

「えーっと……？」

「女子が着替えるんだ。一応、男になつてるお前がいたら変態扱いだぞ？」

「あ……そっか」

「とつととアリーナの更衣室まで行くぞ。実習の時はいつもここからだからな。いつまでそうなのかは知らないけど、戻る時まで慣れとけ」

「う、うん……」

「ま、一応詳しくは聞かないで置いてやるよ。でも話せる時になったら、おにーさんに話してくれよ？」

「あはは……相変わらずなんだね、恭介は」

瞬間、恭介センサー（？）がキュピーン！ と反応した。

「邪気が来たか……！」

「は？」

すると背後から、

「ああっ！ 転校生発見！」

「しかも棗君も一緒！」

動く障害物  
IS学園女子生徒達が現れた！

正直言つて彼女たちはかなり迷惑だった。恭介もシャルルも、周りの女子達と同じように制服の下にISスーツを来ているから着替えは早い。が、それでも彼女達で時間を取られると移動時間的に授業に遅刻する可能性が高くなる。



「遅い」

スパン！ ひらり。と、出席簿アタックが飛んでくる。例によつて恭介は避けたが。

しかし千冬は続けて恭介に向けて出席簿アタックを放ってくる。

「ちっ……だから！ 避けるなど！ 言つて！ いるだろうが！」

「いや、だって当たつたら痛いじゃないですか」

「このっ！ このっ！ このおおおお！」

瞬間、脳天をブチ抜いたかに思えた一撃は、恭介が分身でもしたかの様にふつと消えた。

「!?!」

「故に、避けるための努力をは欠かしていません。おかげでこんな芸当まで出来るようになりました」

「うぐぐぐ……おのれ、無駄な特技を……」

千冬は悔しそうに恭介を睨み、恭介はふっふっふ、とニヤニヤ笑っていた。ただ一人、銀髪ウサギはそんな恭介を睨んでいた。

と、そんな恭介にセシリアが話しかけてくる。

「そう言えば恭介さん。今日の朝に一夏さんがポーデヴィツヒさんに叩かれそうになっていました。何か心当たりはありませんの？」

「いや……ないけど。一夏は無いのか？ 心当たり」

「な、ないよお！ 第一あの人とは初対面だもん！」

「何？ 一夏が何かやったの？」

「こちらの一夏さん、転校生の女子に殴られそうになりましたの」

「はあ？ なんで？ バカじゃないの」

「だからそれが分からないんだつてばあ。あとバカじゃ

「ふんっ！！」

スパパン！ ひらり。

「ちっ……またか」

「恭介に当てるためにわざわざ何も言わずに叩いて来たの!?!」

「それもある」

「それが一番でしょ!？」

が、千冬はそんな一夏の叫びを無視して、生徒達の前へと出た。

「では、本日から格闘、及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

『はいっ!』

一組と二組の合同演習なので、人数はいつもの二倍。故に返ってくる返事の音量も気合いも全てが二倍となっていた。

「くうっ……何かと言うとすぐにポンポンと人の頭を……っ!」

「……恭介のせい恭介のせい恭介のせい……」

何やら文句と呪いのような呪詛が聞こえてくるが、恭介はあえて無視した。

「鈴音……少し静かに」

「だって仕様がないうじゃない! 恭介のせいなんだから!」

「いや意味が……」

「今日は戦闘を演習してもらおう。ちょうど活力溢れんばかりの十代女子もいることだしな……。鳳<sup>ふうあん</sup>! オルコット!」

「な、何故わたくしまで!？」

「専用気持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る」

セシリアと鈴音は渋々前に出る。

そんな二人に千冬が何かを囁いた。すると、何故かやけにやる気を出して、

「やはりここはイギリス代表候補生のわたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね。専用機持ちの!」  
と言った。

「それで、相手はどちらに? わたくしは鈴音さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん、こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカ共。対戦相手は」

突如、キィイーン……という何か飛んでくる音が鳴った。

音の方向。上空を見ると、IS、『ラファール・リヴァイブ』





セシリアと鈴音、そして真耶はそれぞれ並び、配置に付いた。

「では……始め！」

そう言われると同時に、真耶は空中へと飛翔し、セシリアと鈴音も真耶を追いかけ、空へと飛び出していった。

「さて、今の間に……そうだな、ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせる」

「あ、はい」

空中で行われている三人の戦闘を見ながら、シャルルはすらすらと答える。

「山田先生の使用されているISは、デュノア社製『ラファール・リヴァイブ』です。第二世代開発後期の機体ですが、そのスペックは初期第三世代にも劣らない物で、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型のISの中では、最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七カ国でライセンス生産、一ニカ国で正式採用されています」

シャルルは更に続ける。

「特筆すべきはその操縦性の簡易性で、それによって操縦者を選ばない事と、多様性役割切り替えを両立しています。装備によって格闘、射撃、防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サイドパーティーが多い事でも知られています」

「ああ、一旦そこまで良い。終わるぞ」

上空では、真耶が射撃でセシリアを誘導し、そこで鈴音と衝突。そこを狙い、グレネードを発射。二人は爆発の中に消え、数瞬すると煙の中から二人が落下し、地面に激突した。

「くっ……うう……まさかこのわたくしが……ッ！」

「あ、アンタねえ……何面白いように回避先読まれてんのよ！」

「す、鈴音さんこそ！ 無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわー！」

「こっちの台詞よ！ なんですぐビットを出すのよ！ しかもエネルギー切れるの早いし！！」

「ぐぐぐぐ……っ！」

「ぎゃぎゃ……っ！」

……睨み合い、あーだこーだ、ガミガミガミガミ、と二人はいがみ合い続けた。スパン！ と二人は当然の様に出席簿アタックをくらう。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の實力は理解出来ただろう。以後は敬意を持って接するように」

パンパン！ と手を叩いて千冬は全員の意識を切り替えさせる。

「専用気持ちは、棗、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、鳳だな。ではグループ分かれて実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちが行う事。いいな？ では分かれる」

千冬が言つと、女生徒達は恭介とシャルルに群がってくる。他の四人には誰も行かなかった。

「棗君一緒に頑張ろう！」

「デュノア君！ わかんないとこ教えて〜！」

「ね、私も良いよね？ 同じグループに入れて！」

さすがの二人も苦笑だった。

が、そこで千冬の出番が再び来る。

「このバカ共が……出席番号順に一人ずつ各グループに入れッ！」

順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンドー○○周させるからな！！」

瞬間、シュバババババ！ と、女生徒達は一瞬で並び終える。

「最初からそうしろ、バカ者共が」

千冬は大きいため息をつく。そんな千冬を他所に、女生徒達はバシないように小声で呟く。

「……やった、棗君と同じ班だつ。名字のおかげねっ……」

「……うー、セシリアかぁ……。さっきはぼろ負けしてたし……は

ぁ……」

「……鳳さんよろしくね。後で棗君のお話聞かせてよ……」

「……デュノア君！ 分からない事があつたらなんでも聞いてね！  
ちなみに私はフリーだよ！ ……」

「……………」

専用機持ち達は気付いているのか、いないのか。少なくともセシリアは聞こえていたようだがくり、と肩を落とした。

が、一つ代わった班があつた。

無言。ひたすら無言。授業中では良い事なのだろうが、周りが見ただけべらべら喋っていると逆に不気味な印象を持たせる。

喋りたくても喋れない。話しかけたくても話しかけられない雰囲気になつている一つの班、言うまでもなく、ラウラの班だった。

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一機ずつ取りに来てください。数は、打鉄うちがねとリヴァイブが三機ずつです。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

こうして、騒がしくも一部静かな授業が始まった。

第8話「ウサギ隊長と時の風」(前書き)

恭介も無敵ではなかった……

## 第8話「ウサギ隊長と時の風」

実戦訓練では、特に何事もなく進み、終了した。ラウラに関しては終始恭介と一夏を睨みつけていたが、一夏は気付かず、恭介はそのフリをしていた。恭介としては、向こうから何かしてこない限りは何もするつもりは無かった。

そして昼休み。恭介は箒に誘われ、昼食に向かったのだが……。  
「……どういうことだ」

と、箒は恭介の後ろにいる一夏達を睨みながら言った。

「何が」

「何故こいつらまでいる」

「大勢で食べた方が美味しいじゃないか」

「それはそうだが……！ くっ……こいつがこういう奴だという事を失念しているとは……！」

「ふんだ！ 抜け駆けしようと思ってるからそうなるのよ！」

「ぬぐぐ……っ！」

胸を張ってふふん、と鼻を鳴らす鈴音に、思わず拳を握りしめる。すると、恭介の隣にいたシャルルが申し訳なさそうな顔で言う。

「えーっと……本当に僕が同席してもよかったのかな？」

「友達同士で気を遣うな、良いに決まってるだろ」

「そっか……ありがとう」

にこり、とシャルルが可憐に微笑む。そんなシャルルに、恭介は思わずときめいてしまうが、男にときめくな、などと言われても嫌なので、何とかポーカーフフェイスを保つ。

あ、そうだ。と、鈴音が唐突に言い出し、手に持っていたタツパ  
ーを開く。

「お、それって……」

「そう、酢豚。今朝作ったのよ。食べたい、って言ってたでしょ？」  
すると、隣にいたセシリアが咳払いをしだし、

「恭介さん？ わたくしも今朝は偶々、偶然早く目が覚めまして、  
こういう物を用意してみましたの」

と言いつつ取り出したるはランチボックス。中に入っているのは、  
色とりどりのサンドイッチ達。「イギリスにも美味しい物があると  
納得していただきませんか」と、セシリアは笑顔で言う。

「へえ……言うだけあるじゃないか。じゃ、とりあえず順番的に鈴  
音の酢豚から……」

恭介は鈴音からタッパーと箸を受け取り、一口頬張る。

「どう？ 美味しい？」

「ん……ああ、美味しい。やるじゃないか、見直したぞ」

「えへへ そっか」

「きよ、恭介！」

「恭介！！」

「どうした？ 箒に一夏」

言うと同時に差し出して来たのは一夏が持つ弁当一つ。

「一つ……？ 共同か？」

「う、うん……箒と一緒に作ったの……」

と、一夏が開けると、中には胡麻が少々振りかけられたご飯と、  
唐揚げ、卵焼き、ほうれん草にきんぴらごぼう。極めつけは一つだ  
け入っているウサギ型のリンゴ。

（恭介的に）まさに弁当、と言った感じだった。

「へえ、美味そうだな。どれも手が込んでそうだ」

「つ、ついでだついで！ あくまで、私達が自分で食べるために、  
時間をかけたただけだ！」

「それでも嬉しいさ。サンキュー箒、一夏」

「ふ、ふん……！」

「えへへ……」

箒は微妙に嬉しそうに頬を染めながらそっぽを向き、一夏は恥ず

かしそうに頬をかいた。恭介はそんな二人を見ながら暖かい笑顔で浮かべ、一夏の持つ弁当から唐揚げを一つ挟み、

「じゃあ、いただきます」  
頬張る。

「……………」

「うん、普通に美味しいぞ。これはどっちが作ったんだ？」

「わ、私だ……………！ 味付けはシヨウガと醤油、おろしニンニク、それとあらかじめ胡麻を少しだけ混ぜてある。隠し味には大根おろしが適量だな！」

「へえ……………聞いてるだけでも手が込んでそうだな。一夏はどれを作ったんだ？」

「えっと……………この卵焼き」

「これか。あむ……………」

「……………(どきどき)」

「んん、美味しい。さすがだな」

「そ、そう？ よかった〜！」

と、やけに楽しそうに話す三人を、鈴音とセシリアはムツとした表情で睨む。恭介の横にいるシャルルは、少し羨ましそうにその光景を見ていた。

「んー、本当に美味しいけど……………でも何で一個しか無いんだ？ まさ

かその弁当一個でお前ら二人分だったりしないよな？」

「え？ えーっと……………」

「失敗したのは全部自分で食べたからな……………」

「ん？」

「あ、あああつ！？ だ、大丈夫だ！ まあ、その、なんだ……………美味しかったのなら良い」

笑顔で慌てて誤魔化す筈。

しかし恭介はそれで良しとしなかった。

「オイオイ、ちゃんと食べないと午後キツイぞ。ほら、食え」

と、恭介は唐揚げを一つ挟んで箸に差し出した。

「……!?!?」「……」

「え、ええ!?!?」

「ほら。食べつて」

「あ、ああ……そ、それでは……」

差し出された本人は、ちよつと赤くなりながら、少し躊躇いつつその唐揚げを頬張った。美味しそう……というよりは嬉しそうに咀嚼し……飲み込む。

「良い……良いものだな」

「だろ? この唐揚げもつと誇つていいと思うぜ」

「唐揚げではないが……うん、良いものだ」

うつとり、といった感じで言う筈。

そんな中シャルルは、テンパっているのかなんなのか分からないが、

「あ、ああ! こ、これつてもしかして、日本ではカップルがするつていう『はい、あーん』つていうやつなのかな? な、仲睦まじいね」

そういうシャルルの言葉に、一夏達は過剰に反応する。

「何でコイツらが仲良いのよ!?!」

「そ、そうだよ!?!」

「そ、そうですね! やり直しを要求します!」

「いや、何のやり直しだよ」

それなら、とシャルルが切り出す。

「みんなで一つずつおかずを交換しようよ。食べさせあいつこなら良いでしょ?」

シャルルのそんな提案に、五人は黙り、一夏達はお互いの顔を見合い、その手は思いつかなかった……、と心の中で呟く。

「ん? まあ、俺は別に良いぞ。おかず交換は弁当の定番だし。ほら、俺が作った分」

「つてアンタ、自分の分作つてた訳?」

「まあな」



「ああ、今日やけに早く起きてると思っただらそれ作ってたんだ？」

「ああ。ま、一夏達が弁当やら酢豚やらを作ってくれてくるとは思わなかったけど、こういう事なら結果オーライだ」

そう言っただけで、恭介は弁当を開ける。中には日の丸なご飯と生姜焼き、レタスとトマトを間につめて、ポテトサラダが入っていた。

「ほう……」

「恭介さん、料理出来ましたのね」

「人並み程度にはな。母さんが開発者で、父さんと一緒に研究室にこもる事が多かったから、自分たちで作んなきゃなんなくてさ。妹も居ただけで、アイツはまだそんな時料理出来なかったから」

「ああ、鈴だね。鈴音の事を鈴音、って呼ぶ事になったのも鈴がいたからだっけ」

「そういえばいたわね。人見知りだったけど、最後にはそこそこ話してくれるようになったわ」

「私は……どうだったんだろうな。いつの間にか多少話す関係にはなっていたが」

「あー、僕はフランスで恭介と一緒に会ったなあ。恭介の後ろに隠れちゃって、可愛かったけど」

と、シャルルが言うと、

「そういえば二人って知り合いなんだよね？　もしかして小六の終わり頃にフランス行ったとき……」

「ああ。フランス行ってから……その翌日辺りだったか」

「恭介のお母さん……美夜子みやこさんが僕のお母さんに会いに来たんだよね？」

「へえ……それで……」

一瞬、恭介にはシャルルの表情が悲しげに見えたが、それについては今言及はしない。

「まあいいわ。とにかく食べさせあいつこよね。恭介が良い、っていうなら私は構わないわよ」

「わたくしは、本来ならばそのようなテーブルマナーを損ねるよう



「 恭介さん・セシリアさんがログアウトしました。」

＊ ＊ ＊

何とかログイン復活を果たした恭介は授業に途中から参加し、顔色が若干悪いままにやり過ごした。ちなみにセシリアはログイン復活出来なかった。

さて、部屋に戻って来た恭介とシャルルは、テーブルに向かい合つて座り、茶を飲みながら話していた。と言つても、主に恭介がこれまでにあつた事を一方的に語り、シャルルが相槌を打つだけなのだ。

「へえ……恭介つてやっぱり昔からメチャクチャだったんだね。蜂の巣に喧嘩売るって……」

「そうか？ 俺は仲間とやったら楽しい事を全力で追求して来ただけなんだよな。そうしたら蜂の巣にケンカを売る、って事になつただけの話さ」

「どこをどう辿つたらそこに行き着くのさ……」

「子供の頃の一番の強敵は親を覗けばやっぱり蜂だろ？ だからそれを打ち破つたら気持ちいいだろうと思わないか？」

「いや全然理解出来ないんだけど……」

「むう……シャルルにはまだ早かつたか……」

「いや時期とか関係ないと思うんだけど！？」

「シャルルは優等生過ぎるんだよ。もう少し緩まってくれりゃ、ちゃんと理解出来るようになるはずだ。少なくともアイツ夏達らは理解出来るはずだ」

「そつなの！？ え、僕がおかしいの！？」

などと話し、しばらくすると適当にシャワーの順番を決める。とりあえず恭介が先に入り、シャルルが先に入る事になった。

そしてそれぞれシャワーに入り、上がり、ベッドに座つて再び話

し始める。

「ところでシャル。さっきのお前の反応でなんとなく分かったけど、お前の母さんは……」

「……うん。恭介達がフランスから別の国に行った後すぐに、ね……」

恭介の母親、棗美夜子は前述したようにシャルル　シャルロットの母親に会いに来ていた。言わずもがな二人は知り合いだったようで、そろそろ危ないかもしれない、という話を聞いて会いにいったようだ。

シャルロットの母親は、真っ白な顔に、シャルロット似の金髪で、無理矢理作った笑顔ではなく、心から浮かべた笑顔で恭介と鈴、美夜子を迎えた。

あの時から彼女は危険な状態だった。

「……おばさんは、笑って逝ったか？」

「うん……絶対に辛いはずなのに……綺麗な笑顔で、ね……」

「だろうな……あの人は強い人だった。母親としても、一人の人間としても……」

短い間ではあったけど、学ばせてもらう事はとても多かった、と恭介は付け加える。

「だったら……俺は泣けないな。笑ってやらないと。泣いてたらあの人に説教されちまうぜ」

「ははっ……そうかもね。母さんだから……」

「でも……お前は泣いとけ」

え？　と、シャルロットは思わず恭介の顔を見る。

「おばさんが亡くなったとき泣いたのかもしれないけど、今もかなり泣きそうな顔してる。実際溢れてるしな……」

恭介は指で流れる涙を拭う。

「今は俺しかいないんだ。存分に泣いとけ」

「……あ……そう、だね……。じゃあ……ちょっとだけ……」

そこでは少しの間、少女の泣き声が響いていた。

\* \* \*

あれから一週間ほど過ぎたある日の放課後。恭介達リトルバスターズはIS訓練のため、アリーナにやって来ていた。近頃鈴音も参加し出したが、それ以外はいつもとあまり変わらない。

セシリアは最近だと、勉強（主に本格的な世界史か日本史）をしながらサッカーボールをリフティングしつつ、テキストを持っていない方の手で、テニスラケットでテニスボールをリフティングが出来るようになった。「もう淑女じゃなくね？」と言いたくなるような状況だが、それでもなんだかんだで並列処理能力は鍛えられているのか、『ブルー・ティアーズ』を制御しながら動く事は出来るようになった。

箒に関しては射撃の雨をかくぐりながら接近戦を仕掛けられるようになった。

鈴音はまあ単純に模擬戦するだけなので、特には無いが、段々と強くなってる来ている。

そして一夏だが、  
「えっと、織斑さんが恭介はともかく、オルコットさんや鳳ふうあんさんに勝てないのは、主に射撃武器の特性を把握していないからだろうね」「んー……一応分かってるつもりだったんだけど……」

今日は土曜日。という訳で、今日はISに多少なりとも慣れて来た一夏を集中的に鍛えよう、ということ、まず最初にシャルルと一夏で模擬戦してもらっていた。

結果は当然ボロ負け。

「知識だけで実戦した事は無い、って感じかな？ さっき僕と模擬戦したけど、ほとんど距離をつめられずに終わったよね？」

「うう……確かに、『イクゼニツンヨウレスト瞬時加速』も発動タイミングと軌道も予測さ

れてみたいだし……」

「織斑さんのISは近接オンリーだからね。だからこそ、射撃武装を主体としたISと戦う時には、より深く射撃武装の知識を知る事も大事だけど、『瞬時加速』自体の軌道は直線だからね。実際に対応するのはそんなに難しい事じゃないんだよ。軌道予測もしやすいから」

「直線的かあ……」

「あ、でも『瞬時加速』中は無理に軌道を変えようとか考えちゃダメだよ？ あんな速度の状態が無理に軌道を変えようとしたら、最悪の場合は骨折しちゃう事もあるみたいだし」

「……なるほど」

思わず想像したのか、青くなる一夏。

「それにしても、シャルル君の説明は分かりやすいなあ」

「そうかな？ 僕は普通に説明してるだけなんだけど……」

「いやいや、分かりやすいよ……」

言いながら一夏は遠い目をする。

今まで一夏は、箒達にIS講座を受けていたのだが、

『こうガキツとしてズバーンといった感じだ！』by箒

『なんとなく分かるでしょ？ 感覚よ感覚』by鈴音

『防御の時は右半身を斜め上前方に五度傾けて、回避の時は後方へ二〇度反転ですわ』byセシリア

と、行った感じだったのだ。本人的には分かりやすく言っているつもりなのだろうが、一夏には一ミリも理解出来ずにいた。

あれは俺でも分からん……と、恭介は思う。

ちらり、と箒達の方を見ると、

「ふん、まあ私のほどではないが分かりやすいな」

「あたしの方がもつと上手く出来るわ」

「分かりやすくはありますが、わたくしの理路整然とした説明の方がもつと分かりやすいですわ」

反省するどころか分かりにくさにもさっぱり気付いていなかった。

「だけど、織斑さんのISって『後付武装』<sup>イコライザ</sup>がないんだよね？」

「みたい。恭介は、零落白夜の仕様のためだけに領域が消費されて使えないのかもしれない、って言ってたけど」

「そうだろうね。『単一仕様能力』<sup>ワンオフ・アペリティー</sup>である零落白夜の為に全部遣われちゃってるんだと思う」

「わんおふ・あびりていー？ …… って、なんだっけ」

「言葉通りだ。単一仕様の特異能力、才能の事だよ」

恭介がそう説明してやると、なるほどー、と納得したような顔をした。

「ん？」

なんだか突然周りが騒がしくなって来ていた。

「ねえ…… ちょっとアレ……」

「うそっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国のトライアル段階だ、って聞いてたけど……」

恭介達はそれを警戒しながら見た。

黒いカラーのISがそこにはいた。

装備しているのは ラウラ・ボーデヴィツヒだ。

「おい」

「えっと…… 私？」

「そうだ。貴様、専用機持ちだそうだな。私と戦え」

ラウラの一方的な物言いに、一夏はムツとして、

「やだよ。私に戦う理由なんて無いもん」

「貴様に無くても私にはある」

「また今度でいいでしょ」

「ふん。ならば…… 戦わざるを得ないようにしてやる！」

瞬間、ズドン！ と、肩のレールガンが火を吹いた。

それを前に出て防ごうとするシャルロット。しかし、それを恭介は手で制した。

ドオン！ と、放たれた弾丸が空中で何かに衝突し、爆散した。

「……こんな密集空間で、いきなり大火力の砲撃を撃つとは……」

黒 ウサギは  
I s t e r s i e d e p u n k t a n a l l e n s  
沸点か  
c h w a r z e n K a n i n c h e n n i e d r i n g ? I  
俺の 低い  
s t e i n T y p e r G e b u r t a h n l i c h  
産まれの 知っている お前と 似たような  
w e r m i t I h n e n , w e i c h s c h o  
ぞ 奴は もっと 可愛い

「ッ！ 貴様あつー！」

ラウラは再びレールガンを撃とうとするが、

『その生徒！ 何をやっている！！ 学年とクラス、出席番号を  
言えー！！』

騒ぎを聞きつけたらしい先生が、スピーカー越しに怒鳴って来た。

「くっ……今日は引いてやるっ」

ラウラはそう言い残し、ISを解除して去っていった。

……今日の訓練は、とりあえず終わり、という事にした。

\* \* \*

夜。

恭介は今部屋におらず、シャルル一人だ。なんでも何か用があるらしいが、今のシャルルにはあまりにも好都合だった。

シャルルは恭介がいつも使っている簡易メンテ用のPCを立ち上げる。

「……ごめんね、恭介……」

申し訳なさそうに、泣きそうな顔でPCを操作し、ウイングゼロのデータを発見する。

シャルルはUSBをPCに差し込み、データのコピーにかかった。

カチリ、という音と共に、後頭部に硬い何かが当てられた。

「ッ……!?」

『……シャルル・デュノアだな?』



その声はボイスチェンジャーでも使っているらしく、機会じみた声だった。それでも男っぽい声だから男か。いや、自分のような者もいるのだから実は女性という事もありえる。

ここまで来れば、シャルルでも後頭部に当てられているのが拳銃の類だと言ふ事は理解していた。

「は、はは……ドアも窓も鍵は閉まっていたはずなんだけど……」

「そんなものは俺には関係ない。残念ながらも。コピーを中断し両手を上げ、ゆっくりこちらを向け。余計な真似をしようと考えるなすればお前は母親の元に行く事になるぞ」

「……ッ！ ど、どうして母さんの事を……！」

「早くしろ」

「くっ……」

シャルルはデータのコピーを中断し、USBを引き抜く。そして両手を上げてゆっくりと後ろを向く。

そこにいたのは仮面の男だった。

細く黄色い縁の取られたワイシャツに青緑のネクタイ。その上に赤く縁取った襟付きの黒い上着を着て、ズボンも黒。そして頭には学生帽をかぶっていた。

「だ……誰、なの……？」

思わずそう聞いていた。

男はただこちらに銃を向けたまま、

『ソレスタル・ビーイング第一部隊、『闇の執行部』部長、時風瞬』ときかせ しゅん

そう、一言だけ言った。



## 第8話「ウサギ隊長と時の風」(後書き)

今更だけど、これプロットも何も無いんだよね……。途中で行き詰まったらどうしよう……。

なんかいつつも二次創作だとプロット書かないなあ……。

ついでに……。結構同じ言葉使ってる事多い。何とか直したい所だ……。

今度はドイツ語……あってるか分からないけど、違ったら教えてください。

あと、ルビ文字読みづらくてごめん。なぜかここまで分割しないと反応しなかった。パソコンのせいなのかやり方が間違っているのか

…

第9話「背中のネコ園」（前書き）

背中のネコ園…なのはでも使っちゃってるけど大丈夫かな…

## 第9話「背中のネコ」

時風とシャルロットが出会っている頃、学生寮のとある所では…

「勝負だよっ！ セシリアー！」

「望む所ですわー！」

一夏がさすらっていた。

何故か女でした

第五位 織斑一夏

V S

エレガント（自称）なお嬢様

第四位 セシリア・オルコット

周囲の生徒達から様々な武器が投げられる！

「これだっ！」

一夏の武器……ボディーシャンプー 現在の最小・最大Hit数

1 - 1

「これですわっ！」

セシリアの武器……クリップ式小型扇風機 現在の最小・最大H

it数 1 - 2

BATTLE START!!

セシリアの攻撃！

「行きますわー！！ えいつ！」

セシリアはクリップ式小型扇風機を一夏の顔に挟んだ！

合計一個のクリップ式小型扇風機を挟んでいる！

一夏に五〇のダメージ！

「行くよ！」

一夏はボディーシャンプーで全身を泡立てている！

セシリアに五三のダメージ！

「行きますわ！！！」

セシリアは一夏の顔にクリップ式扇風機を挟んだ！

合計二つのクリップ型扇風機を挟んでいる！

一夏に六二のダメージ！ 一夏に五四のダメージ！

「こっだ！」

一夏はボディーシャンプーを泡立てている！

「行きますわ！」

セシリアは攻撃しようとして泡で滑った！

セシリアに一一二のダメージ！

「行くよ！」

一夏はボディーシャンプーで全身を泡立てている！

セシリアに五七のダメージ！

「なるほど、こうやるんだね」

一夏は『泡立てる』のコツを覚えた！ 1 - 1 1 - 2

クリップ型小型扇風機が全て落ちた。

「行きますわ！」

セシリアは攻撃しようとして泡で滑った！

セシリアに六一のダメージ！ セシリアに五二のダメージ！

「それっ！」

一夏はボディーシャンプーで全身を泡立てている！

「私の番ですわね！」

セシリアはクリップ型小型扇風機を一夏の顔に挟んだ！

合計一個のクリップ型扇風機を挟んでいる！

一夏に四九のダメージ！

「使い込むと可愛くなって来ますわね……」

セシリアは『挟む』のコツを掴んだ！ 1 - 2 1 - 3

「行くよ！」

一夏はボディーシャンプーで全身を泡立てている！

セシリアに五三のダメージ！

「行きますわよ！」

セシリアは攻撃しようとして泡で滑った！

セシリアに六四のダメージ！ セシリアに七〇のダメージ！

「それっ！」

一夏はボディーシャンプーで全身を泡立てている！

セシリアに

「行きますわ！」

セシリアは攻撃しようとして泡で滑った！

クリティカル！

セシリアに一〇七のダメージ！ セシリアに一〇一のダメージ！

「きゃあああああああッ！！！」

セシリアは倒れた！！

「やった！ 私の勝ち！！！」

セシリアは『金ドリルの化身』の称号を得た！

「く、屈辱ですわぁ！！！」

### ランキング表

第一位 織斑値冬

称号：バトルランキング

### 暫定王者

第二位 篠ノ乃箒

称号：剣道娘筆頭

第三位 織斑一夏

称号：何故か女でした

第四位 セシリア・オルコット

称号：金ドリルの化身

第五位 凰鈴音

称号：返つて来た負け犬娘

第六位 棗恭介

称号：あらゆる日常をミ

ッションにするリーダー

『ソレスタル・ビーイング第一部隊、『闇の執行部』部長、時風瞬ときかせ しゅん』  
「や、『闇の執行部』……それに、時風瞬……！」

シャルロットの記憶にソレスタル・ビーイングなる組織は知らない。が、デュノア社の関係で、『闇の執行部』とその部長、時風瞬の存在を知る事は必然であったとも言える。  
公にはされていない『闇の執行部』。

しかしその存在はほとんどの大手会社が知っていると云っても過言ではない。

彼らはその名の通り闇よりの執行者。

重い犯罪、特にIS関係の物に対し、直々に裁断を下しにかかる謎の組織。時として誰かの護衛をやっていたり、時としてどこその警備員をしている など、裏世界では噂は絶えない。しかも、『コアが作れる』、『大量のISを保有している』、『男の操縦者が何人もいる』などの噂があるにも関わらず、その存在はIS保有数や動きなどを監視する、国際IS委員会ですら黙認しているという噂すらある。

そして。そんな『闇の執行部』の部長であるのが時風瞬と名乗る仮面の男。

常に仮面と学帽、そして制服姿で現れる謎に包まれた男であり、その正体は誰も見た事が無いとか。

そんな男が目の前にいる。

が、シャルロットは最後の足掻きとばかりに言葉を発した。

「き……君が時風瞬だ、っていう証拠はあるのかな……？」

『証拠？』

が、時風は何の動揺も見せず鼻で笑ってみせさえた。

『俺達の噂の中にこんな物があるだろう。奴らは影の兵士を使うと。これが証拠にならないか？』



瞬間、時風の足下から二つの何かが出て来た。

それは 人間。しかも顔も手も何もかもが真つ黒なまさに『影』の人間。唯一色があるのは、着ている時風と同じ制服だけ。完全に現れた二つの『影』は、シャルロットに銃を向ける。

腰が抜けそうになった。

「なっ……………なっ……………」

『これが証拠だ。理解したか？』

「ど……………どうなって……………」

『ISなんて、科学的な兵器すら存在するほど技術が進歩した時代だと、神秘オカルトが役に立つ事もある 　そう言う事だ』

神秘だつて？ 何をバカな 、などと言う気も起きなかった。

「……………それで……………なんで僕の所なんか君みたいなのが……………」

『それは自分が一番よく分かっているはずだ、シャルル・デュノア。

いや 　シャルロット・デュノア』

「！……」

何故それを……！

『何故、とでも言いたげだな。答えは簡単だ。「闇の執行部」の諜報能力を甘く見るな。お前がここに何故いるかも分かっているぞ。

父親の命令で、棗恭介のウイングガンダムゼロ・パーフェクトカスタム、あわよくば織斑一夏の白式のデータを取ってこいと言われたのだろう？』

「そ……………そこまで……………」

『同じ事を二度も言わせるな。第一、たかが一組織がこの程度の諜報能力を持たずに国際IS委員会に黙認などされる訳が無いだろう？』

それは……………そうなのかもしれない。

『もっと詳しく説明してやろうか？ 　お前は父親の愛人の子だ』

「やっぱりそれも……………」

『二年前、母親が亡くなるまでは父と別に暮らし、その後デュノアの家に取り取られる。その際様々な検査をする過程でIS適正が高い事が判明し、非公式のテストパイロットをする事になる』

「……………」  
『父親に会うのも会話するのも数回程度。本邸に呼ばれば本妻に罵倒を浴びせられる　　などなど、家庭事情は良いか悪いかと言え  
ば悪いな』

「僕にしてみたら最悪だけどね……………」  
時風は更に続ける。

『それからしばらくすると、デュノア社は経営危機に陥る。ラファール・リヴァイブがどれだけ優れていると所詮は第二世代。『イグニッション・プラン』から除名されているフランスにとって、第三世代の開発は急務だ』

『イグニッション・プラン』とは、欧州連合の統合防衛計画だ。今では第三次『イグニッション・プラン』の次期主力機の選定中。

しかし『イグニッション・プラン』からフランスは除名されている。故に自国の防衛は自国でしなければならぬ。だからこそ、フランスには第三世代の開発を急ぐ必要があるのだ。

そんな中デュノア社は第三世代の開発に難航している。そのせいで国からの予算は大幅にカットされ、次にトライアルに選ばれなかった場合は援助を全面にカット。その上ISSの開発許可すらも剥奪されてしまう。

量産機のシェアが世界第三位という、今の所安泰なデュノア社も、これからの事を考えると会社の存亡に関わる危機だという事だ。

『そのため、さっきも言ったがお前は棗恭介のウイングゼロ、チャンスがあれば織斑一夏の白式のデータを奪いに来させられた。男装しているのは　　どうせ広告塔として扱われただけだろう』

「そう……………だね。その通りだよ。さすがは『闇の執行部』、と言った所かな」

シャルロットは自嘲的な笑みを浮かべる。

『さて。バレたからには本国に呼び戻される。デュノア社はつぶれ、他企業の傘下となる　　か。まあ、お前には関係のない事だな』

今ここで死ぬお前には。

「…………え？」

『そのためにここに来た……という予想くらいは立てられそうな物だがな？ まさかそこまで頭が回らなくなっているのか？』

「…………ここで銃なんか撃つたら」

『安心しろ。今この部屋は俺の部下が特殊な装置を使い、空間ごと隔離している。つまり……俺がここでRPGをぶつ放そうが、お前が大声を上げようが誰にも聞こえないし助けになど来ない。お前のリーダーですら、な』

「…………あ…………」

脳裏に浮かぶ恭介の顔。

彼が来れない。

それだけで胸が締め付けられるような痛みと、どうしようもない不安がこみ上げてくる。

しかし……シャルロットの頭には、既に諦めで埋め尽くされようとしていた。

「…………そっか…………。じゃあ…………仕様がないかもね。君達に目を付けられるような事をしてたんだから…………」

『…………つまらない女だ』

「え？」

仮面の中の表情は読み取れない。が、声だけはボイスチェンジャー越しても、何か呆れたような雰囲気があった。

『見た所好きでやっている訳でもなさそうだ。父親の言う事に対し何の抵抗もせず従いに来たという訳だな。本妻の不当な扱いにすら何の抵抗もしなかったそうじゃないか。本当につまらない女だ。そんなものは人間でもなんでもなく、ただの人形だ。生きながら死んでいる 矛盾した存在だ』

「…………っ」

『楽なのか楽だろうな、そうしていれば。少なくともただ抗うよりは楽だ。周りの流れに身を任せ、ただただ流されていく。それはそれは楽だろう。限りなくつまらなくはあるがな』



の仲間になれ。今以上にスパイ三昧だろうが、少なくとも人形ではなくなる。仕事は選べるからな」

銃口を顎にさらに押しつけ、

「ここで死ぬか。生きるか。どうする。選ぶ勇気の無いビビリではないというのなら選んでみせる……ッ！」

そして時風は黙った。

数秒、数十秒、もしかしたら数分かもしれないとも思えるような数瞬が過ぎる。

そして……シャルロットの口が開く。

「……たい……」

「聞こえないな」

「……生きたい……ッ！」

涙をぼろぼろと流し、シャルロットは答える。

「僕は……まだ言っていない……恭介に……こんな僕を友達って呼んでくれてありがとう、って……言っていないんだ……っ！ だから……まだ……死にたくないよお……」

「……なら、俺達の仲間になるか？」

「……」

「どうした？」

「……ならない。君達の仲間になんか……なるもんか……」

「……そうか。なら」

時風はシャルロットの胸ぐらを離し、銃口を向ける。

「……っ……」

そして トリガーを引いた。

思わず目を閉じる。

ポンッ！ という銃声とは地球と木星ほど離れた音が鳴った。

「……は？」

「ふう……ったく、このキャラ疲れるぜ……。なんで時風のキャラ

こんな感じにしたんだ？ 俺。あ、スクレボ読んだからだった……」  
さつきまでと全く違う喋り方に、驚いていいのかツッコミを入れれば良いのか黙っていけば良いのか分からなくなるシャルロット。そんな彼女に気付いているのかいないのか、時風は好き勝手に続ける。

『おい朱鷺戸。いつまで隠れてる、とつとと出てこい！』

「あら、やつと出番かしら？」

「うわぁッ！！？」

突如シャルロットの隣から女性が現れた。

その女性は……一言で言うなら美少女だ。シャルロットと同じような金の長髪を白いリボンでツインテールにして、真ん中だけ余らせた髪を黒いリボンで纏めている。服装は……時風が来ている制服の女性版だろうか。同じく細い黄色の線の入ったワイシャツとピンク色のリボン。赤で縁取られた襟のブレザーと、チエックのスカート。

座り込んでいるからこそ見えるのだが、彼女が翻したスカートの中には銃のホルスターといくつかのマガジンが入っている。

「さて……まあ、入る入らない以前に、あなたには『ソレスタル・ビーイング』に入ってもらおうわ」

と、自己紹介も無く女性はそんな事を言った。

「ちよっ、僕は……！」

「安心しなさい。別に『闇の執行部』に入れて言ってるんじゃないわ。私が入れて言ってるのは、リトルバスターズ裏執行組織、ソレスタル・ビーイングよ」

「……………は？」

理解不能だった。

なんて言った今この女。

「ほら、さつきと仮面取りなさいよ時風 じゃなかった。恭介」

「は？ 恭介」



気がつけば窓に宇宙が見えていた。

「……………は？」

「よし。ついたな」

「え？ ちょ、こ、ここどこ！？」

「その話も纏めてする。とりあえず付いてこい」

「ええ！？ も、もう！！」

相変わらずというかなんというか、とにかく一方的な恭介に、とにかく付いていくしか無いシャルロット。

ここがどこなのかさっぱり皆目検討が付かないが、見た所どこかの施設……………のようだった。

通路の壁は灰色の、なんだかハイテクそうな感じがする鉄の壁。と言っても何だか鉄っぽくない、とも言えそうなものだった。

取り付けられている大きな窓には宇宙が広がっている。そこには当然、あの青き地球も映っている。

「ん？ 恭介じゃないか。その娘が例の新入りか？」

と、話しかけて来たのは、ラウラとはまた違った銀髪をオールバックにし、胴着に袴な男性だった。年齢はおそらく恭介と同じくらい。腰には何故か竹刀がさされている。

それだけならまだ良いのだが、何故かその上に赤と青のカラーをしたジャンパーを着ている。

「そうだ謙吾。シャルロットという。俺のクラスメイト兼ルームメイトだ」

「なるほど。ふむ……………」

すると謙吾と呼ばれた男性は、シャルロットをまじまじと見つめ始めた。

「あ、あの……………何か？」

「いい目をしている」

「は？」

「復活したて……………と言った所か。恭介に喝を入れられたようだな。まだ今の理樹には少しばかり遠いが、近い目をしている」



「は、はあ……（理樹って誰？）」

「まあ、ソレスタル・ビーイングに入ったのならこれから何度も会うだろう。よろしく頼む」

「は、はい……こちらこそ」

握手を求められたので、反射的に握手する。

いや、別に入った訳じゃないんだけど……と思いつつも、今は黙っておく事にした。

そのまま謙吾はどこかに去って行く。

「ここだ」

と、恭介はドアを開ける。……と言っても、自動ドアのよう形で勝手に開いたのだが。

それに続くようにシャルロットは部屋に入　ろつとしたら、突然風が吹いたかと思うと誰かに胸を揉まれ始めた。

「ひ、ひゃああっ！！？」

「ふむ。私ほどではないがそこそこあるようだな。C……？　いや、Dか？」

「ちょ、ちよつと……んっ……！　だ、誰ですかあ！？」

「来ヶ谷唯湖という。よろしく頼む。そしてこのまま揉ませてくれしばらく」

「ちよっ……やめっ……ひあっ！？」

「何してんじやボケエー……っ！？」

「ドリフっ！？」

ドカツ！　という音と共に、唯湖は吹き飛ばされた。……かに見えだが、ゆるやかに着地していた。

誰がやったのかと思ってみると、そこにいたのは数年ぶりの友人だった。

「り、鈴！？」

「ん？　なんだシャルか。大丈夫だったか？」

「うん、なんとか……」

「全く。突然人の側頭部にハイキックとは酷いじゃないか鈴君」

「くるがやがせ、せ、せくはら？ をしてるからじゃボケっ」

「セクハラは地位的な差などを利用して部下等に性的嫌がらせなどをしたり強要したりすることだ。私と彼女には地位的な差も権力的な差もない。故に今のはセクハラではなくただの触れ合いだ」

「そうなのか？」

「信じるの!？」

「おいシャル。何してるんだ？」

と、恭介が部屋から出てくる。

「来ヶ谷……なるほど。大方の事情は把握した」

「さすがだな恭介氏。私を見ただけで状況を把握するとは。だがいささかムカつくぞ」

「日頃の行いを思い返してみる。分かっても仕様がないだろ」

「ふむ……正論ではある」

どうやらこのようなり取りが日常茶飯事らしかった。

\* \* \*

「つと、こういう事だ。分かったか？」

「う、うん……何とかね」

シャルロットは恭介から、ことの次第を聞かされていた。

ソレスタル・ビーイングとは、恭介が作った秘密組織だそうだ。

創設理由としてはかつて出会った事件がきっかけらしいが、そのあたりははぐらかされた。

そしてここは『リトルパス 背中のネコ園ターズ?』と呼ばれる、ソレスタル・ビーイングの宇宙にある秘密基地らしい。

シャルロットに関しては、どうやらさっきいた女性、じゅめい 朱鷺戸沙耶せ 率いる諜報部隊がシャルロットの事を嗅ぎ付け、いろいろと調べていたそうだ。

恭介としてはリトルバスターズがメンバーがそのような事態になっているのは見過ごせなかった。と、言う訳でソレスタル・ビーイングの第二世代、IS的には第三世代のデータを渡す代わりにシャルロットをソレスタル・ビーイングに引き取ったという訳だ。

あの茶番劇は、謙吾が言っていたように喝を入れるため。ちゃんと自分の足で立って、ちゃんと自分で未知を選んで歩けるように再びするために、だそうだ。

「なんとうか……びっくりした。」

「まあ、その……なんだ。そのためとは言え、さつきも言ったが大分酷い事を言った。すまん」

「良いよ恭介。本当の事だったんだし……それに」  
「それに？」

「こうして私は思惑通りになったんだから、結果オーライでしょ？」  
皮肉を混めたつもりはない。

それを察したらしい恭介は、いつものように笑った。

「そうか……ありがとう」

「こちらこそ、ね」

二人して手を差し出しあい、握手をする。

と、さつきから傍観していた唯湖が口を開く。

「そうと決まれば、とりあえず専用機を渡さなくてはならないのではないか？ 彼女に適正が出た機体はもう仕上がっているのだから？」

「まあ……な」

それを聞いた恭介は、少し暗い顔をする。

「？ どうしたの？」

「……シャル。俺はお前を助けるためとは言え、危険な世界に巻き込んでしまった。それこそ命をかけるような……」

「恭介……」

ソレスタル・ビーイングがどんな組織かはまだ分からない。が、彼がこんな顔で冗談を言う時はほとんどない。一年ほどフランスで

遊んでいて、なんとなく芝居か芝居でないかも分かるようになって来たシャルロットは、おそらく本当に危険な世界にいることを察した。

それも、戦争並みに。

しかしシャルロットは笑顔で返す。

「良いんだよ、恭介。時風の時にはああ言ったけど……でも、そういう事なら僕は迷わない。うん……僕は、自分の意志でソレスタル・ビーイングに入るよ。それに、案外ほっとけないしね、恭介って」  
「……ありがとう」

「……さて、格納庫へ行こうか。君の専用機を出すよう今連絡した」

\* \* \*

格納庫へと向かいながら、シャルロットは唯湖と恭介から、敵や適正についての話を聞いていた。

敵については……もう少し時が経ってから、ということでも、かつて起きた『198号IS襲撃事件』という、旅客機を襲い撃墜したという事件を起こした犯人である　という事だけを聞いた。

適正というのは、『純粹種のイノベーター』としての適正、及びその上でどの機体に合っているかの適正のようだ。イノベーターというのがイマイチよく分からないが、簡単に言えば人が進化して寿命とかが長くなった人間、らしい。まだ他にもありそうではあるが、そうした説明を終えると同時、格納庫についた。

そこには、『深緑』がいた。

「名称　『ガンダムケルデイルム・サバーニャ』。超射撃特化の機体で、全身にGNミサイルポッドと無駄にビットをつけた機体だ。まあ、詳細データはこれを見てくれ」

シャルロットは　今日からガンダムマイスターとなった。



第9話「背中のネ」(後書き)

どうしよう……グダグダになってないかな？

ガンダムケルディム・サバーニヤ（前書き）

なんか……子供が考えた過剰装備な機体っぽくなってる気が……。

## ガンダムケルデム・サバーニヤ

『ガンダムケルデム・サバーニヤ』

### 搭乗者

・シャルロット・デユノア

### 武装

- ・GNホルスタービット×28機
- ・GNライフルビット?×10機
- ・GNライフルビット?×4機
- ・GNシールドビット?×12機
- ・GNミサイルポッド×数百発

### 特殊機能

- ・ツインドライブシステム
- ・マルチロツクオンシステム
- ・ケルデム・サバーニヤ専用サポートAI『ハロ』×3

### 特殊技能

- ・TRANS-AMシステム

### 特殊導力

- ・GNドライブ(オリジナル)

ワンオフ・アビリティ  
単一仕様能力

- ・弾丸量子化



無駄にビットを積み込んだ機体。

ホルスタービットは腰に二枚重ねでアームに装備されており、二〇機。肩に四機ずつで八機。計二八機装備されている。

ライフルビット？は腰のホルスタービットの、二枚重ねの内一枚にだけ一機ずつ搭載されている。計一〇機。

ライフルビット？は、後ろ肩に二機ずつ。計四機。

シールドビットは、手足に三つずつで、計一二機。

全ビット数五四機というあほらしい数。三つ搭載された八口は、ほぼこのビットの制御のために積まれた。

ライフルビット？は格納されたセンサーとグリップを展開する事で、手持ちか気としても使用可能。その際、遠距離射撃用のスナイプモードと、近距離格闘射撃用のトンファーモードがある。トンファーの時は、スナイプモードの銃身が途中から畳まれ、トンファー状になる。畳まれた方の切れ目に小型ナイフがあり、スナイプモードの銃身の上方から刃が飛び出す（それぞれ粒子強化済）。

マルチロック等は映画版と同じ。

単一仕様能力の『弾丸量子化』はその名の通り弾丸を量子化する。と言っても、手持ちの弾丸の事で、簡単に言えば身体中にあるミサイルポッドの中身が切れたら、オートで装填される……という事だ。正直、単一仕様能力にする必要は無いが、長期の戦闘も考慮して、とりあえずこうしておいたようだ。

ちなみに、ケルデイル・サバーニヤはシャルロットのラファール・リヴァイブ・カスタム？に上書きされているため、待機状態は十字

マークのついたオレンジ色のネックレス・トップ。  
ラファールの方を使う事も可能。

第10話「初起動とキレる我らがリーダー」(前書き)

他のと比べるとちょっと短め。ついでに展開が早い……かも。

## 第10話「初起動とキレル我らがリーダー」

リトルバスターズ?  
背中のネコ園にある訓練場は、IS学園にあるアリーナと同等の大きさを有している。更に、背中のネコ園を囲む五重のバリアによって宇宙とは遮断されているので、訓練場は基本的に屋根が開いており、宇宙を垣間みながらの訓練が可能となる。

ちなみに、五重のバリアはウイングゼロがフルパワーで『ツインバスターライフル』を撃つても破る事は不可能である。

さて、そんな場所であるこの訓練場では現在、シャルロットの機体となったガンダムケルデйм・サバーニヤの初起動テストが行われている。

フルスキン  
全身装甲のケルデйм・サバーニヤの前方には、数百のターゲットとなる丸いガジェットが浮いている。

「よし……ハロ！ ビット全機展開！」

【リョウカイ、リョウカイ！】

ハロがそう返事すると、様々な部位に装備されたビット達が展開される。その内二機の『ライフルビット？』がシャルロットの手元に近づき、格納されたセンサーとグリップが展開する。それをシャルロットは掴む。

『うん、ちゃんと動いてるね。じゃあ、目の前にあるガジェットをマルチロックでロックオンして、乱れ撃ちしてくれるかな？ 動かないでね』

と、言うのは開発副主任であるらしいビリー・カタギリ。男性としては珍しく(?)長く伸ばした髪の毛をポニーテールにしている。『あ、ガジェットはそこそこ速く動くから。じゃ、頑張るって』

「はい！」

シャルロットは『ライフルビット？・スナイプモード』をまだ動いていないガジェットへ向ける。

『じゃあ、スタート！』

カタギリが言うと、目の前にいたガジェット達が一斉に動き出した。

三六〇度を動き回るガジェット達は、なるほどそれなりの速度である。おそらく打鉄うちがねくらいの速度だろうか。特に何かしてくる訳ではないが、単純な機動をしている訳ではないので、多少狙い辛いかもしれない。

シャルロットはマルチロックオンシステムを起動させ、それら全てをロックオンする。シユピンシユピン、と一気に全てのガジェットがロックされていく。

マルチロックオンはともかく、この速度はその辺のISには無理そうだ。

そして最後に一機もロックオンが完了する。

「よし……ケルデイル・サバーニヤ、乱れ撃つッ!!」

瞬間、ケルデイル・サバーニヤは五四の砲を一斉射した。

ズドドドドドドドドドドオオーン!! と、全てが命中しガジェットが爆散する。しかしシャルロットは射撃の手を止めずに次々に撃墜する。シャルロットが銃口を向けたガジェットにはビット達は意にも介さず、別の機体へと五二の銃口を向け、撃墜する。数百のガジェットが全滅したのは、一分にも満たず、たった数秒だった。

『うん、まあ及第点かな』

「あの程度ならもつと早く全滅させられる　ってことですよね」

『まあね。でもその辺は経験と慣れが必要になっていくから、今はこのくらいで十分だと思うよ。それにまだこれだけの敵と戦う事なんて無いだろうし。とりあえず今日はこのくらいで良いかな。じゃあ、ケルデイル・サバーニヤを解除して。IS学園の寮に送るよ。』

あ、恭介君はもういるから』

「はい、分かりました」

言ってケルデイル・サバーニヤを解除し、訓練場の地面に着地する。

『あ、そういえば気になってたんだけど』

「？　なんですか？」

『君も恭介君が好きなのかい？』

「ぶっ！？　ゲホゴホ！　な、何言ってるんですか！？」

『ははは、ごめんごめん。でも背中（むち）のネコ園にも何人か好きだ、っていう人がいるからね。好きなんだったら頑張つてアプローチするか、結託してハーレム化させるとかした方が良いよ。誰かに取られる前にね。ちなみに、後者を選んだ娘たちが前にもいるんだ。相手は別の人だったけどね』

はっはっは、とカタギリは笑いつつ、転移システムを起動させる。すると、シャルロットの足下に魔法陣らしき文様が光り出す。

『じゃあ、また今度用があったら呼ぶよ。あ、学年別トーナメントで使ってくれると嬉しいな。戦闘時のデータが取れるからね。じゃ』  
カタギリがそう言い終わると、シャルロットの視界は光に包まれた。

シャルロットは帰ってくると、すぐにベッドへ倒れ込んだ。隣では恭介がお茶を飲みながら、お疲れ、と言ってくれる。それだけでなんとなく心が暖かくなる。

……シャルロットは、恭介が好きか嫌いか、で聞かれれば確実に好きだと答えるだろう。それも恋愛的な意味で。

だが、今はまだ勇気が貯まっていない。

でも近いうちに言えるようになる気がする。

そんな気がしている。

\* \* \*

翌日。恭介とシャルルは、同室になってから日常となった一緒に登校時、自分たちの教室から何やら女生徒たちのいつも通りの騒が

しい声が聞こえて来た。

「本当だってば！ この噂、学園中で持ち切りなのよ！？ 月末の学年別トーナメントで優勝したら棗君と交際でき」

「俺がどうかしたか？」

「きゃあああああああああつ！？」

「うおっ……」

突然悲鳴を上げる女生徒に、思わず驚く。当の女生徒はそそくさと自分の席の方へと走っていった。

「……で、何の話だったんだ？ 俺の名前が拳がってたけど」

「う、うん？ そうだったけ？ き、気のせいじゃない？」

「さ、さあ？ どうだったかしら。き、気のせいじゃありませんの？」

何故かやけに慌てふためき、作り笑いを浮かべて誤魔化す。当然さっぱり気のせいではない事は分かっているが、知られたくないなら特別聞く理由も無いので「なら良いけど」と、返しておく。

「じゃ、じゃあ、あたし自分のクラスにもどるからっ！」

「そ、そうですね！ わたくしも自分の席につきませんとっ！」

若干安心した感を垣間見せながらよそよそしくその場を離れていた。それじ便乗して、集まっていた数人の女生徒たちも自分たちのクラスや席に戻っていく。

「……なんだったんだらうな」

「さ、さあ……」

いつも通り何事も無く放課後。

シャルルと恭介は第三アリーナへと向かっていた。

「ごめんね、付き合ってもらっちゃって」

「気にするな。今のうちに機体に慣れておくのは大事なんだし」

実は、シャルルが恭介にケルディム・サバーニヤに慣れるために模擬戦をして欲しい、と頼んで来たのだ。恭介としても断る理由は







「……行くぞ三人とも。一応保健室に行っておいた方が良い」

「そうだよ。そんなにボロボロなんだから」

が、恭介もシャルルも意にも介さずに一夏たちをISの腕で抱え上げる。

「私は無視するとは……良い度胸だなッ!!」

ラウラは言っただけで全速で恭介に突撃し、プラズマ手刀を思いきり振り下ろす。

それを恭介は一瞥し、正面から受け止めた。

「なっ……!?!」

「……やめとけ。今の俺はギリギリ感情があふれるのを抑えてるだけだ。そっちに集中し過ぎてて手加減は出来ない」

思わず殺しちまっても知らないぞ……?」

ゾクリ、と背筋が凍った。

思わずラウラは飛び退く。

(恭介……本気でキレてる……)

と、一夏は恭介を見ながら内心で呟く。

瞳孔が開きかけている恭介からは、一夏たちにも感じられるほどの殺気が漏れていた。周りにいる鈴音たちですら冷や汗をかいている。

「……行くぞ、四人とも」

ラウラは恭介が立ち去りしばらく経つまで、動く事が出来なかった。



## 第11話「2nd BATTLE START!!」

恭介たちは、一夏たちを担ぎ、アリーナから急いで保健室へ向かった。

そしてなんだかんだで一時間が経過していた。怪我事態はそれほど大したものではなかったが、保健室で治療を受け、しばらく休む事になった。何故かセシリアと鈴音はムスツとしていたが。

「でも三人とも大した怪我じゃなくてよかったよ」

シャルルが安堵の息をつく。前述した通り大けがは全くしておらず、精々打撲や痣程度で済んでいた。

「別に助けてくれなくても良かったのに……」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「バカ。そうしたらもつと大けがだったかもしれないだろうが」

「そ、そんな事無いわよ！」

「そうですね！」

「じゃあ何であんなにボコられてたんだ？ しかもボーデヴィツヒは無傷だったじゃないか」

「……」

「それに、一夏を殺されかけてたんだ。お前らがあの後勝てたかどうかよりも、そっちの方が重要だろ」

「そ、それを言われると……」

「何も言えませんか……」

気まずそうに一夏をちらりと見ながら縮こまる二人。鈴音の隣で寝ている一夏は、安らかに眠っている。大怪我したとかではなく、一瞬感じた死の恐怖から解放された安心感から思わず眠ってしまったようだ。

今更ながらに、もし間に合っていなかったら　と考えると、少し身震いがした。

「はぁ……もう、小学校の時からアンタには守られてばかりだわ。」

たまにはギャフンと言わせてやりたいのに……」

「わたくしはそこまでしてもらった事はございませんが……その意見には同意ですわ」

「はっはっは、そんな日が来るのを楽しみにしてるぜ」

（（どうしよう……全然来ない気がする……））

すると、恭介は少し残念そうな顔をした。

「しかし……ISのダメージレベルがCを超えてたし、一夏含めお前らトーナメント参加は出来ないな」

「「え」「」」

汗をダラダラとかく二人。どうやらISのダメージレベルの事をすっかり忘れ去っていたようだ。

ISは戦闘経験を含む全ての経験を蓄積する事で、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼働も含まれ、ISのダメージレベルがCを超えた状態で稼働させると、その不完全な状態での特殊なエネルギーバイパスを構築してしまう。それらは逆に平常時での稼働に悪影響を及ぼす事があるのだ。

恭介は、やれやれ、と苦笑を浮かべる。

「まあ、今回は残念だが、まだ来年があるんだ。一年待ってる、案外早く来るぞ。一年なんてのはな」

二人は肩を落としながら静かに頷く。

すると、突如ドドドドドドドド……！ と、地鳴りのような音が響き始めた。

「な、何？」

シャルルが保健室のドアに目を向けた瞬間。

ドンガラガツシャーン！！ と、保健室のドアが吹き飛び、室内の机やらガラスやらにぶち当たる。シャルルは恭介に抱き寄せられたため、避ける事が出来た。

「あ……きよ、恭介、ありが」

『棗君（デュノア君）！』

「どうしたんだ？ そんなに慌てて」

すると、雪崩れ込んで来た女生徒たちは、一斉に何かを出して来た。

そこには……。

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとす。締め切りは

』」

「ああそこまででいいから！ とにかくっ！！」

『私と組もう！ 棗君（デュノア君）っ！！』

なるほど……と、恭介は思った。

おそらく前回のゴーレム？の件のせいだろう、と恭介は結論づける。あれだけの事があれば警戒して当然。あの時はたまたまどちらも専用機持ちだったが、今回もそうとは限らない。第一参加人数が圧倒的に違う。

ならば一試合ごとの人数を増やそう　そういうことなのだろう。どうせ千冬か楯無辺りがやったのだろうが、まさかここまで盛り上がるとは。

が、恭介としては困んでいる女生徒の誰とも組む気はない。

「みんな悪い。俺はシャルルと組む事になっているんだ」

「ふえ！？ あ、えつと、うん！　そ、そうなんだ！」

しいん……と、いきなり全員沈黙する。

「まあ……そういうことなら」

「他の女子と組まれるよりは良いし……」

「男同士つてのも絵になるし……」

と、各々何やら呟きつつ保健室を後にしていく。

「くうっ……ダメージレベルさえ……ダメージレベルさえこを超えてなければあっ……！」

「何故あのときボーデヴィツヒさんのケンカを買ってしまったの！？　あのときそんな事さえしなければ……！」

何やら横で悔しがっているが、恭介はあえて無視する。

「じゃあ、俺達はそろそろ部屋に戻るぜ。安静にして明日の俺達の応援に備えてくれ」

「はあ……分かったわよ。ただし、負けたら承知しないからね！」  
「分かってるさ。じゃあな」

恭介とシャルルは揃って保健室を後にした。

「……なんか、最近アイツら仲いいわね。ムカつくけど恋人みたい  
に。元々知り合いだったみたいだけど……」

「はっ……まさか恭介さんがそつちの趣味に!？」

「そ、そんなことあるわけ いや、待ってよ……そういえば理樹  
との関係もどうたらこうたら言われてたし……ま、まさか……」

……一瞬、想像した。

「「いやあああああああああああ……」  
「……」

恭介とシャルル、二人は部屋に入ると、二人してそれぞれのベッ  
ドに腰掛ける。

「恭介」

「ん？ どうした」

「ありがとね。僕と組んでくれて」

「なに、別にそんな事で礼を言う必要は無いさ。他の女子と組んで  
バレたりしたらヤバいからな」

「それでもだよ。ありがとう」

にこり、とシャルロットは可憐に笑う。

それに対して恭介は、ああ、と一言返すだけ。

「そういえば、今回のトーナメントではケルディム・サバーニヤを  
使うのか？」

「うん。カタギリさんも、戦闘データとかが欲しい、って言ってた

から丁度いいしね」

「なんていうか……シャルに乱れ撃たれたら俺の出番が無くなるな」  
「あはは……まあでも、全ビット展開で行く気はないよ。精々ライフルビット?と?のスナイプモードで行くくらいかな」

「それでも十分強いさ。ガンダムはな」

ガンダムはただのISではなく、ソレスタル・ビーイングの技術を総結集して造り出した最強格のISだ。ウイングゼロを始め、数体いるガンダムはそれほど搭乗者が強くなるとも、常人の乗るIS程度なら性能でカバーしてくれるため、圧勝出来る、と言えるほどの性能をガンダムたちは持っている。

そもそもコアからして違うのだが……その辺りの話はまた今度とする。

「さて……そろそろ寝よっか」

「ああ」

言って二人は布団の中に潜り込む。夕飯もシャワーも歯磨きも、とつくに済んでいる。

しばらくして、二人の意識は深い眠りへと落ちていく。

もうすぐ……トーナメントである。

\* \* \*

六月の最終週。すなわち学年別トーナメントの開催である。学園内は活気に溢れ、ドキドキ、わくわく、と言った感じだ。

そんな中恭介とシャルルは男子更衣室にいた。二人は室内にあるモニターを見つめ、トーナメント表の発表を心待ちにしているのだ。

まあ、ラウラがその辺の誰かに負けるとはそうそう思えない。確実に上り詰め、自分たちと当たるであろう事は、二人とも理解していた。が、さほど緊張している訳でもない。それは自分たちの駆る機体が優秀であり信頼出来る事もあるし、背中を預けられるパート



ナーのおかげでもあった。

「しかし、かなり来ているな。三年のスカウトに二年の成長確認、そして一年の気になる奴のチェック、か。ご苦労な事だな」

「でも他人事じゃないんじゃない？ 恭介とかは唯一の男子IS操縦者だし結構強いし。確実にマークされると思うけど」

「別に気にする事じゃないさ。勝手にマークしておけば良い。何やっただって、俺は引き込めないんだからな」

「はは、そうだったね」

恭介は知っている者こそ少ないが、ソレスタル・ビーイングの創設者であり『闇の執行部』の部長だ。故に恭介を引き込もうとする国へは妨害が入るし、強硬手段にでも出ようものなら『執行』されること間違い無しである。まあ、各国はそんな事には気付いていないかもしれないが。

「でも、ガンダム力を見せる良い機会だ。存分に見せつけてやるうぜ」

「良いのかなあ……一応ガンダムってソレスタル・ビーイングの機密事項なんですよ？」

「力を示すくらいは大丈夫さ。どれだけ調べたって、ゼロとケルディム・サバーニヤのデータは出てこないし取れもしない」

そもそも調べたとしても、詳細データはこのデータバンクにも載っていない。ただその存在を示しているだけだ。

「おっと、そろそろ発表されるな」

と、恭介が言うと、モニターにトーナメント表が現れる。

アVS  
一年Aブロック一回戦、棗恭介、シャルロット・デュノアペ

ラウラ・ボーデヴィツヒ、朱鷺戸沙耶ペア……と。

「……は？」

「……何故いる朱鷺戸」

「悪いわねー、今日だけ私はここの生徒でこの子のペアよ？」

ラウラのペアとなっていた少女、朱鷺戸沙耶しよきとさやは、何の悪びれも無くそう言った。

おそらく『闇の執行部』の能力を使って一時的に生徒として登録し、意図的にラウラとペアになれるよう仕向けたのだろう。観客たちは、あんな専用機持ちいた？ などとひそひそ言いあっている。

すると、シャルルに個人秘匿通信プライベートチャネルが開かれた。

『ま、実際は君の実力テスト、ってところなのよねー。シャルロットちゃん』

「！……なるほど。背中を預けられるほどなのかそうでないか、ってことだね」

『そう言う事よ。まあその他にも、『ストライクノワールG 戦闘用IS』の実戦テストと  
かもあるんだけどね』

そう言って沙耶は個人秘匿通信を切った。

「ふん。貴様からか」

「俺から、というのは間違いだな。このトーナメントに一夏は参加してない」

「何っ!？」

「お前がボコボコにしたんだろう？ 参加不可能なダメージレベルCを越えさせてよ」

「くっ……まあ良い。貴様も排除対象だ。私の邪魔をする者は全て排除させてもらう」

「出来るならやってみろ。俺を倒すのは相当キツイぜ？」

「ふん！ 言われなくても……」

ケンカの売りあい買いあいをする恭介とラウラ。

瞬間、開始の合図がなった。

「叩きのめす」

「やってみる」

\* \* \*

ガキイン！！ と、ケルディム・サバーニヤの『GNライフルビツト・トンファーマード』と、ストライクノワールGの『ビームライフルシヨーティー』がぶつかりあう。二人は開始早々に銃による接近戦を繰り広げ始めたのだ。

相手の銃を弾き撃ち、叩き付けて弾き撃ち返し、近距離で頭に向けて、胴体に向けて、となんともレベルの高い銃の近距離戦に、観客たちが息をのむ。

そうした近距離戦の中、沙耶が突然距離を取り、『二連装リニアガン』を撃ち放つ。黄色く光る弾丸がシャルルに迫るが、難なく避け、トンファーマードによる桃色の弾丸をマシンガンか、と思うほどの速度で連射する。

幾数にも迫るビームを避けながら沙耶は『ビームライフルシヨーティー』を量子化させ、ストライクノワールの専用追加装備『ノワールストライカーG』のウイング外側にマウントされた、ビームエッジ内蔵型大型対艦刀、『フラガラツハ3ビームブレイド』を手に取り、シャルルに急接近する。

バチバチバチ！ と火花を散らす『GNライフルビツト？・トンファーマード』と、『フラガラツハ3ビームブレイド』。粒子強化されているトンファーマードの刃は、溶け斬らせる事を許さない。

しかし右のフラガラツハの力を抜き下げたかと思うと、今度はハイキックをしてきた。瞬間、膝から足首辺りにビームブレイドが発生する。

「！」

シャルルはそれを避けずに受け止め、吹っ飛ばされる形で避ける。それを追従するように『二連装リニアガン』を放つ。

それらをシャルルは巧みに避け、トンファーモードと展開した『GNライフルビット?』を沙耶に向けて放つ。当然、彼女は避けてみせる。

「へえ、結構やるじゃない。多少手加減はしてるけど、ここまでやつてくれるとはねえ」

「伊達に恭介に鍛えてもらってないからね。まだメンバーのみんなには全然届かないけど……これくらい出来ないで戦場にいられるつもりはないよ。まあ、まだまだ足りないんだろうけど」

「自覚してるなら良いわ。じゃあ……まだまだ行くわよ！ 手加減したあたしくらい倒して見せなさい！ シャルル・デュノア！ コードネーム、ロックオン・ストラトスうっ!!」

「行くよっ!! 八口！ 全ビット展開!!」

【【「リヨウカイ、リヨウカイ!」】】  
様々な部位にセットされたビットたちが解放され、展開される。その数まさに五四機。ブルー・ティアーズなどものの数ではない。観客たちはそのあまりのビット数に戦慄している。

「あら、全展開するの?」

「沙耶さんと戦うんだったら、出し惜しみしてられないからね。僕が持てる全力で行かせてもらうよ」

「そう……だつたら来なさいっ!!」

再び二人の戦いが始まる。

シャルルは八口に制御されたビットたちの恩恵を受けながらスナイプモードにした『GNライフルビット?』を撃ち、圧倒的な弾幕の元、沙耶を近づけさせないようにする。

一方沙耶はそれらをほとんど避け、たまに擦らせながら避ける。いつの間にもやらフラガラツハはしまわれ、フラガラツハのグリップ部に搭載された『ビームサーベル』に武装が変わっている。

ストライクワールGは、元々ブルデュエルとヴェルデバスター

という試作機との集団戦を目的として作成された、ストライクノワールの改造機である。簡単に言えば、集団戦目的から変更し、単体戦目的として再開発したのだ。機動性も速度も火力も、ストライクノワールを大きく上回る。

故に避けられる。ただのストライクノワールでは全く避けきれそうにない前方一八〇度から振ってくるビームの雨を、沙耶は左右に上下にと避け続ける。そのまま『二連装リニアガン』を放つが、シールドビットが作る三枚組シールド二枚によって防がれた。

「ちっ……本当に、厄介な、数の、暴力ねっ!!」

「多数相手なら乱れ撃つて殲滅し、単体相手なら数で翻弄する……それがケルデイル・サバーニヤの本領!」

「でも、ね! 当たらなければ! どうという事はないのよ!!」  
「ならもつと数を増やすまで!!」

シャルロットのケルデイル・サバーニヤのほぼ全身に装備されている緑色の箱。それらはビットではない。

「ハロ! 全部撃つたら常にオールロードだからね!」

【【リヨウカイ、リヨウカイ!】】

「行っけえっ!!」

ケルデイル・サバーニヤの全身から大量のGNミサイルが発射された。ビットたちはミサイルの軌道にあわせて勢いを緩めず、ミサイルに当てずに絶えずビームを放ち続ける。

「ちっ……これはさすがに無理ね。GNミサイルじゃフェイズシフトでもダメージ受けちゃうし……。仕方ない。トランザム!」

瞬間、ストライクノワールGの全身が赤く光り出す。機体内部に蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放させ、ストライクノワールGのスペックを三倍以上に引き上げる。装甲内に流れるGN粒子の赤色化と、量の増大によりストライクノワールGが移動するたびに残像を放つ。

沙耶は通常の三倍の速度でビームの雨の中を一気に脱出し、猛スピードでケルデイル・サバーニヤの真下に潜り込み『二連装リニア



それを後退しながら上昇し避けつつ、こちらも撃ち返す。相手の射撃をホルスタービットとシールドビットが防ぎながら、時折ホルスタービットを円形に並べ、高出力のビームを放つ。

沙耶は高速で動きながら『フラガラツハ3ビームエッジ』を抜き放ち、片方地面に投げ捨て突き刺す。

ガキン！ と思いきりトンファーモードとフラガラツハが激突する。しかし沙耶はここでは止まらず、そのままシャルロットを弾き飛ばし、ノワールストライカーの中央部に設置された小型有線アンカー、『アンカーランチャー』を放ちケルデム・サバーニヤの右足に巻き付け、

「しまっ……！」

「そおりやあああああああー……！……！……！……！……！……！……！……！」

思いきり振り回す。そしてその状態で急降下を始め、地面に着地と共にスキーの様に足を滑らせシャルロットを投げ飛ばす。グンッ！ と、投げ飛ばされたシャルロットは抵抗出来ずに真横に軽く回転しながら後方へと飛ばされる。その際にワイヤーは解除された。

警告、後方に危険物あり。

「え　　ッ!？」

バチバチバチバチっ！ と、地面に突き刺さったフラガラツハの光刃がシャルロットをくの字に曲げ斬り裂かんとした。

「うわあああああああああああああああああああ!？」

しかし絶対防御は破れずにそのまま倒れ、ケルデム・サバーニヤはそこから数メートル先で転がり、土煙を上げる。

「あらら、ちよつとやり過ぎちゃったかしら」

沙耶は巻き上がる土煙に近づき、そんな事を言った。

「んー、まあ及第点って所かしら。まだまだただけどね」  
すると、

警告、敵ISからロックオンされています。

などとのたまわった。

「は？」

「GNライフルビット？・スナイプモード……ハイパーブラスト！

！」

瞬間、沙耶の視界は桃色に染まった。同時、トランザムの限界時間  
間に到達する。

ストライクノワールG。

シールドエネルギー、〇。

土煙の晴れた先にいたのは、ギリギリシールドエネルギーが残った、ケルデイルム・サバーニヤだった。

\* \* \*

ラウラは焦っていた。

さつきから何度も何度も攻撃しているが、相手である棗恭介の駆  
るウイングガンダムゼロ・パーフェクトカスタムに傷一つつける事  
が出来ない。

アクトネオモサマラ

「A I C」、ラウラ自身には慣性停止結界と呼称される、相手一  
体を任意に停止させる事が出来る。これは、ISに搭載されている  
バシネサキマラ  
「P I C」を発展させたものだ。

それで何度も恭介の動きは止めている。が、その度に展開された  
「ウイング・ファンネル」に攻撃される。かといって接近戦を挑ん  
でも全てさばかれてしまう。

軍人としての訓練を受けているラウラにとって、このIS学園に  
いる生徒たちは皆意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッション



かなにかと勘違いしている程度の低い者しかいない　そう思っていた。  
だが。

（この男……教官並だと……！　そんなこと……そんな事がっ！！）  
「ありえる訳が無いッツ！！」

『ワイヤーブレード』を弾き、『大口径レールガン』を全て避け、ラウラの攻撃は全てさばき避け、一瞬もスピードを緩めずにラウラへ急接近する。

すると、恭介が『ビームサーベル』を投げ捨てた。

「な……っ！？」

（なんだ！？　どういっつもりだ！）

しかし恭介は止まらない。ラウラは「何のつもりか分からないが、バカめ！」と叫びながら『プラズマ手刀』を恭介に対し振り下ろす。

瞬間、腹に突然衝撃を感じた。

「んなっ！？」

「バーカ。俺が何も考えずに『ビームサーベル』を捨てる訳が無いだろう」

突き出したウイングゼロの手から伸びるのは『ツインバスターライフル』。恭介はその銃身を展開しながら黒い雨の腹にぶつけたのだ。

既にチャージは完了し、銃口の中からは光が漏れていた。

「ッ！？」

「終わりだ」

恭介がトリガーを引く。

ラウラの全身を、光り輝く閃光が包み込んだ。

\* \* \*

(負ける……私が負ける……!? こんな奴に!?)

視界全てが光に包まれ、視界の端でシールドエネルギーを示した数字が急激に〇へと近づいていく中、ラウラは負けたくない、という感情を爆発させていた。

(力が……力が欲しい……! こんな男に負けないほどの力がッ!)

すると、突如頭の中に声が響いた。

『願うか? 汝、より強い力を欲するか?』

ラウラは躊躇わずに頷く。

(よこせ……! 力を! 比類無き最強を!!)

瞬間、眼帯に隠された金色の瞳に、謎の文字が浮かび上がる。

D  
Damage

精神状態……昂揚  
Mind Condition

最終認証……確認  
Certification Clear

Valkyrie Trace System……Boot

黒い雨は、青白い電撃に包まれた。

## ストライクノワールG (前書き)

武器多っ。11話じゃ全然使ってないの結構あるけど……。

## ストライクノワールG

『ストライクノワールG』

### 武装

- ・ビームライフルショーティー×2
- ・ビームサーベル×2
- ・フラガラツハ3ビームエッジ×2
- ・二連装リニアガン×2
- ・アンカーランチャー×1
- ・グリフォンビームブレイド×2
- ・GNシールドクロー×1
- ・シャイニングエッジビームブーメラン×2
- ・ノワールストライカーGブレイフィスラケルタ×1

### 特殊機能

- ・ストライカーパツクシステム  
ヴァリアブルモード
- ・VPS装甲

### 特殊技能

- ・TRANS-AMシステム

### 特殊導力

- ・GNドライブ（オリジナル）

ワンオフアビリティ  
単一能力

- ・なし

## 詳細

ストライクEに特殊専用追加装備『ストライカーノワールストライカーG』を装備した機体。

ノワールストライカーGは、ウイング内部に『二連装リニアガン』、ウイング外側に内蔵型大型対艦刀『フラガラツハ3ビームブレード』、ビームブレードのグリップ部に搭載された『ビームサーベル』、ストライカー中央部に設置された小型有線アンカー『アンカーラUNCHャー』、中央部の上部に設置された『シャイニングエッジビームブーメラン』。

さらに、ノワールストライカーGを分離させ、IS支援空中機動ファトゥム飛翔体モードに変形時に、両翼フラガラツハを展開してすれ違い様に斬撃したり、『二連装リニアガン』を一八〇度折り畳み使用可能となる『プレフィスラケルタ』で突撃させ、ビームスパイクとして使用する事も出来る。

ストライクノワールG自体には、左右の膝から爪先間に設置された『グリフォンビームブレード』を始め、『ビームライフルショーティー』や『GNシールドクロー』を装備している。

リミッター時は全身装甲フルスキムではなく、普通のISと同じ状態。その場合ノワールストライカーGは非固定浮遊部位アンロックユニットとなっている。

ストライクノワールGはツインドライブではなくGNドライブ機。しかしそれでも元々集団戦にあわせて作成されたストライクノワールを十二分に単体で戦えるようにされている。使い手次第ではツインドライブ使用機でも互角に戦えるようにされている。

装甲は、一定の電圧の電流を流す事で相転移する特殊な金属で出来た『フェニスト P S 装甲』の改良版である、『ウァリアンズ V P S 装甲』を使用している。

『V P S 装甲』は、『P S 装甲』とは違い、装甲に流す電流の量を変化させる事が可能。これによって装備や状況ごとに装甲へのエネルギー配分を調整、最適化する事で電力消費のロスを抑える事が出来る。が、導力であるG Nドライブは半永久動力機関。つまりバッテリー切れは存在しないため、常時展開可能。

## 第12話「暴れる雨と暴走の天使」

『何故教官はそこまで強いのですか？ どうしたら強くなれますか？』

かつて、尊敬する教官にそう問うた事があった。

識別状の名前であるラウラ・ボーデヴィツヒ。元々の名前 いや、記号は遺伝子強化試験体C-アドヴァンスト三七。人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた……いわゆる試験管ベビーという奴だ。生まれた瞬間から彼女は闇の中にいた。

兵器として生み出され、育てられたラウラは優秀であった。いかに人体を攻撃すれば効果的か、どうすれば敵軍に打撃を与えられるか、という知識を覚えさせられ、徹底的に『兵器』として鍛えられて来た。

しかし……予期せぬ事態が起きた。

IS……インフィニット・ストラトスの出現だ。

ラウラたちはISの適合向上の為に、脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上と、超高速戦闘状況下に置ける動体反射の強化を目的とした、肉体へのナノマシン移植を施した。そうして処置された目を、疑似ハイパーセンサーとも呼べる『ヴォーダーオージェ越界の瞳』と言う。

危険性は全くない そのはずだった。

だがラウラは『越界の瞳』に適合せず、左目は金色へと変色し、常時稼働状態となってしまうた。

おかげで部隊のトップから転落し、隊員達からは出来損ないの烙印を押された。

しかしそんな彼女にも、女神は慈悲をくれた。

織斑千冬。ラウラが誰よりも尊敬する人物であり、教官。

彼女は出来損ないなどとは一言も言わず、侮蔑の視線も向けず、普通に話しかけてくれた。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに、心配するな。一月

もあれば最強の地位に戻るだろう。なにせ、私が教えるのだから」

嘘など一辺も混じっていなかった。

彼女の教えを忠実に実行し、訓練し、ただただ彼女についていく。それだけだった。だというのに、彼女の言う通りたった一ヶ月で、部隊最強にまで再び上り詰めた。

が、己が教官は『最強』である自分より尚『最強』だった。

だから問うたのだ。『何故』、と。

その時に見た初めての優しい笑みを、今でも忘れられない。

「私には妹がいる」

「妹……ですか？」

「ああ。そいつの一個上のガキが作ったお友達グループがあつてな。まあ肝心のそいつは親の事情でどっかに行ってしまったが、そんな事は問題じゃない」

千冬は空を見上げ、何か懐かしむように続けた。

「アイツがいなくとも、そのグループは壊れなかった。常に、どんな時も一緒だったさ。そしてアイツを待っていた。私も人望はあるほうだと自負しているが、アイツほどではないだろうな。おそらく、私はいつまでたつてもアイツの強さにはたどり着けなさそうだ」

「教官が……!？」

「ああ。まあ、お前の言っている強さと、私が言っている強さは残念ながら別物のようだが」

「……よく分かりません」

「今はそれで良い。だが、機会があれば日本に来ると良いぞ。しかし、もしその時にアイツがいたならば……一つ忠告しておこう。アイツは」

再び笑う。優しく、恥ずかしそうに。

(違う……それは違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに……)

故に彼女には許されなかった。千冬にそんな表情をさせる存在が。



そんな千冬にしてしまった妹と男が。

だから ！

(力を……比類無き最強を……！)

Damaged Level

損傷状況……… D

Mind Condition Drop Lift

精神状態……… 昂揚

Certification Clear

最終認証……… 確認

Valkyrie Trace System……… Boot

\* \* \*

「あああああああつっつっつ！！！」

ラウラが突如として苦しげな叫びをあげた。

すると、彼女の纏う黒い雨に異変が起きた。ぐにやり、と装甲が溶けて個体と液体の中間のようなスライム状の物に変わり、ラウラを包み込んでいく。まるでシュヴァルツェア・レーゲンがラウラを取り込もうとしているかの様に。

「……シャル、そこでくたばってる朱鷺戸を安全な場所へ。起きてリミッターを外すまではストライクノワールGも使えないだろうしな。お前は外しておけ。半分だけな」

「うん、分かった」

ガンダムには二重のリミッターがかかっている。一つは出力のリミッター。もう一つは IS 戦においての殺傷モード封印、だ。つまり、半分だけ、というのは片方外すという事。どんな攻撃をしようとも、絶対防御だけは貫通させずに搭乗者は無事に済ませる……

…という事だ。

ケルデイルム・サバーニヤの第一リミッターが外れる。GNドライブが完全稼働し、シールドエネルギーが意味をなさなくなるため、表示が消える。同じく第一リミッターを解除した恭介からも表示が消え、GNドライブとゼロシステムが完全稼働する。

恭介の視界の中で、シユヴァルツェア・レーゲンは、青白い電撃を放ちながら未だに変質を続けている。

そして……その変質が終わりを遂げようとしていた。

「さーて、何が出る？ 蛇か鬼か、はたまた龍でも出てくるか？」  
瞬間、頭が一気に冷えた。

そこにあり、それが持っている物は 『雪片』 だった。

「なるほど……まさかとは思っていたが、VTシステムとは……。どうやら出て来たのは蛇どころかゴミ以下なクソつたれだったらしい」

VTシステム。正式名称ヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンド・グロツソ（二一の国と地域が参加して行われるIS同士での対戦の世界大会）の部門受賞者の動きをトレースするシステムだ。しかし、このシステムはアラスカ条約で現在どの国家・組織・企業においても研究、開発、使用全てが禁止されている。

しかし、実際にはこうして目の前に存在している。今まで見て来たラウラの事を考えると、このシステムを良しとしそうにはない。ということはおそらく誰かが無断で搭載したと考えるのが妥当だろう。それも特殊な条件下、それこそ精神状態や機体の蓄積ダメージなどの条件で発動する、などの事をしてだ。

そして登録されていたのは、総合優勝者、『ブリュンヒルデ』の称号を持つ織斑千冬と愛剣『雪片』。零落白夜が使えるかどうかは分からないが、千冬の動きをトレースして来るはず。千冬の劣化版だと言えるだろうが、その辺の操縦者にとっては脅威だ。

恭介の心は怒りに燃えていた。が、それでも冷静さを欠かないのはさすがと言うべきか。

すると、千冬から連絡が入る。



「終わりだ！」

左手に『ツインバスターライフル』を展開し、地面へと蹴り落としたVTシステムへ銃口を向ける。

「破壊するっ！！」

瞬間、閃光が走った。

『ツインバスターライフル』から発せられたビームの奔流がVTシステムを飲みこむ。アリーナの地面はえぐれ、爆発が起き黒煙が舞い上がった。恭介はその中に飛び込み、VTシステムの元へと向かう。視界が真っ黒に染まる。恭介は視界を暗視モード

「……………いた」

爆発の中心。そこにラウラはいた。もっと近くに寄り、暗視モードのレベルを上げる。VTシステムが鮮明に見える。機体は動こうとしているらしく、ガガガ、と音を立てながら腕が若干動いている。恭介は『ビームサーベル』を胸元に突き刺した。ガガ、ガ、とVTシステムは沈黙する。

すると、VTシステムがドロドロと溶け出し、ラウラを吐き出した。

彼女を抱え、黒煙の中から飛び出す。

ラウラは弱々しい表情をしていた。

「……………つたく、そんな顔されてちゃ怒鳴りたくても怒鳴れないぜ……………」

\* \* \*

恭介はアリーナの地面にラウラを寝かせると、黒煙の方に視線を向けた。

(……………ゼロがまだ警戒してる。再び動く未来を見せてくる……………。油断は出来ない、ってことか)

『恭介！』

と、ピットから下に降りて来た一夏達と千冬達が恭介の元に走っ

てくる。シャルルは恭介の隣に着地し、ケルディム・サバーニヤの胴体と頭部アーマーだけ解除する。

「……山田君。ラウラを保健室へ」

「は、はい！」

言って真耶はラウラを抱え、保健室へと走っていった。一夏達はとりあえず、転ばないと良いけど……と心配する。

すると、千冬が、

「……棗。ゼロが何か言っているか？」

「まだ警戒しています。再起動する未来を見せてくる」

「み、未来？ 何を言ってますの？」

「ああ、お前らは知らなかったな」

恭介が千冬の方を向きアイコンタクトをする。ため息をつきながら千冬は話し始める。

「ウイングゼロにはゼロシステムというのがあった」

「ゼロシステム……？」

「流れを説明すると面倒だから簡単に言うが、こいつは未来を見せるシステムだ」

『ええええええええええ！？』

「み、未来って……じゃあ、私達がどう動くか分かる、って事ですか！？」

と、筈が目を見開いて詰め寄る。

「普段はリミッターがかかっている未来は見せない。特に授業中や模擬戦はな」

「そりゃあ、そんなんじや絶対勝てっこないし……」

「あくまで想定される全ての未来を見せてくるだけだ。それに、周りの状況や事情、ありとあらゆる情報を取り込み、ゼロが考えうる全ての未来を搭乗者に見せる……確かに一見反則的なシステムだが欠点もあってな」

「欠点？」

「ああ。それは」



「恭介！ 今度は超高エネルギー反応！ 大きいのが来る！！」  
言うと同時に、黒煙の中から緑色に輝くエネルギーの奔流が飛び出して来た。

恭介は大型ウイング全て全面に出し、エフィールド全開でそれを受け止めた。が、偏向させる事が出来ず、ただエネルギーが拡散させるだけだった。

それらは当然背後に向かう。

「しまったッ！！？」

爆発と爆風が機体を襲う。

機体が吹き飛ばされるような事は……ない。

爆発と爆風が止むと同時に、一夏たちの方を見た。

誰もいなかった。

ビットは健在。だがそれすらもぐり抜けた物があつたらしい。さっきまで千冬達がいたところにはただの焼け跡しか無かった。

「……あ……」

声が出ない。のどの奥がチリチリと熱い。心の底から冷気が吹き出しているかの様に体が冷める。

瞬間。

恭介の意識は何かに取り込まれた。

\* \* \*

一夏達と千冬は、恭介のいる所から離れていた。

「ふうー……間一髪ねー」

「沙耶、助かったよ」

「良いのよ、当然でしょ」

あの瞬間、シャルロットはトランザムを発動し、最大出力で一夏達の元へと飛んだ。一夏の右腕と千冬、一夏、セシリアを抱えて飛

び立つ。が、残りの鈴音と箒だけは抱えられなかった。

そこにジャストなタイミングで沙耶が現れて救出された、ということだ。

「リミッター解除で何とかトランザムも使えたしね、良かったわ。それより……」

沙耶の視線の先には血の海に沈んだ一夏がいる。

「……早く病院に連れて行かないとヤバいわね……。仕方ない、背リ中のネコ園トルバスターズ?に連れて行くわ」

沙耶は一夏の周りにいるセシリア達を押し退けて一夏を抱え上げ、右腕を持つ。

「良いですよね？」

「……ああ……。頼む……」

「じゃ、急いで行ってきます。それと、大分ヤバくなってるといよ、あつちは」

「ヤバい……?! まさか!!」

沙耶以外の全員が恭介のいる方に視線を移す。その際に沙耶は転移。

ウイングゼロは硬直していた。が、唯一違う点がある。

両腕と胸にある緑色のセンサー、そしてツインアイ、それらが真っ赤に染まっていた。

「アイツ……呑まれたか……!! チイッ……!!」

『おおおおおおおおおおおッッッッ!!』

恭介がウイングゼロの中で叫ぶ。その声は大分離れたここまでも届いた。

「ど、どうしたんだ!?!」

「……ゼロに呑まれた」

「はあ!?!」

「ゼロシステムに呑まれたのだ。アイツは……」

訳が分からなくなっている筈に、千冬が続ける。

「ゼロシステムは未来を見せると言ったな」



「は、はい……」

「だが見せる未来は全てが良いものではない。事情、感情、搭乗者の全てを無視して自分が撃墜される未来を見せてくるのだ」

『！？』

「ゼロシステムは搭乗者の脳波に直接干渉し、予測される全ての未来を見せ、『完全な勝利』を目指す物だ」

「か、完全な勝利……」

「そうだ。だが、この『完全な勝利』には搭乗者の生死など勘定に入っていない」

「そ、そんな……なんでそんな物をアイツが使ってるのよ……」

「……アイツにとってはそれが必要だったのだろう」

「必要って……！」

「その辺の事情などアイツに聞け。私が語る事ではない」

千冬は鈴音を睨みつけて黙らせる。

そして続ける。

「ゼロシステムは弾が直撃して爆死……などという最悪の状況すら見せる。故に強靱な精神力を必要とする……でなければ精神が崩壊させられるのだ。まあ、精神崩壊は最終的な結末でしかないがな」

だが、と千冬は付け加える。

「奴はゼロシステムを克服する為に精神修行をしたり、システムを使った訓練をしたりと完全に克服した」

「じゃあ……なんで」

「その強靱な精神力が崩れ去った……そう考えるほかあるまい」

「なんでそんな事……あ……！」

「そう……私達だ」

千冬達が死んだ……爆発の中突然消え去った千冬達を見て、恭介がそう思っても仕方が無いのかもしれない。それ故に一瞬の間を見せた。その隙をゼロシステムが見逃すはずも無い。

「……止めなければならぬ。全く……まさかこいつを使うはめになるとは思いも寄らなかつたが……」

言いながら内ポケットから一つの懐中時計を取り出す。蓋には二振りの刀が描かれている。

「それは……IS?」

「そうだ。……来い、スサノオ……!!」

瞬間、懐中時計が光り、IS『スサノオ・零式』が展開される。

フルスキンの全身装甲であるスサノオ・零式は、一言で言うならまさに侍、と言った風だった。兜のような頭部アーマーに鎧のような胴体、腕部脚部装甲。黒と白の機体はまさに千冬のためだけの物……そんな印象すら受ける。

「……『シラヌイ』、『ウンリユウ』、私に力を……」

両手に展開した強化サーベルにそう呟く。

そして、

「行くぞ！ デュノア、ついてこい!!」

「はいっ!!」

第二ラウンドは幕を開ける。

ウイングゼロは『ツインバスターライフル』を黒煙の中に向けて放った。エネルギーの奔流が黒煙を突き破り振り払う。

その中にいたのは、さっきまでのVTシステムではなかった。

右肩に長い砲身を乗せ、左肩に巨大な剣持った灰色の装甲をした全身装甲の機体だった。一番特徴的なのは頭部アーマー。ウイングゼロと同じガンダムヘッドをしている。

「敵ISをガンダムタイプと断定。ゼロとの戦闘下でシステム内にデータを構築し独自のタイプに仕上げたと仮定する」

恭介は機械の様にそう言った。

すると、VTシステムが動く。

右肩の砲身をこちらに向け、緑色の高出力ビームを放つ。ゼロはそれを大型ウイングで無理矢理軌道を曲げた。ビームはそのままアリーナのシールドに直撃し、弾ける。

「……戦闘レベル、ターゲット確認。排除……開始」

ゼロは左手に『ツインバスターライフル』、右手に『ビームサーベル』を持ってVTシステムに突撃する。VTシステムは右手についているビームライフルを撃ってくるか、全て大型ウイングで防ぎ、一瞬もスピードを緩めない。

『ビームサーベル』と、左肩についていた剣がぶつかりあう。

が、ゼロは弾き飛ばすと言った事をせずにそのままVTシステムを蹴り上げた。そしてそれを追い、『ツインバスターライフル』を腹に突き刺す。

閃光がVTシステムを飲み込む。

閃光が消えた所には、未だ健在のVTシステムが。

それを見たゼロは『ウイング・ファンネル』を展開、オールレンジ攻撃を開始する。ダメージはかなりたまっているらしく、動きが鈍い。避けきれずにほとんど全弾命中する。そこへ更に『ビームサーベル』を叩き込み、もう一発閃光を放った。直撃し、VTシステムが叩き付けられた地面から煙が上がる。

煙を突き破って高出力ビームが放たれた。

紙一重でゼロはそれを避け、『ウイング・ファンネル』を撃ちながら接近する。

VTシステムは、右手のビームライフルと右肩の大型ビーム砲、更に腰からビット兵器らしき尖ったものが飛び出した。それらはビームを吐きながら接近してくる。

「ビット兵器確認……」

それすらも避け接近するゼロ。そして、思いきり『ビームサーベル』を胸に突き刺した。

ガガガ……と動きを完全に止め、倒れた。ドロドロと再び溶け、ポロポロのシユヴァルツエア・レーゲンに戻った。

「排除完了……」

ゼロは辺りを見回し、叫んだ。

「俺の……俺の敵はどこだあああああああああああああ……！」

「ここだ、馬鹿者」

突如、背後が爆発した。

「全く……妙な所で世話をかけさせる。まあ、今回は私の落度のよ  
うな物だが……」

そこにいたのは『侍』。

黒と白の『侍』だった。

「さあ。とつとつと目を覚ましてやろう。来い。今のお前なら私でも  
勝てる」

第12話「暴れる雨と暴走の天使」（後書き）

結構展開早かったりぐだつてたりしたかな……？

あ、ちなみに出番と活躍が全くなかったけどラウラのいなくなつたVTシステムは、スローネのアインとツヴァイを混ぜたような奴……ってイメージです。なんとなく分かった人いたかな？

スサノオ・零式(前書き)

ツインドライブ多いなー。まあまだ増えるけど。

## スサノオ・零式

『スサノオ・零式』

搭乗者

織斑千冬

武装

- ・強化サーベル『シラヌイ』・『ウンリュウ』
- ・GNクロー
- ・ビームチャクラム
- ・トライパニッシャー
- ・ガントレット

特殊機能

- ・零落システム
- ・GNフィールド
- ・ツインドライブシステム

特殊技能

- ・TRANS-AMシステム

特殊導力

- ・GNドライブ（オリジナル）

千冬専用機体。

搭載された零落システムは、強化サーベル及びビーム兵装に擬似的に零落白夜を発動させる。が、かつての機体である『暮桜』や『白式』ほどの出力も威力もないため、バリア無効化攻撃は可能だが一撃でしとめられるほどのダメージは与えられない。それでもそこそこのシールドエネルギーは削る。

ウイングゼロの『バスターライフル』は斬るだけで留まり、『ツインバスターライフル』となると抑えるだけで精一杯になり、斬る事も無効化、消滅させる事もできない。あくまで擬似的なので、白式などの零落白夜ほどの効力は発してはくれない。

このシステムは任意の時のみOFFになる。それ以外は常時展開。第一リミッターON（シールドエネルギーが関係あるとき）の時、三〇秒に一〇シールドエネルギーが減る（最大SE700）。

この機体のコンセプトは『最高のスピードと最強の剣』である。鎧武者風の装甲形状と後頭部のエネルギーケーブルが特徴。

背中の中央にはGNコンデンサーが装備されており、GNドライブは腰のサイドバインダーに一基ずつ搭載されている。

装備は、刀身にGN粒子を纏わせる事でビームサーベルとしての特性を併せ持つ強化サーベル『シラヌイ（不知火）』と『ウンリユウ（雲竜）』。背中のGNコンデンサーから直接粒子補給が行われる。『シラヌイ』と『ウンリユウ』の柄を連結させる事で、双刃の薙刀『ソウテン（蒼天）』となる。

『ビームチャクラム』は頭部左右の強化型クラビカルアンテナの間に形成された、円環状の粒子ビームを射出する。



『トライパニッシャー』は、腹部と両肩の装甲下に作られた方向を展開し、三門のビームを球状に集束、圧縮して撃ち出す物。

『GNクロー』は、サイドバインダー先端に作られた開閉式の大  
型クロー。

『ガントレット』は、強化サーベルからのエネルギー逆流を防止する目的で、利き腕の右腕に装備された籠手。単純な防御装備としても使用される。

『GNフィールド』。両肘と両肩に設置された突起状のGNバ  
ーニアはGNフィールド発生器としての機能を併せ持ち、二刀流と  
いう戦闘スタイルから、盾を持たない本機の防御装備。

### 第13話「侍と仲間と破壊天使の戦い」

「さあ。とつとと目を覚まさせてやろう。来い。今のお前なら私でも勝てる」

千冬は言つて左手の長刀、『シラヌイ』をゼロに向ける。

堂々とただそこに居るゼロは、千冬の乗るスサノオ・零式を見つめ、ゆらりと浮き上がりながら呟く。

「……敵機捕捉。これより戦闘行動に入る」

「……行くぞッ！！」

動いたのは同時。右の『ウンリュウ』とゼロの『ビームサーベル』が激しくぶつかりあう。お互い出力の第一リミッターなどかかっていない。ゼロには第二リミッター、つまり殺傷モードにする事は不可能なはずだからお互い状況は同じ。

実体剣である『強化サーベル』が溶け斬られないのは、『シラヌイ』にも『ウンリュウ』にも刀身にGN粒子を纏わせ、ビームサーベルとしての特性も併せ持っているからだ。

すると、ゼロの足が何かに掴まれた。

「！」

「射撃などほとんどした事が無い。が、この距離なら外さん」

言つと同時に、腹部と両肩の砲口が展開される。三門から発せられるビームが球状に集束、圧縮され、徐々に巨大になって行く。当然目の前に居るゼロにはそれが直に当たる訳で、さつきからガガガ、と装甲が悲鳴を上げている。それでも足がクローに掴まれ、手は『ツインバスターライフル』と『ウンリュウ』を受け止めた『ビームサーベル』で埋まり突き放せない。

「ふっ……貴様にスサノオのデータは入っていない。故に対抗されはしないだろうと思っていたが……所詮、未来を見るとは言っても機械という訳だ……っ！」

瞬間、ゼロの体が『トライパニッシャー』に押し出された。バリ

バリバリ！！ と音を立てながらアリーナの壁まで押し出され、更に押し付けられても『トライパニッシャー』は消滅せずにゼロを攻め、爆散する。

が、それだけではゼロは倒せるはずも無い。

煙の中から閃光が飛び出す。

「はあっ！」

千冬は零落システムを機動させ、『強化サーベル』でそれを受け止める。スサノオへ迫るエネルギーの奔流が千冬を避けるかの様に裂けて行く。

零落システムは擬似的に零落白夜を再現した物である。あくまで擬似的なので、本来の零落白夜の様に完全なエネルギーの無効化は出来ない。当然、白式のように一撃でシールドエネルギーをほとんど奪ったりするような事も出来ない。一応、バリア無効化攻撃もどきは可能なのだが。

実証した事が無いので零落白夜ではどうかは分からないが（おそらく完全無効化するだろうという予想は立てられている）、高出力のエネルギー砲。つまり『バスターライフル』なら斬る事は出来るらしい。が、『ツインバスターライフル』は止めるだけに留まり、斬る事も出来なくなる。それ以上ならおそらく止める事も出来ない。斬れた、ということはおそらくは『バスターライフル』。咄嗟にツインではないと判断して斬る事を選んだが、もし外れていたらどうしようも無い隙が出ていた、と千冬は冷や汗をかく。いくら千冬でもゼロ相手に早々隙など見せられる物ではない。

と、ゼロが煙を突き破って上空へと舞い上がる。『マシンキャノン』で牽制しつつ、『ウイング・ファンネル』を展開。二四機全てが千冬を取り囲む。

一斉に火を吹いた。

二四方向から放たれる三六〇度オールレンジ攻撃。しかしそれらは千冬に擦る事すら叶わず、大きく動きすぎず、小さく動きすぎず、無駄な動きを全て省いた動きでそれらを避ける。

千冬は突如大きく動いたかと思うと、相変わらず無駄な動きをせずにファンネルの包囲網を突破した。すれ違い様にあつたファンネルを三機斬り落とし、更に千冬を追いながらビームを放つファンネルに向かつて行き、全てすれすれで避けながらも、すれ違い様に愛刀の届く範囲にあるファンネルは全て斬り落とした。その数一七機。ファンネルは残り四機となった。

瞬間、背中に衝撃が走りスサノオが弾き飛ばされる。

ゼロが背中を蹴り跳ばしたのだ。

「ぐうっ……！」

「『ウイング・ファンネル』 帰還を確認。『ツインバスターライフル』 チャージ完了、ターゲット、ロックオン……！」

「『ツインバスターライフル』が発射体勢に入る。連結された『バスターライフル』の銃口に光の粒子が凝縮されて行き、銃口の奥が眩しく光る。

「破壊する……！」

「ちっ……トランザム……！」

極光が発射されると、機体が赤く染まるのは同時だった。ふつ、と千冬のスサノオの姿が消え、一瞬前まで千冬がいた所をエネルギーの奔流が突き抜ける。地面に着弾したそれは、大爆発を起こし黒煙を上げる。

一時的に通常の三倍のスペックになったスサノオは、着弾した頃には既にゼロの背後にいた。

「せえいつ……！」

ガキン！ と、大型ウイングの一枚が『ウインリュウ』を受け止める。ガンダニウム合金Gで作られたウイングゼロの八枚の翼は、ブルー・ティアーズの『スターライトmk?』の出力だと一時間当て続けていないと（照射で）一〇センチも削れないほどに硬い。

が、スサノオは『最高のスピードと最強の剣』がコンセプトの機体。両手に持つ『強化サーベル』は、ただのGNソードなどよりも遙かに切れ味を増している。故に、一瞬では断ち切れなくとも、数

秒押し込みさえすれば。それがトランザム状態ならば尚の事、  
断ち切れる。

翼を断ち切ったそれは当然のごとくゼロの装甲に傷を付ける。更に零落システムが稼働中の『ウンリュウ』は、シールドバリアなど完全無視。つまり直に装甲に刃を当てている訳だ。ガンダムタイプと同等の切れ味を持つ刃の前では、いくらウイングゼロの装甲でも容易く斬り裂く。

生命に別状があると判断され、絶対防御が発動された。

第二リミッターの解除されていないスサノオでは、絶対防御はどんな出力だろうと貫通しない。故に中にいる恭介を傷つける事は出来ない。

しかし痛みは感じるはずだ。

「いい加減に目を覚まさるか！ 私達は無事だ！ 誰一人死んでなどいない！ だからとつとゼロシステムなどねじ伏せて戻ってこんかあッ！！」

一瞬、ほんの一瞬、赤く染まったセンサー類とツインアイが緑色の戻った。が、

「ぐ……ぐうおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
！！！！」

ガリガリガリ ツ！！ と、装甲に火花を散らせながらゼロは無理矢理『ビームサーベル』を振るう。光刃は一部の狂いも無く千冬の横腹に叩き込まれた。装甲が溶かし斬られ、絶対防御が発動する。

「うぐうっ……………！！」

「トランザム……………ッ！！」

「ちいッ！ 撃たせるかあッ！！」

ゼロがトランザムを発動し、急速に『ツインバスターライフル』のチャージを進める。通常二、三〇秒かかるはずのチャージを、ま

さに五秒で終わらせる。トリガーに指がかかる。

それを止めんと千冬が高速接近するが、いつの間にか展開されていた残りの『ウイング・ファンネル』四機のビームが邪魔をする。

瞬間、連結した二つの銃口から極光が走った。

視界が 光に包まれた。

\* \* \*

リトルバスターズ?  
背中のネコ園、総合医療区画第三手術室は大騒ぎだった。

「輸血急げっ！ 結合促進ナノマシンの用意は!？」

「完了しています!」

「よし！ これより織斑一夏の救命手術を行うっ。切断面は非常に綺麗だ！ おそらく敵が薙げたと思われる偽物の『雪片』が、かなりの切れ味で細胞を潰さずに分離させたのと同等の効果をもたらしたのだと思われる！ 素早く！ 正確確実に！ 一辺の後遺症も残さずに彼女の右腕を結合するぞっ！ 失敗したら恭介さんと千冬さんにフルボッコだ！ 良いな!？」

『はいっ!』

「よしっ、オペを開始する!」

沙耶はそんなやり取りのされている第三手術室を、手術見学用モニターの総合医療区画第一待機室で見ている。

「ふう……とりあえずは何とかなりそうね。いつも意味不明な発明をしてるマッド鈴木も、ドクターモードになればさすがに真面目ね」と、一人呟きつつ一息つく。

正直、沙耶としては一夏が死のうが死ぬまいがどうでもよかった。いや、むしろ死んでくれた方が恋のライバルが減る。故にどちらかと言えば死んでくれた方が良い。

が、そんなことになってしまうと、恭介がリーダーとして機能し

なくなる可能性が非常に高い。いくら周りが励まそうとも、だ。恋愛は大事だが、現状それよりもソレスタル・ビーイングがちゃんと稼働する方が大事なのだ。

朱鷺戸沙耶は棗恭介の事が好きだ。

一〇歳の頃、戦地や大規模災害地などに赴いて活動する医者である父親と母親について様々な国を点々としていた時、沙耶は誘拐された。いや、正確には父と母を殺し、沙耶を連れ去った、と言うべきか。

それから連れ去られた先でやらされたのはスパイの訓練。

スパイと一言で言っても、テレビで逮捕された、と報道されるようなスパイではない。暗殺や盗みはもちろん、様々な事をやってのける超危険なスパイ。

いつの間にか侵入し、いつの間にか喉頸のどぐちに噛み付く蛇。

好きでやっていく訳ではない。ただ自分一人が抵抗するには大きな組織だった。そうして抵抗を諦め、従順に任務を遂行していく仲間は大勢いた。

そんな中、その組織を壊滅させたのがソレスタル・ビーイングだ。彼らはちょうど仲間を集めている最中だったらしい。違法施設や沙耶がいた組織などを潰して、協力してくれる人には仲間になってもらう。仲間になる気がない人には、人脈を使って仕事を紹介し、普通に生活出来るよう環境を整えてあげたり、働ける歳ではない子達は、引き取ってくれる人を探したり……と、その頃からいろいろやってきたようだ。

単純に考えれば、表の世界になど戻れない人を探している、そう思ってしまうだろうが、ソレスタル・ビーイングに入ってそんな考えをしていた頃の自分をぶん殴ってやりたくなる。

表も裏もない。ただ暖かく、どんな事情があろうと受け入れてくれる。そんな場所だった。

ソレスタル・ビーイングに入っている人でも、常に背中のネコ園にこえんにいる訳ではない。普通にお店を経営したり、結婚したりしている

人だつて大勢いる。

背中のネコ園にいれば、仕事がない限りは毎日がお祭り騒ぎだと言つても過言ではないくらいに騒がしい。そういう所はリトルバスターズと同じなのだろう。時にはシリアスに、でも基本は楽しく。

そうして、第一部隊『闇の執行部』に所属しているせいだけではないだろうが、恭介とよく行動を共にする事が多くなり、いつの間にか惹かれていた。

……正直ライバルが多い、と沙耶は思う。

数ヶ月前に保護したESP研究で生み出されたビャーチエノワ姉妹、社<sup>やしろ</sup>霞、鑑<sup>かすみがみ</sup>純夏<sup>すみか</sup>を含める他数名、いや、もしかしたら数一〇名だつたりするかもしれないが、ソレスタル・ビーイング内にもライバルは多い。IS学園でも着々と増えてきているとか。

まあ、それで諦める沙耶ではないのだが。

「さて……一夏ちゃんはお届けしたし、助かりそうだし、お仕事にでも行こうかしらね」

言つてストライクノワールGを展開し、転移を始める。残念ながら加勢には行かない。というよりも行つても仕様がなと言つべきか。千冬達がいれば十分なはずだ。少なくとも暴走したゼ口を止めるだけならば。

沙耶の足下がきらりと光る。

「転移場所は 企業秘密である。」

\* \* \*

やられた、そう思つた千冬だったが、何故か何の衝撃もこなかった。

放たれたエネルギーの奔流が止むと、思わず瞑っていた目を開ける。そこには緑色の壁があつた。

「ふう……間に合つた。すいません、入る隙が見つからなくて、全然援護も出来ませんでした……」



「いや、私ともあろう者がお前の事をすっかり忘れていたよ。助かった、デユノア」

「いえ。ギリギリでビットの耐久値が保って良かったです」

千冬の目の前を遮っていた、というより周りを囲むように配置されていたのはケルデイル・サバーニヤの『GNホルスタービット』達だった。

「敵機の破壊失敗を確認……戦闘を続行する……！」

「来るぞデユノア！」

「はいっ……！」

トランザム状態のウイングゼロが動く。通常状態でもガンダムタイプの中では動きの速いウイングゼロの更に三倍の速度は、もはや目で追えるような物ではなかった。見えるのはその場に残った、装甲内に流れるGN粒子の赤色化と量の増大による残像のみである。

しかし、そんな状況でも千冬は背後から迫り来る『ビームサーベル』を受け止めてみせた。

「目で追えなければ感覚で察すれば良いだけだ。まあ、こんな事が出来るのは限られるだろうが、なっ！」

スサノオの足がゼロの腹を思いきり蹴りとばす。瞬間、ゼロの背中が大爆発を起こした。シャルロットが放ったGNミサイルが大量に迫っていたのだ。それらが全てゼロに直撃し、何十もの爆発を起こす。

爆発で起こった煙から出てきたのは、ボロボロになったウイングゼロだった。だがまだゼロは動く。ツインアイもセンサーも全て真っ赤だ。ゼロは『ツインバスターライフル』を分離させ、シャルロットと千冬に向けてトリガーを引く。

ゼロの頭部アーマーが『GNライフルビット？・トンファーマー』に思いきりぶん殴られた。

ガッツキインツッ！！ とツインアイにひびを入れ頭部アーマー

を思いきりへこませた一撃をくらったゼロは、クルクルと微妙に回転しながら地面に叩き付けられた。

ふっ、と、ツインアイとセンサーから光が消えた。そしてゼロが解除される。

土煙を小さく上げながら、中から恭介が放り出された。

………いってえ………、と言い残して恭介は気絶した。

………もしかしたら、戦闘メンバーに入っていたはずなのに出番の無かった八つ当たりなんじゃないか、と千冬は微妙に思ったりもしたが、あえて言わないでおく事にした。

### 第13話「侍と仲間と破壊天使の戦い」(後書き)

なんじゃこの終わり方!? しょうもなさ過ぎる!? 自分で書いてただけで戦闘シーンとか頑張ったのに何だこれ!? すいません! こんな変な終わり方ですいません! でもなんかちょっと疲れちゃって少しばかり血迷っちゃったというかなんというか……。

……とりあえず、次の話で第二章〜貴公子+ウサギ+リーダー!! また騒ぎ(笑)〜は完結です。多分短いと思われます。  
第三章の『〜』の間のタイトル、どうしようかなー……。

今更だけどサブタイトルと中身に偽りありだよね……。

## 第14話「終結と喜びとまさかの悲劇」

「ん……」

最初に感覚器官を刺激してきたのは消毒液の臭いだった。

視界に飛び込んできたのは、どこまでもまっさらに白い天井。肌を包むのは、おそらくは布団かベッドだろうが、ふかふかと柔らかいもの。そして　感覚があるような無いような変な感じのする右腕。

「あ……！？」

思い出した。あの時何かが（もしかしたら『雪片』かもしれない）飛んできて、自分の体に当たった事を。突如走った激痛の中で消え失せて行く体温と、視界の中で舞っていた腕。

何故か動かない体に、一夏は視線だけを変えた。そこにあるのは包帯でグルグル巻きにされた何か。

義手……では無い、と一夏は思った。大分まわってきた頭は、それが自分の右腕であると判断している。包帯に巻かれながらも自分の右肩口に繋がっている辺り、落とされた右腕を結合しているのかもしれない。という事は、さつきから感じているあるような無いような右腕の曖昧な感覚はそのせいなのか。

シューーン、という音が、ベッドを囲む白いカーテンの向こうから聞こえた。誰かの足音がこちらへ近づいてくるのが聞こえる。足音の主が一瞬止まると、シャツと音を立ててカーテンを開けた。

その先にいたのは　千冬だった。

「あ……千冬……姉……」

「一夏……っ！　目を覚ましたのか！？」

千冬は心底嬉しそうな声を出して走り寄り、右腕に荷物がかからないように抱きしめた。

「良かった……一夏……！」

「千冬姉……心配、させて……ごめん……」

「良いんだ……っ、こうして生きていてくれるなら……」

一夏の暖かさを確かめるように、少し抱きしめる力を強める千冬。当の一夏は、力が入らず動けずにいる。が、表情はとても嬉しそうだった。

しばらくそうしていた千冬は、ふと一夏から離れ一度カーテンの外に出ると、丸いすを持ってきてベッドの隣に座る。

「千冬姉……あれから……？」

「全て終わった、みんな無事だ」

「そっか……良かった……」

一夏は心底安心したような笑みを浮かべる。

……実は現在恭介が（シャルロットの一撃によって）危篤状態なのだが、まああの男の事だからどうせひよっこり復活しているだろう、とあえて黙っておく事にした。

すると、一夏はあ、と声を漏らし、

「ボーデヴィッツさんは……？」

と聞いてきた。

「ああ、ラウラか。アイツなら無事だ。特別外傷も無いらしい」

「良かった……」

「……私が言うのもなんだが、よく安堵など出来る物だ。アイツはお前を殺しかけたのだぞ？」

まあそうだけど……と、一夏は目を細める。

「それでも……一応クラスメイトだから」

「……はあ。まったく、とんだお人好しに育った物だ。これもアイツの影響か？」

「はは……かもね……」

一夏は力弱く苦笑した。

恭介に影響された そんな物は出会ったあの瞬間からの事だ、と一夏は思う。

あの瞬間から始まったお祭り騒ぎの様な毎日は、あの時の辛かった日々と打って変わって変わって楽しかった。何かを悪に仕立てて毎日毎日

いろいろとやったり、毎度恭介が遊びを考えては遊んでいた。

あの頃はいつでもどこでも恭介、理樹、鈴、真人に謙吾、箒と一夏。時々鈴音。途中でメンバーが若干変わりはしたが、七人はいつも一緒。ある意味で、今時珍しいんじゃないか、と今なら思える。まるでマンガのようだとも思った。

まあ、やはりそれだけの絆を築ける恭介が凄いのだろうが。

なんとなく昔の事を思い出すと、自然と笑みがこぼれた。

それを見た千冬は、ため息をつきながらも口端がつり上がっている。

「それにしても……大変だな、お前達は」  
アイツに惚れた奴

「？ 何が……？」

「お前も理解しているだろうが、アイツはまさしくフラグメーカーだ。奴に落とされた奴が今までに何人いるか……。しばらく外国にも行っていたようだから、どうせ日本外にもいるだろう」

「否定出来ない……」

「そしてどうやらラウラもその内の一人になったようだ」

「……………はあ？」

「クロッシング アクセス相互意識干渉。IS同士の情報交換ネットワークの影響から、縦者同士の波長が合う事で起こる現象……両者間の潜在意識下で会話や意思の疎通を図る事が出来るのだが、その中でいつの間にか何かしら会話していたようだな。何を話したか知らんが、またやらかしたようだ」

「……………またライバルが……………」

しかし……………と一夏は思う。

……………何故あんなにも嫌悪していたようなラウラが……。いや、そんなラウラですら惚れさせる事が恭介には出来る、というだけなのだろう。

少々呆れるが。

「ま、頑張れよ。私は応援しか出来ん」

「……………千冬姉もね」



なら、アイツを選んだ方がその辺の誰かを選ぶよりも遙かにマシだ、そう考えはするな』

それに、と千冬は続けた。

『アイツは強いがなんだかんだで脆い。失敗やら何やらを激しく気にするような繊細な訳でも、罵倒されて気にするような奴でもないんだが……なんだろうな。表現し辛いけど、とにかく脆い所がある。どうやら女という生き物はそういう脆さを見てしまうと、母性というか、支えてやりたいと思ってしまうようだな。純粋な子供を見て保護欲をかき立てられるのと似ていると言っか……』

頬を紅潮させながらそんな事を言った事を覚えている。

暗く暗い、沼の底の様な場所で、ラウラ・ボーデヴィツヒは千冬との事を静かに思い出していた。

棗恭介という男の話をしている千冬はとても楽しそうだった。いつも凜々しく、堂々としている千冬とは違って、自然に溢れるその笑顔が眩しかった。その笑顔がラウラには許せなかった。

底があるかも分からないようなこの暗い空間の中で、ラウラは遙か遠い沼の外に手を伸ばしてみた。

光なんて一筋もない。気を抜けば水圧で圧殺でもされてしまうかもしれない。

一時は慣れていた孤独感は、どうしてか心を締め付けた。

瞬間。誰かが彼女の手を掴んだ。

(　　っ!?)

『随分寂しそうな顔してるな。さっきとは大違いじゃないか』

棗恭介。

あの人<sup>教官</sup>がたどり着けないといった強さを持つ男。

『……何故だ』

『ん?』

『何故……お前はそんなにも強い……』

目の前の男は、突然のそんな言葉に一瞬キョトンとした顔をしたが、次の瞬間には苦笑しながら、そんなに強くはないさ、と言った。



『俺は十分弱い。仲間や友達つて支えが無きゃ、俺はここまで戦えやしない。俺はいつもイツらに助けられてばかりだ』

だから、と、ラウラの手を掴む力を強めながら自分の方に引き寄せ、

『だから守りたいのさ。仲間に助けられるだけってのは嫌だからな。イツらが俺を助けてくれるから、俺はイツらを守るんだ。そのためにここまで力をつけてきた』

『守る……ただそれだけのためにか……？』

『お前が憧れてる千冬さんだつてそうだ』

『教官が、か？』

『あの人はただ一人の家族を守るために強くなったんだ。だからあそこまでやれるのさ』

よく分からなかった。

だが、少なくともあの人とこの男は、今の私にはない物を持っている……そんな気がした。

『分からないなら良い。その内分かるさ』

でも、と恭介は続ける。

『とりあえずだ。そんな情けない顔してるんだつたら、俺の仲間リトルバスターズになれ』

そうすれば、分かるまで、強くなれるまで守ってやる。

(ああ……なるほど。)

この男は確かに危険カッコいいだな。

「う、あ……」

一夏が目を覚ます少し前、……ふと、ラウラは目を覚ました。

自分が寝ている場所はおそらく保健室、VTシステム、どうやらアレは止まったようだ。

「目が覚めたか」

ごく近くから聞こえたその声は、自分が最も尊敬する人物の物だった。そちらへ視線を移すと、ラウラが教官、と呼んで憧れる織斑千冬がベッドの横に座っていた。

「私……は……？ 何が……？」

そう尋ねてくるラウラに、千冬は一つため息をついた。

「一応、重要案件である上に機密事項なのだがな。『VTシステム』を知っているか？」

「はい……正式名称、『ヴァルキリー・トレース・システム』。過去のモンド・グロツソ部門受賞者の動きをトレースするシステムです。ですが、確かアレは……」

「そうだ。IS条約で現在どの国家、組織、企業に置いても研究・開発・使用全てが禁止されている。それがお前のISに積まれている」

「……………」

「巧妙に隠されてはいたが、操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意志……いや、願望か。それら全てが揃うと発動するようになっていたらしい」

「私が……望んだからですね」

そう呟くラウラに、千冬は真つすぐ向き直り、いつものような堂々とした態度で、

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

と叫んだ。

突然過ぎて、思わず「は、はいっ！」と声を上げてしまった。

そんなラウラを無視して、千冬は口を開く。

「お前は誰だ？」

「わ、私は……私、は……」

「誰でもないなら丁度良い。お前はお前ラウラになるといい。なに、時間は山ほどあるんだ。何せ三年間はこの学校に在籍しなければならぬいからな。その後も……まあ死ぬまでである。たっぷり悩めよ小娘」

「あ……」

千冬は立ち上がり、ベッドから離れる。そのまま何も言わずに入り口の方へと歩いて行き、ドアに手をかけた所で、振り向かずに、

「ああ、それから……」

ドアを開ける。

「お前はどうぞ足掻いても私にはなれないぞ。アイツの姉とアイツらの保護者は、こう見えても心労が絶えないのさ」

言って千冬は保健室を後にし、ドアを閉めて行った。

……それから数分経つと、何だか急におかしくなってきた。思わず口の端をつり上げ、笑い声をこぼす。

今日から彼女は 始まった。

\* \* \*

目を覚まして最初に見えたのは超アップの、目を瞑った沙耶だった。あれ、仕事じゃなかったっけ？

「……なにしてるんだ？」

「うつひゃああッ!？」

恭介が声をかけると、思いきり後ろに飛び退いた。

「あ、あなたねえ！ いきなり目覚めないでよ!！」

「いや、意味が分からないんだが……」

「何よ！ 責任取れるの!？ あたし処女なのよ!？ どうしてくれんのよ!？」

「何の責任だ……」

沙耶はこうしてたまに意味不明な事を吐く。いわゆる『自虐パフォーマンス』もその中の一つだ。

彼女は、一つ深呼吸をすると、

「まあ良いわ。目を覚ましたなら本題に入るわよ」

「本題……? VTシステム関係か？」

「ええ。先程、束さんが見つけたシユヴァルツェア・レーゲンにシステムを積んだと思われる研究所……で良いのかしらね。そこを潰したわ。私達『闇の執行部』がね」

つまり彼女は、仕事をサボっている訳ではなく、終えてきたらしい。

「……で、それだけか？」

「仕事として報告すべきはね。あとは、ラウラ・ボーデヴィツヒの無事と、一夏ちゃんの手術が無事成功、臨海学校が始まる前までに完全完治だそうよ。ついさっき目を覚ましたとも聞いたわ」

「そうか……良かった」

恭介はふっ、と笑う。沙耶は若干顔を赤らめながらも、続ける。

「……彼女の専用機の事だけだ」

「ああ、『U・B』の事だろう？」

「ええ。アレ自体は臨海学校の日辺りに完成させられるみたい。ただ……渡すかどうかはあなた次第ね。出来ればこちら側<sup>命がけの</sup>の世界には来て欲しくないんでしょう？」

「……ああ。でも」

恭介には分かっている。

一夏は……いや、一夏達は否応無しに、ソレスタル・ビーイングとその敵との戦いに巻き込まれる。彼女達との関係を、敵は知っているのだから。

「……搭乗者のいない状態でのVTシステム稼働……やはり奴らの仕業か……？」

「ええ。そうね……」

二人は窓に目をやる。

そこに映っているのは、どこまでもどこまでも暗く、広く、そして所々に光の見える広大な宇宙。

「私たちの敵……『八卦龍』<sup>はっけりゅう</sup>の、ね」

…… 恭介は、目を覚まして少しすると、IS学園へと戻って行った。時間は太陽が沈んで行った時間。時間帯的にそろそろ夕飯なので食堂に向かうと、シャルルが先に食べていた。そんなシャルルに声をかけ、先程貰ってきた料理をテーブルに置いて隣に座る。

何やら周りの女生徒達が騒がしいが。

「……優勝……ちゃんすが消え……」

「……交際、無効……」

『うわああああああん!!』

叫びながら滝の様に涙を流して、女生徒達は走り去って行く。

さっぱり状況が理解出来ない恭介は、ただ見送る事しか出来なかった。

「……なんだったんだ?」

「さ、さあ……?」

と、そんな怒濤の勢いで去って行った女生徒達の向かった方の世界の端で、一人取り残されている女生徒が一人いた。

「? 箒、どうしたんだ?」

「う…… 恭介……」

先程の女生徒達の様に滝の様な涙は流していない物の、同じようにながかりした風なのは同じだった。

そんな箒はトボトボと恭介の方に歩いてくる。

やってきた箒は、俯きながら一つため息をついた。

恭介は、そんな箒を見ながら、そういえば、と口を開いた。

「お前と先月約束してたよな。優勝したら買い物かどうとか、ってやつ。あれ別に行っても良いぞ」

瞬間、箒は顔を上げ思いきり嬉しそうな顔をした。

実は先月、突如部屋に現れた箒が、「優勝したら買い物に付き合ってもらう!」と、言ってきたのだった。恭介は特に気にするでもなく、二つ返事でOKしたわけだ。

「ほ、本当か!？」

「ああ。別に予定も無いし、久しぶりに町の様子も見てみたいしな」  
「そうかそうかつ! 絶対だぞ! 約束だからな!!」

「そんな詰め寄らなくても破りはしないさ。詳しい日時とかは連絡する」

「ああっ! ではな!!」

さっきとは打って変わって、とてつもなく歓喜の表情を見せる篤は、スキップすらしながら食堂を後にした。

……なんだか目に見えたのは気のせいだろうか。

と、恭介は何やら不穏な空気を感じ取り、シャルルの方に視線を移す。何故か機嫌が悪そうな顔をしていた。

「どうした?」

「……恭介って女の子の前で他の女の子と出かける約束とかしちゃうんだね。最低」

「は? いや、ちよっ、なんだ突然!？」

「ふんっ!」

……何故か超不機嫌そうに顔を背けるシャルル。

恭介の頭の中には? で埋まっていた。

「あ、ここにいましたか。棗君、デユノア君!」

そう言いながら食堂に入ってきたのは真耶。その身長に不釣り合いなバストを思いきり揺らしながら恭介達の元へ走ってくる。

「……何ガン見してるのかな?」

「は? 何を?」

「ふんっ」

恭介達の元まで来た真耶は、ふう、と一息つくくと、

「今日は大変でしたね。棗君は大丈夫ですか?」

「ええ。暴走も止めてもらいましたし、怪我也特には」

「そうですね、それは良かった。……では、今日は二人に朗報です」  
言ってガッツポーズを取る。

……狙っているのだろうか。胸は。

「ついに大浴場の使用が男子も可能になったんですよっ！」  
そんな事を真耶は言った。

……二人が悩むには十分な、そんな事を。

\* \* \*

「……で、どうする？」

「どうする、って言われても……」

恭介達は一旦部屋に戻り、準備を終えると、大浴場に向かった。  
扉の前には真耶が鍵を持って待っており、恭介達を見つけると鍵を  
開けて扉を開けた。

という訳で現在、大浴場の脱衣所にいる訳だが……やはり男と女  
一緒に入るとかは出来ない。

「はあ……仕様がな。俺は適当にシャワーを浴びて二、三分風呂  
に入ったらととと出てくるから、その後シャルはゆっくり浸かっ  
てるよ」

「え？ でもそれじゃ恭介が……」

「別に良いさ。それに、でかい風呂に入りたければ背中のネコ号リトルバスターズ?  
でも行けば良い」

天使湯があるしな、と恭介は付け加える。

「という訳で、行ってくる」

「あ、ちよつと！」

一瞬でバツ、と服を脱いでタオルを持って恭介は大浴場へと入っ  
て行った。

そんな恭介を見ながら、シャルロットは何かを決意したような表  
情を浮かべたかと思うと、自分のボタンに手をかけはじめた。

恭介は宣言通り、シャワーを浴びて、湯に浸かり、そろそろ二、

三分経たんという所で上がるうとした。が、振り返った所で、そのアクションはキャンセルされた。

「お、お邪魔します……」

シャルロットが現れた!!

「な、なんで入ってきてるんだ!? まだ俺がいるって!」

「あ、あまり見ないで……!」

「うえ!? あ、わ、悪い!」

いつもの兄責的な感じはどこへ行ったのか。慌てて後ろを向いて、湯に浸かり直す。

シャルロットは、シャワーで体と髪を洗い終わると、湯に入り、中央辺りに移動していた恭介と背中合わせになるよう座った。ちゃぷん、と湯の揺れる音が浴室に響く。

シャルロットは少しだけ恭介に体重をかけ、一息ついた。

……二人の間には会話が無かった。あるのはさっきからバクバクと音を立ててくる、心臓の音だけ。

そうした時間をしばらく過ごしていると、シャルロットが口を開いた。

「あ、あのね、恭介」

「ど、どうした……?」

「あの……ね? お礼を言いたかったんだ、いろんな事に」

「いろんな事?」

「うん……僕を助けてくれた事とか、守ってくれた事とか……僕を友達、って呼んでくれた事とか」

「そんなの当たり前だろ、お前は友達でリトルバスターズのメンバーなんだ」

「あはは、恭介らしいね。それに」

突如、シャルロットが小さく悲鳴を上げた。

「どうした!?」

「す、水滴が落ちてきて……びっくりしただけ……」

「なら良いけど……」



再び沈黙。

瞬間、ちゃぶ……と、音を立てながら、シャルロットが動き始める。思わず振り向きかけた。

「？ どうした？」

「こ、こつち見ちゃダメっ！ あつち向いてて！」

「わ、悪い……」

何をしようとしているのか、ちゃぶちゃぶと地味に音を立てながらなにやら動いているシャルロット。

ぴとっ、と恭介に抱きついた。

「~~~~~ツ!? しゃ、シャル!？」

「恭介……僕、恭介に言われなかつたらずっとあのままだったと思う。父や本妻の言いなりで、『生きながら死んでいる人形』のままだった……」

恭介がフランスを発ち、母親も亡くなって。頼る事が出来なくなった彼女は、ただ流されるままになってしまった。状況に流され、人の都合や感情に流され、最後には親の我が侷と理不尽に流されてきた。

あのと時風恭介に止められていなかったら、もしかしたら後に襲いかかる罪悪感と後悔で押しつぶれていたかもしれない、とシャルロットは思う。

助けられてばかりだ。初めてあった時から。

だからこそ、今度は自分が助けたいと思った。だからソレスタル・ビーイングに入った。後で説明された、ソレスタル・ビーイングにいることの危険性も、誰かを殺す覚悟をしなくてはならない事も、全て受け入れて、だ。

「本当に……感謝しきれないよ」

「俺は……背中を押しただけさ。お前はそれで一步前に進めた、そ

れだけだ。世界なんてものはそれだけで変わってくれる。その変化がでかいか小さいかは、進んでみないと分からないが……それでモキッと、良い方に進んでくれるはずだ」

「うん。分かるよ……分かる」

きゅっ、と抱きしめる力を強める。恭介は一瞬びくっ、と反応したが、何も言わずに黙った。

大浴場には、しばらく心地のいい沈黙が続いていた。

\* \* \*

翌日。何故かホームルームになってもシャルロットは来なかった。先に行つて、と言つてきたため恭介は食堂で分かれたが、理由は聞かなかったので何故かは分からない。見ると、あのラウラもない。まあこちらは事情聴取、と考えれば合点は行くのだが。

すると、扉を開けて、真耶が教室に入つて来たのだが、何故かふらふらとしていた。また何かやらかしたのか、それとも朝っぱらから痛恨の一撃でも食らつたのか。

「み、みなさん……おはようございます……」

なんだか声もふらふらだった。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します……あ、いや、転校生と言いますか、既に紹介は済んでいると言いますか……ええと……」

やけに歯切れが悪かった。

周りの女生徒達は、「また転校生？」とか、「もう二人いるよ？」とか囁きあっている。

「じゃあ、入ってきてください」

「失礼します」

ん？ と、なにやら聞き覚えのある声に、恭介は反応した。

ガラ、と教室のドアを開けて入ってきたのは……、



「ラウラ、助かった。サン　むぐっ！！？」

瞬間、ラウラの顔が思いきり近くなった。

恭介は安心して過ぎて、ラウラの行動に気付けなかったらしい。

突如。

ラウラは。

恭介の胸ぐらを掴み、引き寄せ。

『キス』をした（唇に）。

.....  
!?!?!?!?

「お、お前は私の嫁にするっ！　決定事項だ、異論は認めんっ！！」  
恭介の頭が俺が金棒でガンダムだ！！　となっている中、ラウラはそんな事を言いおった。

恭介は何とかツツコミを絞り出し、口に出す。

「よ、嫁？　婿じゃなくてか？」

.....どうでも良い方だった。

「日本では気に入った相手を“嫁にする”というのが一般的な習わしだと聞いた。故にお前を私の嫁にするっ！」

「誰だそんなうそっぴちを教えやがったのはあッ！！　今からぶつとばしにいつてやる！！！」

思わず（キヤラも軽く崩壊して）声を荒らげる恭介に、後ろから肩に手を置かれた。

.....何故かいる朱鷺戸沙耶だった。

「.....恭介.....いつぺんしんでみる？」

「ひいつ！？」

思わず恭介ですら悲鳴を上げる、超冷えた声で沙耶は言った。冷や汗が止まらない。どうにも止まらない。

思わず逃げ出した恭介は、教室から出ようと入り口の方へ走った。  
が、

「……シャル」

「恭介つてさあ、他の女の子の前でキスしちゃうんだね？ 僕びっくりしたなあ」

「いや、あの……したっていうかされたんですが……とりあえずそのISをしまってください」

「い・や」

逃げた。

恭介は踵を返して教室を走り抜け、窓枠に足をかけて外に飛び出した！

瞬間、背中に衝撃砲が直撃した。

……窓の外で、一人の男の悲鳴（緑川ボイス）が上がった。

## 第14話「終結と喜びとまさかの悲劇」(後書き)

八卦龍は、知る人は知っているであろうゼオライマーの鉄甲龍の  
パクリです。ちなみに、八卦衆は出ません。

そういえば今更なんだけど、シャルロットにはロックオン・スト  
ラトスのコードネームをあげたんだっけ。使う機会あるのかな？

さて、とりあえず。

第二章〜貴公子+ウサギ+リーダー〓また騒ぎ(笑)は完結です。  
第三章は……まだ名前考えてません。

では、また次回！

短編1「邪見にあしらわれるとは……ならば君の視線を釘付けにするッ!」

短編って言うだけあって結構短いです。五〇〇〇、いや、四〇〇〇  
○文字もないんじゃないかな。下手したら二〇〇〇文字とかもあり  
えたりして…。

あと、初のクリス力登場回です!

短編1「邪見にあしらわれるとは……ならば君の視線を釘付けにするッ!」

……む。もう始まっているのか？

あー、どうも。クリスカ・ビヤーチエノワだ。今は近くにはいないが、イーニア・ビヤーチエノワという子もいる。この子は……まあ何と言うか、妹みたいな感じ、だろうか。とにかく大切な家族だ。ああ、ソレスタル・ビーイングのみんなも家族……と言えなくもない、と思う。

それと、言うまでもないがキョウスケが好きな人間の一人だ。もちろんイーニアも。

前に一瞬だけ説明があつたはずだが、私はESP、つまり超能力を持った人間を造り出すための研究所で生まれた。どうやら私達は成功品……っていうとみんな怒るんだが、とにかく超能力が使える。その超能力が、リーディングとプロジェクト脳内投影能力だ。この二つは共通で、私とイーニアがどちらも持っている。

前者はありきたりな物で、心を読む能力だ。だがまあ、戦闘にはこれほど使える能力はないだろう。相手の行動が分かるのだから。まあ、たまにキョウスケの様に頭では何も考えずに戦ってくるアホ変態もいるので、あまり過信は出来ないとこの前知った。

後者は言葉を伝えず、直接相手の頭にイメージを送り込む能力だ。ぶつちやけて言うとは何故こんな能力があるのか分からないが、まあ戦闘では相手に多少の動揺を誘ったりする事は出来るかもしれない。使いようだな、まさに。

ああ、でもリーディングを使っても恭介がどの女を好いているとかタイプはどんなのとか全く分からないんだ。くそっ、これもアイツ束の言っていた『いのべーたー』とかいうのになつたせいなのか？ いや、そもそも力に頼るのが間違っているのか……。

まあそんな事は今どうでも良いんだ。

そう……あの変態の前ではッ!!





だと！ ミスター・ブシドーなどとふざけた呼び名で呼ばれるだけの事はあるという事が……！

チィっ、仕方ない！

「来いっ、チエルミナートル・アイン！！」

私が叫ぶと同時に、手首につけられていた腕輪が光り、私の体にI Sが展開される。

『チエルミナートル S U - 37 U B ・ ? 』アイン。私がいた研究所で開発されていた私とイーニアの専用機を、C Bの連中が改造した機体だ。

動力には疑似G Nドライブを採用している。まあオリジナルは結構な数あるんだが、メンバーに一個ずつ、なんて言えるほどありはしない。作るのに時間がかかるからな、あれは。

だから私のチエルミナートル・アインと、イーニアのツヴァイには三つの疑似G Nドライブが搭載されている。武装もそれに合わせて大分変えられた。まあ私達はまだこの二機には乗ってなかったから、特に愛着もなかったし改造は別に構わなかった。おかげでかなり性能が上がったしな。

アインとツヴァイは、前者が中近距離特化、後者は遠中距離特化の機体となっている。私が切り込みイーニアが支援。まあ今まで通りだ。

「よく言った、クリスカアアアツ！！」

「何だ！？ 私が何を言っただんだ！？」

「来たまえっ、ブレイブラッ！！」

奴のI S、ブレイブが展開される。

あちらもG Nドライブ搭載型だが、私のチエルミナートルより性能は上。くっ、だが機体の性能差が勝敗を分つ絶対条件ではない！

私はチエルミナートルの出力を最大にして背中のリトルバスターズ？ネコ園の廊下を駆け抜ける。時折通行人が現れるが、そんな物は難なく避ける。が、後方で一々悲鳴が上がるのは何故だ？

「くっ、スピード自体はこちらが上回っているというのにつー！！」

「ああそうだ。認めよう。宣誓も矜持も、行動の源であるが、所詮

は建前でしかなかった。この感情は誤魔化しようも無い。私、グラハム・エーカーは、この機体をもってクリスカを追いかけられる事に、これ以上も無く 悦びを感じている……っ!!」

「改めて言わせてもらうが貴様は本当に正真正銘の変態だなッ！女を追いかけ回して悦びを感じているとは！ ていうかどうか考えても会話が成り立っていないだろう！」

「だが、ブレイブの力で勝ち取った物は私の物ッ！」

「何を言っているんだ!？」

「あの時の決着はまだついていないのだよ、クリスカ。心ゆくまで踊り明かそうではないか、クリスカ。豪快さと繊細さの織りなす武の舞いによつてだ、クリスカ。そうだ、君は私のプリマドンナ！ エスコートをさせてもらおう！」

「ッ!!」

叫ぶと同時に、グラハム・エーカーのブレイブの速度が上がる。バ力なッ！ スペック状はブレイブがチェルミナートルで追いつくのは不可能とされているのにつ!？」

「言ったはずだクリスカッ！ そんな道理、私の無理でこじ開けるとッ!!」

「チイツ、変態のくせに厄介な奴めッ!!」

「そうさッ！ 私は変態だ！ いや、私だけではない！ 男はすべてからく変態だアッ!! そうとも！ 君達が好いている少年ですら!」

「キョウスケは変態ではッ！」

「それはそうだ！ 私の様に常時変態を晒しているような男ではないからなあ！ だが！ 男とは一度その理性というダムが崩れれば、誰だろうと男は変態となるのだ！ そう！ あの女性のような顔立ちの直枝少年や！ 第二部隊『SSS』の大山少年ですら!!」

「な、なんだと……ッ!？」

な、何だ？ 何故私はこうも反応してしまう……! 所詮はド変態の言う事だぞ!？」

だが……奴の言う事が本当ならば、私が、いや、私とイーニアがその理性というダムを崩してしまえばアイツは……！

だが、どうすれば!?

「抱きしめたいなあ……クリスカアツ!!」

「し、しまった! ついいらん事を考えてしまったあ!!」

ガシッ! と、ブレイブの腕が私の腕を掴む。

そのまま押し倒してくるグラハム・エーカーによって、チエルミナートルが床に接触し、火花を上げながら引きずられて行く。

「まさに……眠り姫だ……!」

その後……チエルミナートルが強制解除され、食堂に連れ戻された私はグラハム・エーカーに元気に挨拶とやらが出来るまで拘束された。

……悪夢だ。

ようやく解放された私は、先に帰っていたイーニアを抱きしめながら、ベッドに潜り込んだ……。

「邪見にあしらわれるとは……ならば君の視線を釘付けにするッ!」

……今日は眠れないかもしれない……。

短編1「邪見にあしらわれるとは……ならば君の視線を釘付けにするッ!」

グラハムファンの皆さん、ほんつとごめんなさい！ 思い切り変  
態変態言っちゃってほんとにごめんなさい！

クリスカファンの方々、しゃべり方等違ったらごめんなさい。

間章「八卦と白き牙と偽・革新者」（前書き）

先日……とんでもない事実が発覚しました。

イーニアって『ビャーチェノワ』じゃなくて『シエスチナ』じゃん……！

聞いた時はマジで？ って思っちゃいましたよ……。指摘してくださった京勇樹さん、改めてありがとうございます……。名前出して大丈夫かな？

で、ちょっとばかり考えたりしましたが……。

……元々『姉妹』って言ってるので、もうビャーチェノワで良いね？ って結論に至りました。

ごめんなさい！ 思いきり面倒感が溢れ出てますけどごめんなさい！ 指摘もしていただいたのに！

でも、もしマブラヴ知らない人とかが読んでくださっていて、「あれ、ビャーチェノワじゃなくなってる？ 何で？」とか思われてもアレかなー、と思いました（今）。

言い訳臭いですが、どうかご容赦していただけると幸いです。

では、間章「八卦と白き牙と偽・革新者」をどうぞ。

## 間章「八卦と白き牙と偽・革新者」

ファントムタスク  
亡国機業という組織がある。

古くは五〇年以上前から活動している、第二次大戦中に生まれた組織だ。国家によらず、思想を持たず、信仰は無く、民族にも還らない、故に目的も不明。存在理由も不確かでその規模も分からない。唯一分かっているのは、組織は大きく分けて運営方針を決める幹部会と、スペシャリスト揃いの実動部隊の二つが存在する事だ。

そんな亡国機業は……今、存亡の危機に立たされていた。

「クソっ！ クソっ！！ クソオオオオオッ！！ なんなんだ、なんなんだよお前らはああアーーーーー！！」

「オラオラオラアッ！！ どしたどしたどしたアっ！？ 元気がねえぞコラあ！！ 行けよファンゲウツ！！」

「クッ……こっんのおおおおおおおおおおッ！！」

とある施設上空で戦っているのは二人の人物。

一人は、ロングヘアの口が悪い、IS『アラクネ』を駆る女。

一人は、肩まで伸ばした、あちこちに跳ねる茶色の髪をした、ISを駆る男。

男が叫ぶと同時、両腰に装備されたバインダーから、一〇機の牙の形状をした何かを射出した。『GNファンゲ』と呼ばれるそれは、ファンネル同様遠隔操作が可能な移動ビーム砲だ。唯一違うのは、先端部にビームサーベルを発生させ、敵機を貫く事も出来るという事だ。

高速で動くファンゲを、女、オータム背中にPICを展開している装甲脚に装備された砲門で撃ち落とそうとするが、一発も擦る事すらしない。それがオータムを焦らせていた。

今、この周辺で戦っているのはオータムと男だけではない。彼女の恋人であるスコール・ミューゼルや、エムと呼ばれる織斑マドカ





「クツクツク……スコールとか言う女も大変みてえじゃねえか。あつちは結構強えんだろ？ あつちとやりたかったぜえ、IS同士のとんでもねえ戦争つて奴をよお!!」

「く、そ……」

失血のせい意識が朦朧とする。

次の瞬間、オータムの意識はもうなかった。

\* \* \*

『オータム！ 返事をしなさい！！ オータムツ！！』

「ちっ……あの女やられたか……」

「ははっ、まああの程度の人が、彼を相手に数十分相手に出来たのだから誇れると思うけどね」

「ふん……」

彼女、エムはイギリスから強奪した実験機体、サイレント・ゼフィルスを装備しオータム達の付近で同じように敵と相対していた。

彼女の目の前にいる敵 リヴァイブ・リバイバルと名乗る、声から判断して若干男っぽい人間。容姿を含めて判断するとなると、女とも言えなくもないのだが。

「……貴様ら、何が目的だ？ 一体何者なのだ？」

「前者に答える気はないから、あえて後者に答えさせてもらおうかな。僕たちは」

人類の革新だよ。

そう、

何の躊躇いも無く答えた。

「ほう……とんだ妄信者もいたものだ」

「何も知らなければそう言うのも仕方が無いかもしれないけどね」  
リヴァイブは愉快そうに笑う。

……正直、エムとしては亡国機業など、どうなろうと知った事ではない。元々組織に対し従順でもなかったし、己が目的さえ達成出

来るならばつちやけどこでも良い。たまたま亡国機業がそれに適していて、たまたま自分がそこに所属していた。ただそれだけだ。

自分には監視用のナノマシンが注入されているが、どうもいつの間にもやらそれが働いていないらしい。どういう事なのかはさっぱりだが、エムには好都合。別にエムはリヴァイブへの戦意はないのだ。「オイ」

「ん？ なんだい？」

だから 正直、自分の目的が達成出来るのならばコイツらの仲間になっても何の問題も無い。

\* \* \*

スコールは焦っていた。

先程、彼女の恋人であるオータムからの連絡が途絶えた。今彼女と相對しているヒリング・ケア、ブリング・スタビティ、デヴァイン・ノヴァと名乗る三人を相手にする彼女は、なかなかオータムの安否を確認しに行けずにいた。

三人のISはこの国にもないものだった。

全て全身装甲で、一機はISなのかと疑ってしまうような物だった。  
フルスキン

ヒリングのISは遠距離戦用ISらしく、手に持った巨大なランチャーで高出力のビームを撃ってくる。

ブリングのISは接近戦用のISのようで、たまに撃ってくるビームのバルカン以外撃ってこないし、展開もしない。主に拳や肩に設置された突起に赤い膜のような物を形成して殴ってきたり、両指先から発生する爪状のビームサーベルで攻撃してきたりしている。

そして問題なのが、デヴァインの駆る謎の機体。

オータムのアラクネの様に人形ではないが、こちらは人形の部分など一欠片もなかった。

アームのような物を持ち、その先端にはクローが装備されている。

外観は新型戦闘機と言えばもしかしたら通るかもしれない、と言った風だ。これをISとして装備しているとすると、正直言って信じられない形状だった。

役割が決められて作られているようで、唯一の共通点は、何の意味があるかは分からないが、赤い粒子を放出している所だけだ。

はつきり言って一体一体であるならば、これほど手こずる事も無かっただろう。が、こちらよりも性能が高く、三体揃い、その完璧なコンビネーションまで取ってくる彼らには、さすがのスコールでも少しばかり押されるのも無理は無かった。

「クツ……こんな奴らの相手してられないのに……っ！」

「落とす……ッ！」

ブリングが爪先にビームサーベルを展開させ、オータムに突っ込んでくる。後方からはブリングの砲撃による支援が迫り、オータムの背後からはデヴァインが機首の高出力ビームを放ちながら、クローム内に内蔵したミサイルを撃ち、高圧電流を流してくるアンカーを両クロームから射出した。さらにそのアンカーから四機のアンカーが飛び出す。

スコールは、ほぼ一斉に迫り来る高出力ビームを紙一重で避け、飛び出した四本のアンカーを高速軌道によって避けつつ元々の一本を斬り落とした。

そんな彼女に迫るブリングのビームサーベルを避けて胴体を蹴り跳ばし、追尾してくるミサイル群には、なんと逆に突っ込んで行き、その隙間を通り抜けた。それを無理矢理追尾しようとしたミサイル達がぶつかり合い爆散して行く。

「邪魔よッ……！」

瞬間、急接近したスコールのISの右腕が、絶対防御すら無視してデヴァインの腹をブチ抜いた。

「ぐ、ガアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?」

「デヴァイン……ッ……ッ……！」

「エム……ISによる殺しをあなたには禁止しておいてなんだけど

……今はやらせてもらおうわ……ッ！」

「う、嘘でしょ……？ な、なんでアンタなんか……それを……ッ！？」

ヒリングが指差す先。スコールのISの背中に装着された箱形の物から放出される赤い粒子。

「……棗恭介、唯一ISを使える男。いえ、もう唯一ではないわね。オータムの目の前にいたようだし。彼が使っているISから放出される緑色の粒子を何とか再現しようとした結果がこれよ。現物入手は、CBの存在を警戒して出来なかつたけど、何か特殊な動力であるのは分かった。まあ最終的に、トポロジカル・ディフェクトを使用しているらしいことは分かった。でも完全再現には私達では一〇年だかかかってしまう。だから擬似的に造り出してみたの。完全に同じ物かは知らないけど、あなた達のも似たような物でしょう？ おそらく性質も」

疑似GNドライブによって生成されたGN粒子を利用した装備は、どんな出力だろうと絶対防御を貫通する。どれだけリミッターをつけようが、ビームスプレーガンの威力で、装甲さえ貫通すれば相手の体にビームは直撃する。

彼女たちはオリジナルを持たないが故に知る由もないが、実はオリジナルのGNドライブを使用しても同じ性質を持つ。が、こちらはどついう訳か専用のリミッターさえかければ、非殺傷、絶対防御を貫通する事なく攻撃出来る。逆に疑似GNドライブにそれをかけても、何故か非殺傷にはならない。現在、東とカタギリがなんとか出来ないかと検討中ではあるのだが。

「まさか……人間ごときが疑似GNドライブを完成させるなんて……」

「正確には粒子の生成に成功しただけで、ドライブ化はまだね。おかげでまだこんな……そうね、GNコンデンサーとでも言おうかしら。これだけしか使えないのだけれど……」

デヴァインに突き刺した腕を抜かずにそのまま振り上げた。デヴ

アインの体が、脳漿と血をぶちまけながら墜落して行く。

「あなた達をただ殺すだけなら余裕だわ」

スラスターに火を吹かせながら、スコールはヒリング達に接近し

『それは少々困るな』

その腕をガシツ、と掴まれた。

「なっ………!？」

「悪いね。でも、まだ彼らをこれ以上やられる訳には行かないんだ。計画に支障が出てしまうからね」

スコールの目は、その機体の頭部アーマーに釘付けだった。見覚えのあるフェイスアーマー。V字のアンテナを額につけたそれは

「ガンダム………!」

「そうさ………」

赤と白のペイントカラーの両腕に一つずつ疑似GNドライブを装備したガンダムは、表情すら見えていないというのに、自信が満ちあふれて見える表情をして、

「このガンダムこそ………この機体こそ、人類を導くガンダムだ!」  
叫んだ。

そのまま掴んだ腕を引き寄せ、ガンダムフェイスが文字通り目と鼻の先にまで顔を近づける。

すると、何故か頭部アーマーを解除しだした。

……エメラルドグリーンの髪をした男にも女にも見える顔をした彼は、フフっ、と微笑み、

「すまない、彼らは些<sup>ちと</sup>か目的を忘れていたようだね。僕はリボンズ・アルマーク。僕たちは君を、いや……君達をスカウトしてきたんだ」

そんな事を……言った。

\* \* \*

……薄暗い部屋の中、唯一光を放つモニターの光が眩しい。

そんなモニターの前で、ライティングカウント閃光の伯爵と周りからは呼ばれている、

『八卦龍第一執行部隊白き牙』ホワイトアングの部隊長である男と、そんな男について行く事を誓った女が二人して立っていた。

モニターにはスコールやオータム達と相對しているリボンス達が映っていた。

「……………」

「ゼクス、やはり気に入りませんか？」

ゼクスと呼ばれた男は、いや、と頭をかぶり振った。

「私はトレーズのように純粋な騎士にも、ヒイロのような戦士にもなれん。なれるのは……ただ目的のために血塗られた運命に行く罪人だけだ」

「……そのトレーズ様ですが、近々動くそうです」

「ほう？ 目的はヒイロか？」

「おそらく」

そうか……、とゼクスは呟いた。

かつて彼を追いつめ、対等に戦った少年がいた。自身をヒイロ・ユイと名乗り、天使のような機体を駆る少年は、今まで何度かぶつかったことがある。あちらがどう思っているかは分からないが、ゼクスにとってはもはや宿命の相手となっていた。

「ゼクス……？」

「……いや。なんでもない」

「良いのですか？ ヒイロ・ユイはあなたの」

「良さ」

あの男は私以外には倒殺されてされてはくれないだろうからな。

そう。

焦る必要も、慌てる必要も無い。

ただそれが事実。

自分が彼以外に倒されてはやらないのと同じように。殺されて

彼もまた、自分以外には倒されてはくれない。殺されて

一度地に落ちようと、必ず再びその翼を羽ばたかせ、彼以外の者の喉頸のどくびを掻き切るだろう。

それが必然。

それが運命。

ゼクス ヒイロ  
彼と彼は、どちらかがどちらかを殺さない限り止まりはしない。  
それが 理。ことわり

ゼクスの口は、楽しそうに、嬉しそうにつり上がっていた。

間章「八卦と白き牙と偽・革新者」(後書き)

パーフェクトにオリジナルルートです。

って言っても、原作沿いにそのルートを行くわけだけど。

ちてちて…この物語はいつたどこに向かっちゃう…



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5118x/>

---

IS～インフィニット・バスターズ！～

2011年11月1日23時22分発行